



さ・

ら

さ

・

修

ら

さ

・ら

さ

・

・

ら

さ

□

さ

ら

さ

ら

ら

目次

修羅ら沙羅さら4	1
----------------	---

修羅ら沙羅さら 4

修羅ら沙羅さら 一篇以二部前半蘭陵王三章後半夷族一章附外雜部

夷族第四

花らが落ちた。舞い散り、無數に降り、舞い、さまざまな色をさらし紫。花らが、向こうを透かし見るような花らが舞い散り、落ち、花らが落ちた。向こうを透かし見るように舞い散り花ら。もはや淡い色彩ではなかった。降り、舞い、舞い散り、顯らかに色づく濃い。さまざまな。薄い。それら、淡い。まさに嘘のような透明さだにも見せて赤、それら、色。青づく紫にかぎりなくちかづいた赤。下卑た色彩。耳元でいきなり誘惑の息を隠す氣もなくふきかけて羞じないような。眞紅。あからさまな赤。品もなにもなく、ひたすらにエレガントな。もはや媚びさえもしない冷酷な。白。やや黄ばんでさえ見えた。にもかかわらずそれを白という以外の形容をする術もないことに抑言葉は屈辱を感じなければならぬはずだった。それなのにあざ笑うような白の複雑。猥雑な白。青みの勝った、そして我が侷にも紫には傾きゝらかなかった紫。色。さまざまにそれら。舞い落ちる無際限の色彩の無造作はまさに花らの色らを曝し、それが花でないことは壬生は知っていた。なぜならブーゲンビリア、その色彩。擬態の花モドキら。すでに、なぜならブーゲンビリア、それは色づいた葉のさまざまに過ぎないことを、壬生は、色とりどりの色は無惨にも思わせてさえさらしたあまりにも色づいた葉ゝたち。壬生は知っていた。小さな白い花卉があった。あくまでそれだけが花だった。花そのものゝまわりをいろどった葉の華美に、みづからをもはやちいさな白黴の付着にひとしく擬態させていた花。隠れたわけではなくて？ ちいさい白。こらした目にしかふれない。隠れたわけではなくて？ ちいさい白。色彩の唯中ただ埋没し、ちいさい白。隠れたわけではなくて？ 花のような、花ひらいた花としかいうすべのない色彩の極度の充満のただなかに。ちいさい白。隠れたわけではなくて？ あふれかえった華美の、舞い落ちる無際限の色彩の無造作はまさに花らの色らを曝し…そして華美。花をはさらさない華美にして華美な花モドキの花のような花やぐ華美ら。隠す氣もなく、花をはさらさない。花は隠れる氣もなく花をはさらさない。隠れたわけではなくて？ 白の花卉は身をひそめさせていた事実さえも気づかずに花をはさらさない。隠れたわけではなくて？ 色彩が舞う。壬生は…舞え。隠れたわけではなくて？ 見得る色彩を…舞え。隠れたわけではなくて？ 見ていた。壬生は…降るように。隠れたわけではなくて？ 夢を…降るように。隠れたわけではなくて？ 見ていた。だから…降るように舞え。隠れたわけではなくて？ まさに花の色、いろいろの花の色のいろいろ。夢の内に。隠れたわけではなくて？ ただ夢見られた夢にすぎなかった。音響があった。

をるうを、
色彩よ
をを、ヲをるうを、
色彩よ
をるうを、
舞い散る色彩よ
をヲ、を、ヲをるうを、
舞え、舞い散る
をるうを、
降りそそぐ
をを、ヲ、を、
色彩よ
をるうを、
色彩よ舞え
をを、ヲ、を、
耳の近くに鳴る、それが…なにが？ 轟音として…なにが？ 鳴り響き、——何が？
なにが音を？
をるうを、
轟音？…なに？
をを、ヲをるうを、
ひとり、…なにが？、と、壬生はひそかに
をるうを、
耳を…なにが？ 疑う。夢の中で
をヲ、を、ヲをるうを、
耳の聞き取り得た…なにが？ 音など
をるうを、
はたして
をを、ヲ、を、
耳は、——なにがいま、鳴り響いていたのか？
をるうを、
と、いまゝさに耳はこゝに聞こえてはいない別の音を聞き取っていたに違いない。——
なにを？
例えばかたわらに眠っている筈のゴックの寝息を、豊満なゴック、肥満に近いほどの肉
附いた肉体を持って余したように、重すぎたように、立って歩き又は座って笑む時又は横
たわって目を閉じかけ或いは時にせき込んだ一瞬にさえも重すぎたように、重力に堪え
がたく押し込まれていたように、蟹股に歩き、重すぎたように豊満なゴック、肥満に近
いほどの肉附いた肉躰を持って余したような、そんないたゝまれなさをだけ肌に曝し、
をるうを、
をおうるうを、
誰もが可愛らしいと云った、彼女はたゞ誰からも

をを、ヲをるうを、
をおうるうを、
そう云われる爲に生まれたような…誰にも
をるうを、
をおうるうを、
誰からも愛される爲にだけ生まれたかのような？
をを、をおうを、
をおうるうを、
そんな？——自分を意図もなく
をヲ、を、ヲをるうを、
をおうるうを、
人の眼にさらし、だから
をるうを、
をおうるうを、
可愛らしいと誰もが云った
をを、ヲ、を、
をおうるうを、
清楚で、きよらかで
をるうを、
をおうるうを、
かわいらしいと、轟音。私の耳が。…と、なにを聞いているのか私は、…と。知らない、
壬生は思ったその、まさにその時に、ゴックは聲を立ててわらっていたのかも知れな
かった。ひとりでめ覚めて？ 耳元で、壬生をのぞきくようにみつめながら添い寝したま
まで、壬生の
をるうを、
をおうるうを、
るうをるうをおるるうを、
耳もとにみだれた笑い聲を立てて、或いは
をを、ヲをるうを、
をおうるうを、
るうをるうをおるるうを、
泣き聲を？——なにを哀しんで？ 或は
をるうを、
をおうるうを、
るうをるうをおるるうを、
泣く自分さえなにを泣くのか気付かない儘に？…或いは
をヲ、を、ヲをるうを、
をおうるうを、
るうをるうをおるるうを、
怒号を？（…ひとしれず）

をるうを、
をおうるうを、
るうをるうをおるうを、
罵聲を？（…あなたがながしたなみだよ）

をを、ヲ、を、
をおうるうを、
るうをるうをおるうを、
憤った声を？（…くいちぎれ、ひとしれず）

をるうを、
をおうるうを、
るうをるうをおるうを、

耳は？（…あなたはひとりで）…と、耳に。夢に聞いた轟音の中に壬生が目を覚ますと明ける寸前らしい暗がりがまなざしのなかにひろがっていたのに気づく。開かれた目は見た。ゴックの家の寝室の中の、白い、そして闇づいた空間の染める儘に黒に翳る壁の色、繊細な。そして傍らの窓の、光を投げ込みもしない青黒い いあかるさを、壬生は気付く、耳がかすかな物音を聞きつづけるのを。必死に隠しごとをして、その不器用の故にすべてを曝しだして仕舞う無惨さ、ないし無防備？ とでもいった、或は例えば恥ずかしげもない全裸で、剥き出された裸の尻をつきだしたまゝで後ろ向きに、…だれも。両手で羞恥した…だれも。顔の赤面とあつい息だけ覆って…だれもわたしをみなかった。裸の尻を羞じたような、

をるうを、
るいるいるいるい
をおうるうを、
るうをるうをおるうを、

そんな音、かすかな
をを、ヲをるうを、
るいるいるいるい
をおうるうを、
るうをるうをおるうを、

なにかを物色し
をるうを、
るいるいるいるい
をおうるうを、
るうをるうをおるうを、

かすかな
をヲ、を、ヲをるうを、
るいるいるいるい
をおうるうを、
るうをるうをおるうを、

なにかを掠め取ろうとし、

をるうを、
るいるいるいるいいい
をおうるを、
るうをるうをおるうを、
あくまでもかすかな
をを、ヲ、を、
るいるいるいるいいい
をおうるを、
るうをるうをおるうを、

なにかに怯えた、
をるうを、
るいるいるいるいいい
をおうるを、
るうをるうをおるうを、

かすかな音。——鼠、と、壬生が気付いたときにちいさな四肢の失踪する音が床を駆け
たのを聞いた。何かを奪い取ったのか。彼らがまさに彼等の領土として知る誰かの作り
上げた他人の空間の中で、他なる誰かの影におびえながら彼等の固有の資産たる喰いも
のを篡奪して走る。強奪し、だれかに屠殺されないうちに。貪る。せつないまでに。凝
視。かすめとるように、彼等に固有の領野を見た。そして無縁の他人の領野に駆ける。
鼠、と、彼等は何かを獲得したのか。彼らはいまだに自分が死んではいない事を知った。
吐くように息づかう。殺されてはいないから。咬む。殺されていないから。血を吐きも
せず、腹は引き裂かれてもおらず、頸は千切れ飛んでもおらず、疫疾は彼の目を黄ばま
せてはおらず、四肢は震えず朽ちも腐りもしない。いずれ死ぬだろう。今は死んではい
ない。だからいずれ殺されるだろう。まさに死。だから彼等は喰いものを囓み千切って
掠め取り駆ける。——鼠、と。その駈ける音に

をるうを、
るいるいるいるいいい
をおうるを、
いいをうをるいい
るうをるうをおるうを、

壬生は記憶に耳をすます、もう
をを、ヲをるうを、
るいるいるいるいいい
をおうるを、
いいをうをるいい
るうをるうをおるうを、

その疾走がどこかに消えた後で、それは
をるうを、
るいるいるいるいいい
をおうるを、

いいをううをるいい
るうをるうをおるるうを、
一匹の失踪だっただろうか？ それとも
をヲ、を、ヲをるううを、
るいるいるいるいいるい
をおうるうを、
いいをううをるいい
るうをるうをおるるうを、
音を重ねた二匹の、ないし
をるううを、
るいるいるいるいいるい
をおうるうを、
いいをううをるいい
るうをるうをおるるうを、
まさか数匹の？
をを、ヲ、を、
るいるいるいるいいるい
をおうるうを、
いいをううをるいい
るうをるうをおるるうを、

壬生は

をるううを、
るいるいるいるいいるい
をおうるうを、
いいをううをるいい
るうをるうをおるるうを、

すでに気付いていた。かたわらにゴックの気配はなかった。だからその身もなかった。夜が明けきるまえにゴックはベッドを抜けた。足を床に着いたとき、今更に壬生は、見れば？

と

あなたも見れば？

見れば？

あなたも

振り返ったそこには朝の朝焼け、その、と。

想う、ひとりで壬生は、…その紅蓮、と、壬生は今更に他人の家にいる気がした。抱かれたあとで勝手にひとり眠りにおちたゴックは、そしてひとりで素肌をさらしたまゝの壬生は取り残された空間に目を覚ます。鼠が駆ける。壬生はひとりで取り残されていて、或いはもうすぐ朝は焼ける。空に。東に。西に沈みかけの白い霞む月を大きく残したままで、満月にすこし足りない月、夜は終わる。もうすこしで、と、昨日の月は、…と、満ちる。もうすこしで、と、…だから？ 旧暦の十三日？…十四日？…もうすぐで、…と

をるうを、
るいるいるいるいいい
をおうるを、
いいをうをるいい
るうをるうをおるるうを、
るをおろお、るをおろおい、

月は盈ちる。もうすぐで

をを、ヲをるうを、
るいるいるいるいいい
をおうるを、
いいをうをるいい
るうをるうをおるるうを、
るをおろお、るをおろおい、

夜は燃える、空に

をるうを、
るいるいるいるいいい
をおうるを、
いいをうをるいい
るうをるうをおるるうを、
るをおろお、るをおろおい、

もうすぐで

をヲ、を、ヲをるうを、
るいるいるいるいいい
をおうるを、
いいをうをるいい
るうをるうをおるるうを、
るをおろお、るをおろおい、

最後に夜は

をるうを、
るいるいるいるいいい
をおうるを、
いいをうをるいい
るうをるうをおるるうを、
るをおろお、るをおろおい、

月は盈ちる…どこに？

をを、ヲ、を、
るいるいるいるいいい
をおうるを、
いいをうをるいい
るうをるうをおるるうを、

るをおろお、るをおろおい、
どこへ？

をるうを、
るいるいるいるいいい

をおうるを、
いいをうをるいい

るうをるうをおるるを、

るをおろお、るをおろおい、

どこ？…と。ゴックがどこへ行ったのか、壬生は探してやらなければならない筈だった。ゴックの家に転がり込んでから一か月が過ぎた。今日は何日だろう？ 壬生は思った。スマートホンは持ち出さなかった。ユエンの家から。捨て置いた気も無くて、存在すらわすれて放置した。だから、と。壬生はゴックに聞かなければ今日が何日で、今が何時か知るすべもないのを笑い、…九月？

たぶん、…と。

もう九月？

壬生は、

おそらくは、…九月朔日？ かくて傷に頌して曰く

あなたに話そう

まさにあなたのために

腐った極彩色のそれら

無惨の死者たちの無残

あなたも知るか？

あなたも知ったか？（…玉散る）

わたしは問う、もはや

その目玉すら肛門が（…玉散る血）

生やした歯と無数の歯ゝに

喰いつぶしたあなたさえも

知っていたか？（…腐った血）それ

その夢のような一瞬の

夢の泡沫に（…玉散る血ら）慥かに私は

見たのだった。何度も、その玉散る須臾

あるいは（…腐った血ら）あなたも

見た、わたしは…何度も。

その女、（…血ら、血、）母と呼ぶべきその

大口を広げた女が（…血ら）何か云おうとしていた

その大口、…何度も。見た、わたしは、あるいは

何かを（…腐った肉）喰いちぎろうとしていた…何度も。わたしは

その大口、あるいは

なにかに（…歪んだ背骨）喰いつこうとしていた

その……何度も。見た。わたしは、（…貪る歯のある肋骨の無数）大口、ある

いは

むしろ（…玉散る）茫然とし唾然とした一瞬の儘に…何度も。わたしは
いつか開いて（…散る血）開かれていたに過ぎなかった
その大口、眼の（…血ら）前に。あるいは
ふいに想いだした懐しさか又は（…死者ら）屈辱の
赤裸々な記憶に（…血ら）聲を（…腐った、）失う刹那に堕ちた
その（…腐り果てた）大口、眼差しは（…極彩色の肉）知る。あるいは
いまゝさに見出した幻の、まさに目に見た
生きた息吹きに、ただ（…肉、歪んだ）我をさえわすれた
その大口、…何度も。わたしは、（…ひんまがった肉に）あるいは
だから（…飛び散った肉汁？）泣き叫ぼうと思った。わたしは、（…体液？）…何
度も。——果たせなかった
喚き散らそうと思った、わたしは（…腐った？）——果たせなかった
その大口、…何度も。見た。わたしは、あるいは（…見つづけていた）さゝや
きかけた

言葉をその、一瞬にして（…咬み）忘れた事實に
気付いて（…咬み砕かれた）言葉をわすれた大口、…無惨な。（…砕かれた）ある
いは

わななく脛の、閉じられない儘の（…その一瞬まで）乾きを感じた
網膜の痛みのいたみのひらかせた大口、…無残な。（…見ていた）あるいは
そこに私が（…その目は）いたことを
そこに居た私が見つめていたことを（…見ていた）
そこにいたわたしに（…なにを？）すでにみつめられていたことを
すでに眼差しは、すでにして
からみあって互を見詰めあっていたことを
いまさらに知っておのいた大口、（…見ていた）…無慚な。その
母なる母の（…母よ）
母なる人の（…母よ）
ひらいた大口が（…せつないくらいに母よ）
噛みつくのだと思った、（…玉散る）わたしは
その人の（…散れ）開いた一瞬の
眼の前の（…散れむしろ）開口
大口の（…玉散る）色
唾液のきらめき（…母よ）
人の粘膜の（…母よ）
なめらかな（…母よ）朱いろ
温度ある色、（…せつないくらいに母よ）わたしは（…母よ）
噛みつくのだと思った、（…息に温度が）その口が
開いたままに（…心臓に鼓動）停滞して、わたしは
噛みつくのだと（…きらめけ！）思った、何処を？

首を？（…イノチよ！）ひとより長く
女より華奢な（…記憶など）
十四歳の首を？ 鼻を？（…まさに、それ）
他人の（…移ろう）それを
あざらわうように（…泡沫の）すべらかに（…夢の如き）ながれた
美しい突き立ちの（…あざやかな）柔かさを？
唇を？（…夢のような）母なる母の
荒れてささくれたそれに比べて
同じ部位とは思えない紅を？
眼を？ 母なる母の
大口を見詰めた潤いの目を？
むしろ睫毛を
そつとはやされた睫毛の繁みをだけあなたは
噛み千切るの？ 知ってる
あなたはすでに（…息遣う）知ってる
あるいはすでに
知っているべきをさえ忘却した
狂気のあなたは（…息遣う）もはや顯らかに知っていた
極彩色の（…息遣う、唇には）
鬩りの肉と血ら
血と骨らと、神経らと（…唇に唾液）骨と
筋と贅肉らと垂れた（…唾液の糸）腸と腸らと
心臓と脳と脳細胞と細胞ら（…きらめく）無数の
眼球と無数の歯の（…きらめく、むしろ）歯ら、極彩色の
あなたは（…むしろきらめく）のけぞった
背骨をみずから（…きらめく）へし折りながら
あなたはまさに（…きらめく）知っていた
變形した心臓の（…きらめきだって）
目覚めさせた腕に（…かがやけイノチよ。）腸を
引きちぎりながら
あなたはまさに（…そしてまさにあざやかに）知っていた
その女（…かがやけイノチよ。）母なる人は
その時に、大口の儘に（…まさに永遠にも）
なにも云わずに（…かがやけイノチよ。）窓から消えた。その最期の日たぶん
彼女は笑おうとしたのだ。あなたの投身。その（…かがやけ！）大口で
あるいはわたしに、投身自殺？（…イノチよ！）…わたしにだけに
彼女はひとり、…まさか。（…イノチよ！）笑いかけようと、知性。
知性あるもの以外にまさか自殺など？
かくに聞きゝ壬生すでにユエンが家を出きかくてひそかにも壬生ユエンが家出でたるは
ひそかにもレ・ヴァン・クアン死してひそかにも失せし日ノ明けたる日なりき又ひそか

にもレ・ヴァン・クアン死シてひそめひそめて失せ失せてひそかにも明けやラぬ夜にレ・ハンソノひそかにも妹に弑したル後のひそかにも朝なりき又ひそめひそめてレ・ハン弑さレ死シてひそかにも失せ失せたル首を持てるレ・ダン・リーひそめひそめて美豆迦良ひそかにも焼きたる顔が儘にひそかにも逃げ失せテ失せシ明けノ前ノ夜ノ明けてすデに雲の向こうにノみ朝焼けた空をさらせる雨のひそかにも白濁ノ下のひそかにも朝なりきかくてひそめひそめてひそめきれずに壬生ゴックが許にひそかにも身を寄せきかくてひそかにも

こころのなみだつ

ひそめひそめて

こころのみなみだつ

なみだつその

さざなみよなみだちてなみだてゴック壬生が大聲にさざなみよ呼ばれたルそのさざなみよ朝麻陀岐爾駈け下りさざなむまに駈け來たりてさざなみよ鐵門引き開けたルにゴックひとりさざなむまに我に返り壬生を見上げてさざなみよ見かくてさざなみよ観て觀をはりてさざなみさざなむ鼻に壬生が肌ノさざなみよ芳香觀じ芳香さざなみよ甘やいで匂ふを觀じてさざなみさざなむ惑ひ摩度非ツツもさざなむまに歡喜しさざなみこころの

こころの

ひまつ？

そのさざなみをしれ美豆迦良が爲にこころよこころに歡喜し歎き、ユエンが爲にこころよこころに歎き、憂ひき壬生が爲にこころよこころにさざなみをしれ憂ひき哀れみき何物ノ爲にか知らずにこころよこころに哀れみきかくてカルがゆゑにこころよこころにゴック壬生に添ひて抱キこころよこころにさざなみをしれ抱かれて添ふにかノ朝のこころよこころに家ノ庭なる樹木の翳りが下にこころよこころにそれ

さざなみをしれ

まさにいま壬生が腕の中ゴックひとりさざなみを我に返り壬生を見上げてさざなみを見かくて観てさざなみを觀をはりて鼻にさざなみを壬生が肌ノ芳香觀じ芳香さざなみを甘やいで匂ふを觀じてさざなみを思はずに云さく秘密だね、…と。

あなたはささやく。

と。思う、不意に

唐突に

泣き止んだ後の茫然の眼差しで。——先生と、…と

先生とわたしの秘密だね。

と、あなたはささやく

何が？

と、…先生がここにいることが。…と

あなたはささやく、と。まさにささやくき聲としてささやく、そして

あなたはささやいた。…と、壬生は心に、…一つぶの。

見た。壬生は、涙の一粒さえ流さなかつた眼差しはかくて泣きて泣き泣き已みたる後の涙かはきかけたる気配に潤むゴックの眼差しを壬生は見きかくて頷して

まるでその異國の六月のように
どうしたの？
紫陽花の花の濡れる季節に
かの女はささやく
いまだ、その
どうしたの？
夏の気配をさえ兆さない頃のように
まるで不意に
ひそかに葬った春の後の
夜に太陽が
名残りだにない雨の匂いに
日蝕の
ことごとく土を薫りたゝせ
翳りをさらすのを見たように
アスファルトをも薫りたゝせ
どうしたの？
又はコンクリートをも薫りたゝせ
まるで不意に
もしくは木材をも薫りたゝせ
西の果ての
瓦のことごとくをまでも
遠い沙漠に
薫りたせその季節のように
干上がった空が
潤う。濡めった大氣に樹木はわたしたちの
さらした巨大な虹を
傍らで、あきらかにわたしたちには
わたしの笑んだほゝ笑み
他人のようにわたしたちを
かの女の爲にほゝ笑み
わたしたちをも
じぶんの爲にだけ
胸に飛び込んだ
わたしの笑んだほゝ笑み
ゴックのひそかな歓喜さえも
顔を見上げて
他人ように。眺めもしない赤裸ゝな
開けた鐵の…白
冷酷をさらして潤う。他人として、葉は
門の向こうで同じように

他人として、枝の先
わたしと同じように
他人として、葉と葉と、無数の枝らに
アスファルトと
からむ。無数の葉らは他人として、からまれた葉と、枝にしなる
コンクリート
他人として、しなる枝の下に伸ばした
バイクの
他人として、葉と葉らの無数と葉と
プラスチックと
他人として、ぶらさげた蔦らの無数と
鉄と
他人として、あるいはそのすさまじい繁茂の
合金と
野放図な垂れさがりの無数を、他人として
同じように
それらことごとくを
濡れながら
他人として。濡らし、濡らしきり
濡れ
そして潤う。他人として、髪の毛が
したたらせ
その膨大な…他人として？
水滴を
黒い色とその散らす
したたらせながら
光沢の…他人として？ 白濁
髪の毛の先に
匂い立ち、…かがやき。その雨の馨を
したたらせながら
匂い立たせ、…かがやき。その雨の馨に
前髪の
匂い立つ、…かがやき。知っていた
濡れた先にさえ
わたしは見つめた
したたらせながら
ゴックの潤う
どうしたの？
眼差しから目をそらし
たすけて

高光る
わたしは云った
上にひろがる空を見れば
微笑を
茜差す
あくまでも
日の光さえさらさない
くずさない儘わたしがささやく
降らす雨に隠れた雲の
聲を
青を隠す白濁の色を貫いて
ゴックは聞いたに違いない
地にも落ち…濡れた風景。濡れきる前の
泣いてるの？
地のもを照らし…濡れた風景。濡れきる前の
ゴックは耳に
ほのかにも…濡れた風景。濡れきる前の
…ね？
揺れる葉、枝をも…濡れた風景。濡れきる前の
ゴックは聞いた
かすかにも…濡れた風景。濡れきる前の
泣いてるの？
その色と…濡れた風景。濡れきる前の
だれが？
かたちだに残らずに…濡れた風景。濡れきる前の
先生、泣いてるの？
さらさせ暴く朝の光は…濡れた風景。濡れきる前の
微笑んだ儘に
それでも雲を…濡れた風景。濡れきる前の
口づけた
向こうから照らし…濡れた風景。濡れきる前の
ゴックの額に
すでに知る
前髪の
赤裸々に
濡れた上から
わたしはすでに知っていた
喧嘩した？
すでに知る
ゴックは云った

隠すゝべもなく
どうしたの？
わたしはすでに逃亡？
どうもしない
逃げ去ったわけではなかった
どうしたの？
それはわたしに明らかだった
たすけてよ
捨て去ったわけではなかった。それさえ
逃げてきた？
だれにもあきらかにさえも思えた
…ね
探すだろう
逃げてきたの？
わたしは思った
かくまってよ
棄てられた
私は笑う
かわいそうなユエンは
唇に
探すだろう
聲を立てて
警察にさえ連絡し
いまだに額に
親族たちに聲をかけ
口づけた儘に
かの女を捨てたとかの女が知った
たすけてよ
わたしをだけ
帰らないの？
探すだろう。数日の…
ゴックはささやく
何日もの間
帰れないね
数日にわたる…
ゴックは云った
何日もの朝に
もう、ここに
そのころ空は朝の内だけ
わたしのところにいるしかないね

かならず雨を降らせていたのだった
ゴックははわずかの
だからすでに
微笑も見せず
すべてはすでに
しかたないね
潤っていた。何度目かに、それみづからの
泣いてるの？
所爲ではなくて、何度目かにも
わたしのところにいるしかないね
すべてはすでに
泣いてたの？
したたらせていた。何度目かに、水滴を
もう帰れないね
みづからの、何度目かにも
眼差しに
垂らしたわけでもないその水の
笑みの翳さえ差さないままに
粒を無数に、何度目かに
唇が立てた
したたらせ、何度目かにも、それでいい
笑った息を
私は思った
ゴックのそれ
もはや自分の
唇は
歸るべきところさえもなくした
見上げた顔に
そんな喪失の気配を擬態し
雨に濡れながら
それでいい
めずらしく
私は思った。すでにして
目を覆った
わたしはすでに生きられ盡した
眼鏡のレンズは
わたしのイノチを
水滴のむこうに
すでにして、なにも…なにも生きられもしなかった今にも
かたちと色を

わたしはすでに終わりの先に
くずした眼差しの
わたしの骸を、それでいい。何度目かに、すでに見ていた
わたしをだけを
そう思った。何度目かにも
見つめていた
歸るべきところさえもなくした
濡れちゃったね
そんな喪失の気配を、それでいい。擬態し
ゴックはささやく
わたしは自分の、何度目かに、素顔を感じる
さむい？
雨は降り、何度目かにも
ゴックは
それでいい。わたしをぬらし、何度目かに、濡らす故に
つめたい？
何度目かにも、雨は降り
ささやかれた
降る故に、…それでいい。濡れた
顎の下の
ゴックを濡らし、何度目かに、濡らす故にまさに
聲を聞く
雨は立てた。何度目かに、その音を
さむい
振るえる音。何度目かにも、叩く雨に
ささやく
叩かれて故に、何度目かに、響かす音を
わたしは
ことごとくの、何度目かにも
ゴックのささやきを模倣して
雨にふれたことごとくのものに、何度目かに
つめたい
何度目かにも、紫陽花の
さむい？
その花の色を私にだけは
さむい。俺のからだ
思いださせて白濁し、何度目かに、猶も
拭いてよ。
雨はひたすら降り続くものを
——ね？

8月の終わり、壬生がゴックの家に住みついて一か月近く経っていた。それは壬生も気づいていた。時に市場に食材を調達に行く以外にゴックは始終家にいた。故に壬生も始終その家にいた。ゴックは明らかに新型コロナ・ウイルスの市中蔓延を恐れていた。壬生はかならずしも恐れた譯でも無かった。時に救急車が鳴った。封鎖された町の中にその音響は悪戯らな程に響いた。コロナだよ、と。ゴックはその度に壬生に耳打ちした。独り語散、むしろ自分に教え諭すように、…たぶん、と、その度に至近の頬に、…でも…と、壬生は笑いかけた。…交通事故じゃない？ たまには、…と。ゴックの眼差しがその瞬間に、まるで、いまだ壬生の唇さえ知らないかのように羞じた。壬生は間近の頬に、わざと愛撫するように口づけた。ゴックがもはや目をとじてたことを壬生は知っていた。ゴックは瞼が閉じて、そして自分が何を見てもいないことさえ氣附かなかった。壬生は嘲るに近い可愛らしさをゴックに感じた。故に嘲笑するに近い笑みを、あなたは、と、頬にふれた儘に笑みを唇にさらし、…あなたは

と。

ゴックは思う、すでに、と。

もう

わたしをだけしか愛せなかった

だから、と

あなたはだから、と、かくてゴックは気付く、いまさらに、と

もう、と

わたしにすがって

わたしにだけすがって

わたしのそばで

わたしに必死にじゃれつきながら、必死にひとりでなんとかあなたは

生きるしか？…と、壬生はゴックを抱いてやらなければならないだろうと思った。そうしなければゴックはとまどうだろう。なぜなら彼女はすでに私が彼女に餓えて、飢え、そして求めていると思っている筈だから、と。そしてその三度に一度は壬生はゴックをその場で抱いた。寝室で。居間で。臺所で。庭の樹木の翳りで。ゴックはかならずしも多くの友だちを抱えた女ではなかった。壬生はそれに気づいた。始終應答するなんらかのメッセージ通信以外に、彼女の電話番号が直接鳴るのは稀だった。おそらくは大半が業務上のそれ。だから壬生の、ゴックの家での生活は彼女にじゃれ合って、彼女を愉しませてやる以外に時間の潰しようもなかった。生活は、費用も家事もなにもかもゴックがみた。壬生はただゴックのそばに存在したに過ぎなかった。ブーゲンビリアの夢に目覚めたその日、壬生は空が明けを知ってから見当たらないゴックを探す爲に、そしてなにより尿意の爲にベッドを出た。カーテンをはぐり、窓の外を見た。いつもと同じく、空に朝焼けは見られなかった。いつもとおなじように窓は西向きだったから。いつもと同じように壬生は部屋が西を向いていたことにいまさらに気付いた。思い出した。いつかゴックが云った。沈む日の夕日があざやかに部屋の中に、ベッドの上の壬生の裸身の横たわったのをさらけださせたときに、——お酒飲んだみたいだね。

壁際に、ひとりだけ先に服を着たゴックは云った。ひとりだけ立ったまま、振り向きざまに

——ひとりで、…
途中で壬生がやめた後に
——ね？
トイレに立って、ひとりだけ
——ひとりで、内緒で。
ショートパンツだけ穿いたゴックは
——お酒飲んだみたいに
壁の斜めに投げた斜めの
——真っ赤だよ。
長い鬚りの中に
——熱でもあるみたい。
息遣うたびに、不意におどろくほど豊かな
——コロナ？
胸を殊更に大きく上下させて
——死んじゃうの？
鳩尾のくぼみに
——隔離、されちゃうの？
おそらくは
——コロナみたいに
壬生が付着させたに違いない汗を
——真っ赤だよ。

垂れ落とした

壬生はその時、ゴックの茫然としたにも似て笑みつづけた眼差しを見ていた。ゴックは自分を見ていた。壬生はそれを知った。壬生は、自分のあお向けた肌のことごとくが入り日の紅と朱と橙と黄に染まりきっていることをは知っていた。肌に温度があった。光の、そしてカーテンは引き開けられたまゝだった。凝げるものはなかった。だれかが窓の向こうの、同じ二階の窓の向こうで上半身だけの裸軀をさらしたゴックの、横殴りの朱にそまった裸軀を見い出すかもしれなかった。例えばふと、スマートホンから見上げて見た、いつもどおりの目の疲れの、いつもにない眼差しの中で？ 壬生はそう思った。壬生はゴックを見て、ゴックの見つめる眼差しを見つめた儘に、——白濁の向こうにと。

ゴックの方がむしろ朱に、と
壬生は思う、——その黒眼の白濁
あざやかに、酔ったようにも。顕らかに
ひかりのこまかな白濁の向こうに
あなたの方こそ朱に染まって
きらめきの白
鮮明な朱に

あなたが見た私をはわたしはいまだにしらないままに、…と。壬生は指先で自分をなぞっていた。いじり、なぶるようにいじり、いじるようになぶり、ゴックの眼差しの爲にだ

けそうするように思った。あるいは、もっと素直に、自分自身がそれを求めているようにも。快樂として？ かたちを、…指先がなでつづけた形態を、ゴックの眼差しが見つめた氣配はなかった。その事実も、…なにを、——と。

壬生は思った。

あなたはなにを

…と

わたしのなにを

どこを？

と

なにを見たの？…微笑みかけたその頬の上に、ゴックの眼差しだけは笑んだ氣配だにもさらさずに、そして何の變形も、わずかにもないまゝに、壬生の眼差しの中であきらかにゴックは笑んでいた。壬生は、ゴックの唇が何か言いかけた気がした。そうではなかったかもしれなかった。ただ、くちびるは開きかけたかたちに停滞した。壬生は、朱のひかりの切れた脛の下に、青みた鬚りの中に暗み、　んだ儘に白い肌の色をさらした脛にゴックを、そして想う、どうして？——と、ゴックは、

わたしは

…と、その時に、彼女は未來をさえも。…と

もはや未來をさえもとめなかった

と

どうしてだろう？

わたしは、…と、ゴックは

終わりをさえもとめないで…と、もはや

まるで

聲を自分の爲にだけひそめたかのように

と

どうして？

と、…まるで

だれにも聞き取られないように

だれよりも

と、自分の爲にだけ

聲を

あなたよりも

と、聲をひそめ

むしろあなたと未來を求めているのに？

と、殊更に聲を、聲をだけひそめ、

どうしてだろう？

わたしは明日

と

もはや

何がおこるべきさえもしろうとしなかった

と
今
もはや
あなたをひそかに
今
と
もはや
あなただけをひそかに
と
今
もはや
みつめながら？

と
今
ひそかに
もはや
と

今、あなたをだけをみつめながらにも、と、壬生は、あやうく聲を立ててわらいそうになったその一瞬に、…なぜ？ と、壬生は心に問い、…なぜ？ と、壬生は、隠しようもなくもはや、聲を立て、笑いそうになって、もはや、立ちかけた聲を抑えられもせずにかくて儂に頷して曰く

いきさえできないほどに

なまえさえ

あなたはわたしに

その

わたしにだけに

なまえさえもしらない

しがみつく

その花をみて

わたしをもとめて？

想う。あなたを

もとめられて？

なまえさえ

もとめられたと、かたく信じ

わすれた花をみて

もとめて？ みづから、もとめられるまま

想う。あなたを

うもれるように

赤い花に

しがみつ

白い花に
うずもれるように耳に
あなたを想う
自分の喉が立てた音を聞く
紫の
青紫の
白の縁取り
ふちどられた赫
青い赤
黄色の一色
ちいさな黄色
斑点のある
赫
橙の
ひそかな斑点
斑らの
色
いきさえできないほどに
けものように
むさぼられたくちびるが
ないてごらん
ときに触れあう歯をさえ恥じず
うゑたけものは
むさぼる
なきもしないけれど
ひたすら、もはや
ないてごらん、もさぼる
すすりあげるように
もさぶるどんよくなけものゝように
むさぼる、もはや
ないてごらん
しゃぶりつくように
うゑたけものは
むさぼられ、もはやざわめき
むしろむくちなまゝだけれど
わめき、さわぎ、ちりぢりにみだれる
ねらうけものは
われをわすれたところの奇妙な
かたくなゝまでに、くちもきばも
沈黙に似た空白の内にも

ちんもくするけど

明日

けもののように

月の海に雪の降ることはないと思った

そして瞬間不意にせき込んで身を曲げた壬生をゴックはそのまゝに、身動きもせずに見つめるばかりに、眼差しに見るくねらせられる身の、急激な呼吸の肺のわなゝきに骨格にゝぶい、ちいさな、鋭い痛みを散乱を壬生は感じながら咳き已まないまゝに、眼差しは見るまゝに咳込む肉体のくの字に曲がった、肌には光澤。入り日の投げた、容赦もない。…紅。赤裸ゝな？…あざやかな。そして壬生は見ていた、あざやかにその床。ゴックの部屋の、日本風のフローリングに這う知らない誰かの、——ゴックの縁の？——それともたゞ、誰とも無縁の？…それ。死者らの翳りの数軀の肉と骨らの無数の、無数の肉ら骨ゝの骨の流動。出来損ないの生クリームをぶちまけたような流動。極彩色に、熟れ合い流動するする個体の流動。重なり合った肉、肉らの無数、その色、色らの無数、それら、匂い、匂いらの無数、それら、真ん中の生えたいくたり分かの指の、手のどの指ともさだめられない指というにすぎない指らの指が、無数の肉の流動の無数のなかに埋没しかけた眼球の広げた口蓋の歯に、歯ゝらに。噛み千切れられ且つ観じられた痛みの存在さえ眼差しにはさらさずに——痛み、

そして痛み。痛む苦しみに

痛み、まさに、ひきちぎられているのに？

と、壬生は

なにも？

ひきちぎられ、痛んで痛み、

そして痛みに。

なにも？——痛みをも、まさに痛みに

噎せ返りながらも？…と、流動する肉の個軀らの無数の流動はみずからを飲み込み落とし込みながら増長しそして流れ出すように…どこに？ 床を…どこに？ 這った。壬生は目を、…どこに？ その目を開いたそれを、…どこに？

それらはどこに？ そこだけ静かに音もなくそれは見つめながら偈を以て偈に頌して曰く

あなたに

あなたに話そう

まさに

あなたに

うつくしいひと

思い出すだに

ひたすらに、今も猶も

うつくしいひと

唇さえもが

うつくしい

あきらかに

生き物の、赤裸々なまでに息づいた
内臓めいた
不意の露出…唇
かくさるべきものの
いきなりの秘部の露骨な露呈
肉の色とも
血の色とも、まして
肌の變色とも
さだめがたい色彩の無残
そのくちびるだに
うつくしいひと
その、あ音
血まみれなの？…赤い
唇が多用した
その、あ音
血まみれなの？…赤い
かすかに
血まみれなの？…赤い
ほんのかすかにだけ
濁音をひそませた
引き裂かれた腹
血まみれなの？…赤い
皮膚の切れ目に
血。それは流れ出し
あふれだし
その、あ音を聞いた
心がただ
それ、心がただこころとして心づいたときには
すでに絶えた呼吸
わたしのそばに彼はいた
あなたも見た。あなたも聞いた
すでに絶えた呼吸
惨殺された肉躰は
すでに死んだ。稚彦の
その、あ音
あなたとわたしが
引き裂かれた肉体は
すでに…死？
あるいはわたしたちが
つまりは

わたしそのものが
みつめつづけたそのうつくしい
うつくしいひとの
その雨の日に
引き裂かれた腹部
くちびるの吐く
あ音の多様
わたしは見つめた、その一瞬の
茫然…死?…稚彦の
大津寄稚彦は
その音をしか
口にしないと誓ったかのように
稚彦の死
いつでもさゝやいた
雨の中の、わたしに
あの多彩
私に見つめられた
稚彦の死
わめかれるそれ、
濁音のあ
詈するそれ
他人の死。あくまでも
濁音のあ
わらいとぼした…あ
見つめられたのは
濁音のあ
わななくような
他人の死。もはやあきらかに
濁音のあ
さざめくような
わたしには、ふれることさえ
あの連続…濁音の
もとから知性などないのだった
ましてそれを…他人の死
わたしのようには
知性など
まして。味わうなど?
その母のようには
知性など
稚彦の死を

私は茫然の眼差しに見た
その父のように
知性など
羞じられるように
言葉も無く、わたしは
誇られるように
わたしはひとりで
けなげなほどに
ひとりで雨に
讃えられるように
雨の中に
その知性の無い
誰が彼を？
誰が？
うつくしい人は人の目の前に
誰が稚彦を？
ささやく
あ音で
さゞめく
あ音で
罵り
あ音で
泣き叫ぶ
あ音で
罵倒する
あ音で
稚彦の誕生日に
十歳の？
誕生日会に
彼の家で
ひらかれた誰も
私以外には
だれもいかなかった
彼の爲の
あるいは
父と母
母と父の
父と母みずからの爲の
稚彦の誕生日会に
彼の爲のプレゼントを

彼が
決して自分では読まず
決して自分では理解せず
決して自分では興味さえ示さない
わたしの祖母の
撰んだ星の王子様の
6歳用の絵本を
まるで自分が貰ったかのように
まるで自分にささげられたかのように
その母
結子という名の
稚彦と同じように
うつくしい
稚彦にすこしも
似ない女は
はるかに年上の掌で
わたしから奪い
稚彦にささげた
まるで彼女が貰ったかのように
まるで彼女にささげられたかのように
稚彦ににさしだし
まるで自分があげたかのように
まるで自分がささげられたかのように
稚彦は叫ぶ
あ音の多様
目を剥いて
うつくしいひと
稚人はつぶやく
あ音の多彩
知性の無い
くちびるの自在が
自由にさらす
あ音のさまざまを
わたしたちは聞いた
私以外に
誰も来なかった誕生日会に
歸りぎわに
久生は云った
ありがとう、と
まるで自分がその爲にだけ

わたしにして貰ったかのように
まるで自分がその爲にだけ
わたしにささげてもらったかのように
まるで自分がその爲にだけ
生まれたその日を
いわれたように
かなしいとも
むなしいとも
あわれとも
おもわないわたしは
かなしいとも
むなしいとも
あわれとも
思わない稚彦の
知性の無い目を擬態して
かれと戯れた
いつものように
わたしとかれを
みつめる彼の
両親の
四つの黒目にみられながら
稚彦のあ音を擬態しながら
わたしはかれと
ひとり戯れた
おそらくは
かれをかなしみ
かれをむなしみ
かれをあわれみ
かなしいとも
むなしいとも
あわれとも
思わない儘に
知性の無い
うつくしいひとと
戯れていた
窓の外には三月の
不意打ちの雪

嘘だ、——と。壬生は思う。壬生は知る。十歳の頃、その年に、春に雪など、三月に雪など、——と。降りはしなかった、ひとかけらさえ、と、壬生は、稚彦を思い出したその昼に、その日の何度目かの戯れに、ゴックの乳首に唇でだけやわらかく、ひそかに彼女

の爲にだけやさしく咬みつき、むしろ舐め取るようにも噛みつきながら、嘘だ、——と、
体温。壬生は、そしてさびしいの？

と。

どうして寂しいの？

舌がふたたびふれた。

わたしがいるに、どうして？…と

壬生の舌が、ふたたび離れ

ゴックは未だ目を閉じないままに、…淋しいの？

ふれそうな至近に、舌が

知ってる。——と。思う、ゴックは

停滞して、壬生の舌は

あなたは寂しい、今…と、

何にも触れずに

あなたの故郷にいないから

聴て唇は

わたしの肌だけが

吐く。

そのあたたかさだけが

息を、その

すでにやすらかに棲むべき故郷と知りながら

吐き出された息が

寂しいあなたの爲にだけ

ゴックの肌に

わたしは肌を

触れた時に

ささげたのだった、と、ゴックは聲を鼻にだけかすかに立て、まばたきもせずに仰向
けの、板張りの床の堅さとつめたさを背中に感じた一階の居間の見上げられた天井に、
外のなにかゞ光り揺らませた陽炎のわな々く翳りを——光りを？ゴックは見て時に、ま
さにその時に我を忘れた。にもかゝらず、と。壬生の唇は自分の濡らした唾液の迹の、
肌の上に濕めり、乾かずに唇をふたゝびぬらしたのに厭いながら、——今。と、眼差し
の中には——今も。と、雪の色が。その、——今。と、温度。指先にふれたその、——
今。と、凍り付き、とけてゆく——今。と、その温度さえもが、——今。と、かくて儼に
頷して曰く

見てごらん

知っていた

もう

あなたにだけに

茫然として

みつめられながら

沈む日の

ゴックにだけに
最後の光の紅に
みつめられながら
朱に
知っていた
橙に
私を見詰める
黄に
そのまなざしに
その複雑に
その爲にだけ
そまった肌を
笑んだ眼を
見てごらん
そらして、そっと
わたしに戀した
右をみれば
あなたの最後の
窓の向こうには
ただひとつだけの
破滅じみた
あなたの愉しみ
夕焼けの色
目を奪われ
焰のかたちを
見つめながらに
さらしはしない
失神すれば？
焼盡の
それ以外にもはや
その一瞬前の
あなたのイノチに
最後の色
価値など無いと
今空は、断りもなく
あなたさえもが
破滅した
知っているから

かくに聞き、八月此の月通シてダナン都市封鎖繼續せり故壬生ゴックが家に遁レ外出等
なシ又ゴックかつて壬生と俱なりテ勤務シたりき送り出シ會社閉鎖繼續さしたレばゴッ

ク壬生と俱なりテ外出せず市場等規制かゝりて一人につき三日に一度ノ來場入場ノみに制限スゆゑにゴック三日に一度市場に詣で、食材等買いだめき壬生を頑なに俱なはず此レ壬生の身ノ危険及ぶをゴック厭ひたりキゆゑなりき一か月に渡りて終日ゴックが家に籠りをれば壬生及びゴック自然睡ミテ睡ミ壬生ユエンが家に一度も歸り詣づることナシ又壬生ユエンに斷りなく家出でたればユエン是レを探シて探シ求めキは道理なレどもゴックひそめて壬生が在宅のこと誰にも語らず明かさずテ又ユエンとゴック互ひに連絡シ合ふ仲になければ壬生ヲ問ひて訪ふもノ誰もあらざりきかくて八月の六日ノ日朝此ノ時殊更に救急車がサイレン鳴り響ク多かりき壬生一度目に未だゴックが傍ラに寝りたるに聞き、後二度目に9時にメ覺めたるゴックが爲に目玉焼き作りたるに聞き、後三度目食パン等ゴック購入に出で、不在ナル十時前聞き、後壬生未だゴック歸らずシテ二階なるゴック部屋にありてなにといふともなくに窓の外町を見ルに聞き、かくて此ノ時に壬生足ノ下に並び立タル樹木の切れ目に見えたる路面にゴックが乗りたるスクーターの歸り着ケルを見きかくて頷シテ

その朝に

サイレンの音に

もの珍し気に

ゴックを起こそうとした私を

うす目に見上げて彼女は見つめた

憎しみと（…あどけない）

限りもない（…あくまでも）

軽蔑と（…自分が）

容赦もない（…だれかに憎まれることが可能である事さえも）

懐疑のうちに（…きづかない、そんな）

にらみ、薄めの儘に（…あどけない）

言葉もなく（…あどけないあなたよ）

そして（…知れ）

失神するように眠り落ちていくゴックを見た

微笑乍ら（…すでにして）

かならずしも（…すでにしてその身の穢れさえ）

ゴックを（…あなたは）愛したという譯でもなく（…すでにして）

あきからに（…知っていた事を）彼女を（…あなたは知れ）

やさしく愛してやりながら

何だったのだろうか？（…あなたは）

わたしは思う

愛という、その言葉もて

人の語りたがるその心の

事象、ないし現實の

行爲の

事象

それは

それ固有の倫理を以てさえ
事象
それは
それ固有の理想を以てさえ
殊更にも
時にそれは語られながらも
あの宇宙の事象の地平で
愛もやはり永遠に
立ち止まるのだろうか
みずからの一瞬の上に？
いくつもの
ブラックホールのひとつのそこで
永遠に？
愛してる？
女たち
ゴックは一度も
いつでもわたしに
問わなかった
そのうつくしさに？
愛してる？
こがれてひそかに
一度もゴックは
体臭を嗅いだ
わたしには
断ち切る気も無い
その理由
わたしへの想いの、ひそかな
それはすでに知る
形見にそれをしたのを
ゴックはひとりで知っていた。すでに
装って、誰も、自分さえも信じない…まさか
自分だけがもはや
擬態のうちに…まさかあなたを。まさか
だれよりも
わたしが、忘れさるなど
なにものより私に愛されてだけいると
なに、食べたい？
わたしはささやく
耳元に
抱きしめるように

寝起きの儘に
ベッドの上に
崩れた胡坐に茫然とする
ゴックを胸に
抱きよせた後で
彼女の爲に
なに、たべたい？
彼女の爲に
おなか、すいたよね？
彼女の爲に
ダイエット？
彼女の何の爲に？
微笑の爲に？
充足の爲に？
充足の、確信の爲
確信の、その維持の爲に？
幸福の爲
隔離の倦怠と
隔離された親密の
幸福の爲に？
明日のかたちだに見えない
今の
故にこそまさに明らかな
今のまさに全き幸福の今の
その現存の爲に？
おなかいっぱいだよ
甘える
女は時に
いま…
殊更に
おなかね、…
いつでもかすめるとるように
いっぱいだよ
私に甘えた
うそ
まるで
うそじゃないけど
私の何かをそれによって
太るから食べないよ
巧妙に

たべなよ
一瞬で
なんで？
盗み取って仕舞ったかのように
太ってもいいの？
或は——わたしが太ってもいいの？
ダイエットしなよ
弱みを
だから食べないよ
逃げられない
俺、ひとりで喰うの？
絶対的な弱みを
いやなの？
にぎり盗ったかのようにも
さびしいじゃん
ほくそ笑み
でも太るよ
軽蔑に、限りなく近い
太ったらさ、
充足を曝し
…ね
女は見た
ダイエットしなよ
わたしを
目玉焼き
これみよがしに
なに？
見つめながら
先生、日本の目玉焼き作れる？
かすめとるように甘え
なんで？
あるいは私は
お腹すいたね
わたしはすでに知っていたのだった。そこに
たべたい？
なにも
朝だからね…
穢れたものなどなかったのだった。ただ
じゃ、俺、…さ
心の儘に

好き？
あまりにも無垢に
卵、あったっけ？
女たちは
目玉焼きって、
わたしに甘えた
…あったな
見上げた眼差しに
いいよ…
好き？
いいよ、ねえ
なくていゝ？
ね。いいよ…
ゴックが云った
好きにして
パン、なくていゝ？
好きにしていいよ…
いらないよね
先生の
太るからね…と
いいよ…
なくていゝ？
ね。いいよ…
ゴックが云った
好きにして…
いゝよ、と
ね。いいよ…
微笑むわたしに
やわらかくても…
買ってくるよ
ね。いいよ…
ゴックは云った
いいよ…
わたしの爲に慌てながら
かためでも…
他人の失敗を
ね。いいよ…
その眼差しの
いいよ…
いちばん見える所に

ひっくりかえしても…
見せつけながら
ね。いいよ…
パン、いるよね
いいよ…
ゴックは云った
ね、…
失敗を曝した
フタをしても…
どこかの他人を
ね。いいよ…
名指しゝないで語るかのように
もっと焼く？…
わたし、買ってくるよ
もっと、…ね？
ゴックはひとりでそう云った
好きにして…
三度のサイレンをひとりで聞いた
その音
たぶん、東の方に
壁の向こう
振り向いても見えない
壁の向こう
まるで他人事のように
まるで
かかわりのない
外国の
他人の身に受けた
災害のように
わたしの知らないところで
その事件は毎日
起きていた
まるでわたしだけ
ゴックと
私とゴックだけ？
取り残されたように
どこかでだれかが、
あるいはだれもが？
そのウイルスに苛まれた
私の目は

いまだその症例を見なかった
世界中に
溢れかえていたというのに
私の鼻は
いまだその匂いを嗅がなかった
医療所で、防御服の向こうに
何人も
医療関係者が嗅ぎ取ったその
あざやかな息吹を
私の耳は
いまだその叫び聲を聞かなかった
失われた家族を
ないし父、母
ないし息子、娘
孫、友人、師
それら
それらの爲に
彼等を思って叫ばれた聲
泣き声…？
を、…罵り
非難し、呆れ
茫然とし、そしてふたたび咎めるような——誰を
聲、…その聲を
他人のように
異人のように
まったく異なる種族の
まったく異なる野蛮なる
鼠か蜥蜴か蛇のように
野蛮な異族の異なる奇妙な人であったかのように
わたしは自分を
自分自身に
いつか擬態させて見せながら
それ
かかわりのない他人の身の
切実で追い詰められた
イノチを想う
まさに
言葉さえ通じない
異人のように
顔さえしらない

他人のように

9月朔日朝。起きた朝にゴックは部屋にいなかった。壬生は床の上に脱ぎ散らされた儘のゴックの衣服を——そのピンク色の部屋着を、薄汚れたものようにも足に蹴った。壬生はそれを厭うた。その乱雑を。そして壬生は知っていた。昨日の夜にみずから、ベッドに誘い込まないうちにゴックを脱がして、立った儘に床に放り投げたその自分そのものが乱雑のそもそもの主人だったということは。いまや明らかに無縁の他人の過失に過ぎない乱雑を足蹴りに、そして押して完全にひらかせたドア、見た。…いつでもきっちり、最後までしめられるということのないその向こうに見た。壬生は、まさに焼け、まさに燃える空の、外廊下が裸眼にさらさせた東の空の朝焼けの。見た。色、まさに破滅の、——と、あざやかな。

と、壬生は

あざやかすぎて、

もはや

あざやかにすぎたあざやかの過剰

それ

それは破滅の

破滅の色

色、それは——と。壬生は想い見蕩れるということもなくて、そして壬生はすでに耳にしていたのだった。その

紅蓮の盡きた

とごかないそこには青

返り入すれば、たぶんそこには

昏くさえ感じられた青の

ただ深い、ひたすらに澄んだ

そこには

黒みにふれた、それは

青

それは破滅の

破滅の果てた向こうの色。果てた向こうの

果ての向こうに色、それは——と。壬生は想い見蕩れるということもなくて、そして壬生はすでに耳にしていたのだった。その外廊下の、だれも使っていない、おそらくは未だ招待されないだれかの未来の爲にか、未だ生まれない未来のだれかの爲にか残された部屋の先、廊下つきあたりのバスルームの方に激しい喚き聲が、その喉に濁音をぶちまけながらに鳴り聞こえていたのを、それはまるで、——と。

ひゞく

あるいは

ひゞく

思いもしなかった葉の下に

ひゞく

始めて知る見たこともない花の咲いていたのを見つけたような

…と。

壬生は、あるいは

ひゞく

振り向いたそこに

ひゞく

唐突にいつか一度だけ

ひゞく

視掛けたことのあった人が、息を凝らして

ひゞく

私をだけ見つめていたのを

ひゞく

みてしまったかのような

…と。

壬生は、あるいは

ひゞく

だれもいるはずのなかった嘗ての

ひゞく

遠い昔の隠れ家の残骸の影に

ひゞく

かつてその目を見て言葉をかけることさえできなかった

ひゞく

そんな少女が（——少年が？）

ひゞく

かわらない姿に微笑んで

ひゞき

かわらない眼差しで自分を見つめていたのを見たような

ひゞきあい

と。

ひゞく

ふいに指先、…右の薬指に、唐突に落ちた雨の水滴。空は晴れていた。だからそれは一粒だけの、と、壬生は薬指のちいさなひとつの水滴の透明を見、微笑むまでもなくてそれはまるで獣じみて、絶叫。さけぶ。聲。さけぶ。叫び聲、さけぶ。喚く、怒号のさけぶ。聲。そしてさけぶ。聲、喉にさけぶ。あらゝいで鳴ったさけぶ。濁音の。そのさけぶ。聲。例えばタオの口の、大口。時に挙げた聲を、大口。あるいは稚彦の時に、大口。挙げた聲を、大口。此れら、かならずしもそれぞれに健常のとはいない人らのそれぞれの口の發した、大口。それぞれを思わせる、そしてしかも極度の微弱音。叫ばれ、さけぶ。喚かれ、さけぶ。のゝしられるように、さけぶ。叫ばれ、のゝしられ、さけぶ。さいなまれるように、さけぶ。喚かれた聲、壁の向こうの壁と壁に反響ていたはずの、かさなり、最強音で、ひびき、ひゞきあってはいたはずの、ひびき、つぶれあいながら鳴りひゞいてはいたはずの、ひびき、つらなっていたはずの聲。ひびく。壁の外にそれはたゞ遠

い微弱の音をのみ籠らせ、散漫にひくゝわなゝく。ゴックに違いなかった。空の夜明けの色さえ知らない前に寝起きの悪いゴックがひとりで起き出してそこで、ひとりでそこで、ひとりでわめき散らしてそこで、ひとりで喚いていたに違いなかった。壬生はゴックがいつか、すでに完全に、——雪菜の、例えば雪菜の最後の数週間のように？ すくなくともその心を完全に崩壊させていたに違いないことを知る。——いつ？

と。

だれもが不意に

かすめとられた

と。

限りなくもあざやかな唐突さで

かすめとられた

と。

壊れ、そして許可も無く

かすめとられた

と。

この世界を豹変させた傲慢をさえもはや

かすめとられた花、その蜜よ

だれにもそれは誇らない。…と、壬生はその半ば開かれたドアを完全に開けた向こうに、雪菜が何度目かに手首を切った儘に、渋谷の最上階のマンションの中で自分をもはやみようともしない眼差しをうわめに投げたのを見て頷して曰く

だれにも秘密にしておこう

雪

だれにも

白い

いまだ

ただ白い

いまこそ

雪（…白かった）

だれにも

空は（…雪は）白濁した

雪菜のことは

隅から（…いつでも）

だれにも秘密にしておこう

すみから（…蛇の？）隅まで

すでにして

はるかに（…蜥蜴の？）

自分がもう

すきなく（…蛇らと蜥蜴らの目のなかにも）

取り返しのつかないほどに

くまなく

無惨な程に
空は（あるいは紅の、紅蓮の行き。…雪よ）
悲惨な程に
白濁
壊れ
その
毀され
雲の
壊れて仕舞って手の施しようもないことを
白濁の雲の
ひとりですずかに知っていた目
完全な無縁
あくまでも
その色とは
自分が聴て
あくまでも無縁の
いまこそ聴て
雪は白く
ついには聴て
白く
救われることを確信して、——と
色
救い、など
いろいろの
救われない、壊れた袋小路の
色の（匂い立つまでにあざやかな、あざやかすぎた色、色づいた色、色めく色
らのいろいろよ）
なすゝべもない人のみが口にし目にする
記憶喪失した色の（色、愚弄され嘲弄されたかのような）
狂気の言葉だとあなたは知れ
みずからの（溢れ返った！…あふれ）あるべき色の（溢れ返った！）
こゝにある
消失
こゝにある
そんな
救いはまさに
白
こゝにある
消滅
こゝにある

そんな（…盡きた）
救いはまさに今
水は（…涙さえ、それ）色など
今まさに此の時に
透明な（…その）水は
こゝにある
十九歳の（塩化カリウムの不意の活性化）
こゝに、こゝにこそ救済は
誰よりも（溢れ返った！）美しい少年は
魂の救済
十六歳の
救済は
翳りさえない（魂は）
それこそは、と。
翳りなど（疾走する魂の）
振るえる眼がなぜかくも雄辯に
色をくすませる（その温度を知れ）
その目の見出すものの凡てをなぐさめたのか
翳りなど
あなたは知れ
翳りさえない、（花を喰う）ただ
今
傲慢な（喰う）微笑
わたしとともに
翳りなど（喰う）
あなたは知れ、故に
十六歳の（久飛知良須）雪菜にふれた事など無かった
だれにも秘密にしておこう
翳りなど…感情の？…その
だれにも
複雑にして困難で基本的容赦のない音も匂いも無い拘束帯のような。褐色の十
六歳の肌に
いまだ
這う唾液
いまこそ
他人の唾液（…時には、）
だれにも
その匂い
雪菜のことは
嘔みつくように（さまざま、さまざまな体液の、さまざま、さまざまな匂

いに)

だれにも秘密にしておこう

男は雪菜の

手首をかざる切られた皮膚の

髪を匂う

變形したもりあがり

雪

その存在をは

白

まるでなかったかのように

水の色は（白い、）

あくまで秘密にしておこう

透明だった、その（あまりにも白い、）事実を

ながれるような

忘れたのか？（氷はにもかかわらず透明なのだ…）

流れ過ぎるような

その雪は（白い、）

そんな傷跡

無辜なるもの（白い、）

ピンクがかった

無辜にして、（あまりにも）無垢で（あまりにも白い、）

あわい色彩

そして

いくつも

ひたすらなまでに（さまざまな体液の、さまざまな、）

いくつもかさねたその

無辜なる色

又は

水の（白い、）透明よりも？

耳たぶをいくつも

泣かないで（泣かないよ）

蛇に咬まれてさいなまれたように

雪菜の耳に（空が、いま）さゝやくべきだった

無数に開けられたピアスの穴

泣かないで（燃え盡きた）

ピアスをさゝれず

その

放置され

涙など（喰う）

いつかわすれわすれられた穴をさらして

その（喰う）
孔の爲に
いじましい（花喰飛知羅須）
耳はそんなのだと
みぐるしい
蛇は雪菜にさゝやいたのか——その
内臓の（海はいつでも汐になまなましく臭かった）中の温度に似た（臭いの海）
耳元に。その
あたゝかさなど
孔の爲にあなたは存在してゐたのだと
ふれさせたこともないはずの（鐵の溶接）
蛇は雪菜にさゝやいたのか
双渺に（夭折された鐵の）
痛みと共に
あえて（蹉跌）
孔をあけ
泣かないで
孔の向こうに何も見るな
もう
むしろ塞ぎ
泣かないで（泣かないよ）
なかったかのように。ピアスにまさに
ささやきあう（空はいまこそ）
塞ぎ隠される爲の孔だから
聲にだして（燃え盡きた）
だれにも秘密にしておこう
もはやなにも
だれにも
かたりあわず
いまだ
かたりあうべき
いまこそ
なにももたずに
だれにも
年齢偽証
雪菜のことは
出身地不明
だれにも秘密にしておこう
自然にして
だれよりも

みずからどこかに
舌を上手につかうなど
生れ出たように
だれよりも
自分の年さえ
舌で上手にころがせるなど
自分にさえも嘘をつき
雪菜にできるはずもなかった
歌舞伎町は、昼間が好き
客にそれを
…と
求められる前には自分から
言った私を
その個室の中で
ひかり
彼女の鞆の名から取り出す
雪の日に（花って）
コンドームは自分でつけて
白濁の（花ってね）空さえ
雪菜はさゝやく
貫き通し（花っておいしいんだよ。）
コンドームは自分でつけて
落とす光の筋さえもなく
雪菜はもはや
むしろ（花って）内から
倦怠を彼等に隠さなかった
ことごとくの（花ってね）
股をひらき
物の（とくに百合が）ことごとくの
ひらきゝるまで股をひらき
内から（百合が好き）
いつでもすぐに
脇いでたように
じかんのかぎりなんかいつでも
ひかり（…おいしいんだよ。）
あなたはすきなだけ
かさねよう
すきなように
さゝやき聲を（花って）
あなたはいくらでも

かさねよう
ゴムのむこうのからだのなかで
だれにも（花って）秘密に
嘲るような笑い方を
自分にさえも
すでに雪菜は、もはや忘れた
秘密にして
慰めるような謝りかたを
何を？（花って）
すでに雪菜は、もはや忘れた
褐色の肌に
いつでも秘密をほのめかすような話しかたを
何を？（…おいしいんだよ。）…ね、
すでに雪菜は、もはや忘れた
舌の這う
なんでも自分が知っていたようなその話し方の傲慢を
唾液のあとを（明日、雪かな？）光らせて倦む
すでに雪菜は、もはや忘れた
何を（…降る？）秘密にしたの？
啞え煙草の、上品な流儀を
その（…まさか）匂いに
すでに雪菜は、もはや忘れた
なぜ？
忠告するときに誰かを見た、上向き顎の
はじめて（…まさか降る？）出会った時に、あなたは
彼女がさらした貶めるようなまなざしを
と、——
雪菜はすでに、そのあったことさえ忘れはてて
なぜ、（…あした）生き物めいた匂いを、その（…あしたゆきかな？）
時に
へばりついた唾液。肌の上のそれは
その最期の一か月に二回だけ
どう思ったの？
残されたわたしにだけ見せた
さゝやく（…痛くない？）
わたしの爲にだけ
おぼえてる？
だれにも隠してみせてくれたような
はじめてあった日の事…どう
そんなひそめた笑みの秘密めかした流儀の

どう思った？
かぎりない
秘密にしよう…なんて
無辜のあどけなさ、…もはやひたすら零れるような
なんて、思った？
その無垢を
自分にさえも
だれにも秘密にしておこう
隠す？——雪は？…いや
だれにも
むしろ染め
いまだ
染め盡す
いまこそ
無慈悲なまでに
だれにも
ふれる
雪菜のことは
まるで
だれにも秘密にしておこう
まるではじめて女の肌を
体中にタトゥー
はじめてなの？
その極彩色を
…そ。
だれにも秘密にしておこう
うそ
褐色の肌を
…じゃない
ハーフでもないそのくせに
なんで？
その國の人の肌の色の特有を
男のほうが好きだから
裏切ってからかい莫迦にしたような
なぜ
あざやかな褐色
雪菜は
這う色彩
いつも軽蔑するように笑いながら
そのタトゥー

悲しみってなに？
曼殊沙華
ね？
幻のその
知ってる？
優曇華の花
悲しみ、カナシミって
沙羅
まるで口癖のように
白蓮華
けど誰も
からみつく
ね？
その
悲しみってなに？
それ無数の蛇の
視たいですか？
うねる蛇の
雪菜はさゝやく（——いつか、…）
最後の蛇が伸ばした舌は頸からのびて右の
個室の（いつか地球の真ん中に手、つつこんで、血まみれの心臓引きずり出し
て、みんなに）中で
雪菜のその頬を嘗めた
見たい？
だれにも秘密にしておこう
広げて（此れだよ）みよっか？
だれにも
秘密だよ
いまだ
雪（此れが、ただ、此れだけが）
いまこそ
水の（——せめて沈黙するその空を時には不意に失笑させてやる爲に。）變形な
らば
だれにも
それはあくまで
雪菜のことは
水なのか
だれにも秘密にしておこう
似ても似つかない
怒號など発さない

白に
涙をこらえて
染め盡す傲慢
わたしは
誕生日、いつ？
怒號など
決めて
涙をこらえて
あんたの好きな日に、決めれば？
わたしは
いいよ
怒号など発さない沈黙の
わたしを、生んで
滂沱のなみだのうちに
口ですか？
わたしは
口の方が、いいですか？
怒号など、沈黙の
何か月一緒に居たのだろう？
雪菜の唇はどごうなどはっさない
薬物のせいじゃない
わたしは、涙に（——流れよ）雪菜を（——流れよ涙）見詰めた
それだけは明らかだった
雪の（——涙よ）日に
あんなに無惨に
逃げ出した雪菜は乗り繼いで辿り着いた多摩川の土手
壊しはしない
——なぜ？
まだ、生きてるかな？
土手のコンクリート、ないし
ね？
——なぜ、そこで？
まだ？
アスファルトに時に
生きてた
雪の日
わたし
その
ね？
——なぜ、そこを？

知ってた？
雪の日に
生きてたよ
…二月。
褐色の肌は匂いがあった
倒れるように
雪菜はそれを
ころんで不意にたおれたように
自分では知らない
雪の日に
乳児の唇に
なだれたように轉び、前のめりに轉び、つんのめった雪菜はひざまづく
ことさらに
路上に
砂糖をまぶしたような匂い
空、その
死ぬために生まれたんじゃないよ
叩きつける
なんで、…
色彩。雪の日に
死にために生まれずに、そして
叩きつける額
なんで、…
色は白——まだ
あんたも、いつか死ぬんだね
止まない、己むことの無い
なんでわたし、今、悲しいの？
あしたは、積もるよ…雪は。散れ
道玄坂のマンションの最上階に
血が。散れ、血は
窓から
額に
散る
雪よ。その色
雪を見た
ながされた汗のように？
止まらないんだよ
唇に白
なんで？
溶ける…指に。指が

涙がとまらないんだよ
鼻にも白、それ
衰しくないよ
触れる前には、もう…
なんで？
吐かれた息の…
泣いてないよ
海にさえ
壊れたの？
飛び散るのは赤、穢くさえ
わたし
遠い、背後の遠くの海にさえ
壊れたの？
穢く、なぜ、その時に血は
愚弄するようにささやけ
なぜ？
むしろ
降れ。海にこそ雪は
壊れちゃえ
叩きつける。
あんたも
なんども、立ち上がり、あるき、路上に、立ち上がり、倒れ、路上に
なじるようなそれ
雪の日
冬の空の下で
路上に叩きつけた。ひざまづき（——乞うように？）
あなたとともには死なないよ
如月（——つんのめって）
あなたとともには死なないよ
叩きつける。（——腰の骨さえ砕けたかのように？）なんども
死ぬって痛いのか？
白。…その（——ひざまづいて）色は
なんか
もう、と
なんでか、なんか
ぼくはあなたを見ないだろう
痛々しいね
その美しかった（——涙よ）
嘲弄する瞳孔
顔、（——雪の上に）凶暴なまでに

知ってる？
美しかった（——溶けよ）
雪菜
不遜なまでに無辜なる（——雪よ）無垢の
まるで、できそこないの
狂暴の
プラスチックの
顔。宇都クスヒ
濡れた玉のように
変形する額。雪の中に
…おれも？
変形する鼻
口づけた
なぜ？
わたしは
なぜ左目だけ、ひらかないの？
ふたりだけのたわむれとして
流れる血
時に
雪よ
その
見えないの？
黙れ
雪
もはや、世界は寧ろ
ふらつき、雪よ。
太ももの付けねのほくろ
せめて隠さず
左目の下のほくろ
彼女だけは
黒い
砕く迄
涙の粒の擬態？
彼女だけは曝せ
黙れ
その頭蓋骨を（——ちか）
世界は
自分でまさに砕き壊すまで
もはや
涙（——力尽きた雪菜は）

雪は落ちたのか
知ってる。(——やがて仰向け) 私は
あるいは
呻く (——かすうかにひらいた、その)
大地が
雪菜が (——唇に)
あるいは
喉の奥にだけ (——雪にふれた)
わたしたちこそが
流しはしなかった (——最後)
雪のほうに
他人のように? (——意識があった、最後の)
上昇したのか
まるで (——数分に。) 親友のように彼女に心をまさに痛めながら
なぐさめないで。もう
血
ほうっといて
涙など一粒も
大丈夫?
知らない
過呼吸
死——俺は涙など
なんか、お前
そのときの私のさらした表情は
さっき
雪の中に
死にそうだったよ
自分で勝手に力尽き
血まみれで。って
さらした雪菜の四肢の痙攣。数度の
むしろ最後は
失神の後で
…的な
だれにも秘密にしておこう
生まれた時も血まみれじゃん
だれにも
違うの?
いまだ
じゃない?
いまこそ

だから、…さ、
だれにも

弔え。世界は。私たちが生んだ世界は、(私が?)乃至(、——私自身が?)弔え。留保も無く(…失敗した)ただ、(わたしたちは)わたしの雪菜をかくに聞き、8月16日夕刻未ダ暮れきらぬに空曇りテ雲空を覆ひて久裳利壬生二階ナル寢室に窓に見て樹木ノ葉および葉、および葉と無数なる葉、らを見ルに彌、暗く色みづからの色彌、に濃くシき壬生時に寝臺が上にゴックと俱なり傍らに横たはりけるゴックが額に口づけかくて言さく雨?

——降るかな。…雨。

フル

——暇じゃない?

フ

ゴック未だ目を開かざる儘に報へて壬生そノ額に啞ふるやうに唇フレタル儘に

——昨日、降らなかったじゃない。

フル

——昨日?

ルフカナ

——昨日、降りそうだったけど、…

フ

——雨?

フルフ

ゴック目をひらきてかくて壬生を見ル登藻奈久爾天井になにもノか外なるものともものものものらのもの、かたちらのもろもろの翳り横殴りに入りそれ太き筆に書きナぐりたるに似て壬生白してさ、やき聲もて云さく

——今日は、降るね

ルカナ

——何、食べたい?

フル

——日本で、台風に逢った?

ルカナ

——わたし、つくるよ。…今日は

ルフルカ

——ベトナムの台風っておとなしいよね

カナルフ

——ないよ。今、…

フルフ

——なに?

ルフ

——臺風、ないよ。今

ルフルカナ

壬生額に唇ふれふれ續けたる儘口づける登裳那久邇かくて壬生ゴックが髪ノ毛ノ髪ノ
毛ゝらの於毗多陀斯岐匂ひ夥シきを感じ白してさゝやき聲もて云さく

——さむい？

ルイツフ

——歸りたい？

ルルフ

——天気悪いと、…

フィル

——日本、…

ルイルフ

——ね？

フルルナ

——歸りたいよね。

ルナイフ

——寒くない？

フルイルフカナ

——歸れないよ。

ルカナ

——着る？

ナルカナ

——明日、…

ナナルカ

——なんか、…着る？

ィカ

壬生及びゴック未だ肌さらしたる儘なれば壬生かくてゴックが腹部に指這はせ壬生戸惑
ひき壬生想ひてゴックが肌鳥肌たてゝをるやらんと然ルに肌たダなメラかに指をスベラ
シ只すべらかにして指さき唯艶に觀ジてすべらかにすべらしてすべらかに艶なりき雲覆
ひ空昏ければ大氣熱氣に噎せることあらず寧ろひややぎて肌觀ジて飛彌彌迦那里岐か久
て壬生白してさゝやき聲もてゴックに言さく

——匂う

ゴック聞き聞きをはりてかくて思わずに聲を立てテ笑ひ壬生ゴックが鼻又ゴックが唇に
立ちたる笑へる聲又笑ふる息聞き聞きをはりてかくてゴック不意に身を起こしそれかの
女覆ふよやうにも身を預ケたる壬生に抗ふかに壬生は觀ジてかくてゴック白してささや
き聲もて云さく

——なに？

壬生聞きゝその聲あきらかに怯え懷疑したる色ありて阿沙彌伽那里亘ゆゑ壬生いままき
にゴック怯ゑ懷疑したるを觀ジ感じをはりてかくて壬生思はずに仰向けに横たはりてか
くて天井に那爾裳乃迦外なるものともものともものものらのものゝかたちらのもろもろ
の翳り横殴りに入りソれ太き筆に書きなぐりたるに似たるを見觀をはりてかくて壬生白
してさゝやき聲もて云さく

—なにして、

聞こえる？

—匂う？

ぼくの

—なにが？

体内の

—わたし？

体内のざわめき

—匂う？

聞こえた？

—先生も、匂うよ

壬生いまやゴックたダ素直に笑ひてふたたび笑ひみたるを觀ジ又見あげたる眼差シに見てゴック唇又唇脇ノ頬に笑ミ又頬上にありける双眇に壬生ゴックが笑ミたる色又匂ひ感ずるに壬生は見テ壬生は觀き双眇ただ表情もなくてたゞひたすらに冴えて怒濤の潤ふ怒濤の眼球怒濤のふたつに怒濤の過ぎざりき怒濤のかくて怒濤の壬生怒濤の青き

青き

青き美會羅乃迦迦彌岐從

落ツ不意ノーツノ雨粒の爲ノ宇多

心にもなくて口にみづからのさゝやきたるを聞きゆゑに壬生白シてさゝやき聲もて言シき

—俺？

かくなりゆゑにゴック壬生が沙沙彌岐多琉聲聞きかくてゴックまるで

…ね？

まるで

あなたはまるで

かくてかくにゴック心にひとり云して想へらく

まるであなたは

…ね？

まるで

かくてかくにゴック心にひとり云して想へらく

その氣もなく甘えたふりをした猫のように

—いい匂いする

かくてかくにゴック謂スを壬生聞き聞きをはるともなくに白シてゴックが爲にのみさゝやき聲もて云さく

—どんな？

壬生が唇に壬生の立てたる笑へる息立て靜かにシて靜かなるをゴック見又ゴック聞き壬生は見き上半身ノみ起こシ背を見せかくて首よじりて振り返りたる背筋の曲がり曲がりたる摩摩爾背の肌翳りを白き色ノ上様々に這はせ壬生は見て觀ル摩摩爾見蕩れる心地して何に見蕩れ何ノゆゑに見蕩れたるか覺らざる摩摩爾かくてゴック壬生に壬生が爲に乃美さゝやき聲もて白シて言さく

—甘い？（あます…）

とめども

—どんなに？

とめ

—ちょっと、（ますぎる…）甘いね

とめど

—どんなふうに？

とめども

—甘いよ（ますぎるくらいに…）

とめどもなくにと

—どんな、…

とめど

—ね。

めども

かくて（ますぎ…）ゴック言ひかけ（ぎるくに…）唇ひらきかけて（るくらいにあ…）かくてみづからの（ますぎるく…）唇にささやかルべき言葉わすれ又言葉自體忘レ又我わすれたるかに眼差シ茫然たりキを壬生見かくて壬生観をはるともなクにあなたは…と

気付かない。あなたは、

…と。まだ

気付いていない。…と、あなたは、

かくに壬生心にひとり云シて想へらく

気付かない儘に、あなたは

かがやきとめどもなく

今

とめどもなきかがやき

ひとりでそこに茫然とする

かくて壬生かくの観なシてかくて壬生まなざしにゴックが身よじりて壬生に目おとしただ壬生ダけを見テ茫然と観ありけれを見るをゴック眼差シがうちに見まタ不太多毗見…きらきらと。またミたびに見…きららきらしく綺羅奇良登観テかくて壬生が唇にのみ笑みたるヲ見かくて言さく

—わたしは？

壬生聞きて壬生ゴックが何を問ふか覺らずかくてゴック眼差しがうちに壬生笑ミていまやまなざしの色にも笑みたるまなざしにゴックが身よじりて壬生に目おとしただ壬生だけを見てあきらかに観くまなくも観て観をはりてありけるを見るを見またふたたび見またみたびに見観てかくテ壬生が唇にのみ笑ミたるを見かくて白してふたたびに言さく

—ね。…わたしは？

壬生聞きて壬生ゴックが何を問ふか覺らずかくてゴック眼差しがうちに壬生笑みていまやまなざしの色にも笑みたるまなざしにゴックが身よじりて壬生に目おとしただ壬生だけを見てあきらかに観くまなくも観て観をはりてありけるを見るを見またふたたび見ま

たミたびに見観てかくて壬生が唇にのみ笑みたるを見かくて白してみたびに言さく
——臭い？
どうして？
と
どうして。…あなたは
と、かくに壬生心にひとり云して想へらく
あなたはいつも
どうして？
と
茫然をさらす
わたしを見て
どうして？
と
そしてわたしを観るときに…と、かくてかくに壬生心にひとり云シて想へらく
茫然とした
と
あなたは
そしてはや
と、あなたの眼差しがむしろ
と、かくに壬生心に飛登里云シて想へらく
むしろなにも
と
もうなにも
と
完全になにも
と、かくに壬生心にひとり云シて想へらく
わたしさえ
と
わたしさえも？
と、そのかたちも色も
と、かくに壬生心にひとり云シて想へらく
なにも見ない儘あなたは
と
もはやあなたはひとりでそこに
と
そこに茫然と
と、かくに壬生心に飛登里云シて想ひテ思ひをハラぬに聞きてゴック壬生が爲にノみ白
シてささやき聲もて云シける聲又そノ聲の音又その聲ノ色又そノ聲ノ匂ひ又そノ聲の氣
配又そノ聲の氣配さスもの又そノ聲の拍又ゴックが壬生ノ爲に乃美白シてさゝやき聲も
て云シけるを聞きて答へんとシ答へんとシをはらざるに聞きゝ

——をン那ぢ

かくにゴック云して壬生覺らずして言葉もなくてゴックひとり壬生いまだ覺らざるヲ覺りて謂さく

なにを？

——おうなチ迦ナ

なにを、あなたは

かくてかくにゴック云して壬生覺らずして言葉もなくてゴックひとり壬生いまだ覺らざるを覺りてふたび謂さく

——せせ登をなチ迦ナ

あなたは、いま

と、かくてかくに迦久那留のちゴック云して壬生覺らずして言葉もなくてゴックひとり壬生いまだ覺らざるヲ覺りてミたび謂さく

——先生と同じかな？

なにをみてるの？

と、かくに壬生心に飛登利云して想ひて思ひをはらぬにゴックひとり白して壬生が爲にのみささやき聲もて笑ミて言さく

——同じだね

壬生は見きゴックが頭の髪髪の毛の黒又黒に這ふ光澤ノ白ク白なス光沢の向かふなる窓が向かふに叩きつけられへばりつけられたるにも似て見ゑて未生ノ鬢りの靈ノ鬢りの肉ノ色骨又骨ノ骨らノ色肉ら又肉の色あざやかなる肉ノ肉らの色とりどりに散らシ又這はせ骨のかたちとりどりに散らシ又這はすを見キかくて頌して

知ってる？

やがて降る

と、そう何度も

その雨

わたしは何度もささやきかけそうになる

その日の夜の雨の中で

その耳

どんな匂い？

ゴックの耳に

さゝやきかけた

額にふれた

ゴックはわたしに

唇にとって

私の上で

遠く及ばない距離の向こうに

殊更に背筋を伸ばして見せて

知ってる？

その胸と

と、——あった。あなたの今吐いた息には温度があった

なぜか腹部を
その温度
殊更に
あきらかに生きた
矜持するように
生き物の温度
見せつけて見せて
知ってる？
どんな匂いする？
と、——あった。あなたの今吐いた息に
腰をもう
その匂い
動かささえない儘に
あきらかに生きた
不意に落ちた
生き物の匂い
ゴックの茫然
わたしは何度もさゝやきかけそうになる
わたし、…と
その耳
茫然とした
ゴックの耳に
どんな匂い？
額にふれた
ゴックの爲だけの
唇にとって
ゴックひとりの
遠く及ばない距離の向こうに
ゴックの茫然
知ってる？
聞け
あなたの皮膚は匂い、そして
窓の向こうに
あなたの皮膚は熱を帯び、そして
雨が降る
あなたの皮膚はさらした
その音響を
いつでも
どんな匂い？
その下の肉のやわらかさ

わなゝく
いつでも
ふれるものをすべてを
ふれた指に
わなゝかせた音響
かすかにくぼませられながら
くさくないよね？
知ってる？
歯、あらったよ
その下の骨のかたさ
くさくないよね？
骨格の
浴びたよ
あきらかなかたち
聞け
その存在
窓の向こうに
まるですべては
いまだに七時にもならない夜の
骨格のさらした限界の上に
はじまりの暗さの
へばりついたもろもろの
その中に
さらされた限界。それら固有の限界のなしたただ一時期の固有にすぎなかったか
のように
鳴る
まるですべては
知ってる？
骨格が見せた限界のかたちを
わたしは
骨格の爲に
ゴックの爲に
諦めを以て実現した限界のなしたただ一時期の固有にすぎなかったかのように
さゝやきそうになる
知ってる？
たゞ、自分の爲
と、そう何度も
自分の心にだけ
わたしは何度もささやきかけそうになる
さゝやきかけて

その耳
知ってる？
ゴックの耳に
あなたの血管は今すさまじい
額にふれた
血の流れ
唇にとって
流れる血
遠く及ばない距離の向こうに
流す心臓
いまゝさに
そのすさまじい
雨は降り落ちようとする
轟音の中にある
いまゝさに
ふりしきる
雨は
雨のまさに
その雨は
わたしの耳に響かすように
誰の爲にでもなく
人入したウイルスは
まして雨それ自体の爲にでもなく
血小板と俱に、もし
雨はいままさに
それに耳さえありさえすれば
降り落ちようとする
聞いただろう。その
その空の下に
すさまじい轟音を

壬生は外廊下に立ってしばらく外の空気を吸った。遠くに、だれかが頭のなゝめ上で驚くほどの耳元に立てた笑い声を聞いた。足の下のだれかが誰かと語り合ううちに立てた笑い声。そうに違いなかった。何の因で耳元に聞こえたのか壬生にはわからなかった。壬生はたゞ町を見た。隣の家窓があった。窓の向こうにひとりの女が壬生を見ているのを壬生はようやく気付いた。壬生の気付かなかった時間がそこにあった。もともと見えていたに違いなかった。六十代に見えた。佛間の中に朝の線香を立てた後、女はその女にしては巨大な両手に果物をつかむように抱えていた。立ち尽くし、両眼をはっきりとひらき、そこに立って壬生をだけ見ている。身じろぎしなかった。女には女の必然があるに違いなかった。その必然を壬生は気付かなかない儘、まるで、と。

獣のような声を聞く

壬生は、あなたの…

と。壬生は

その、

あなたのその喉が、と。

獣のような声を聞く

壬生は思い、そしてそれ

あなたの息遣う喉が、と。

獣のような声を聞く

壬生は思う、まさに、と、いま

まさにいまあなたの喉に

獣のような声は立つ、と、女はあきらかに目に壬生を咎めていた。非難し、糾弾し、その眼差しには一遍の軽蔑も侮蔑もない。まして嫉みも妬みも。なぜひたすらに女はわたしをとがめだてるのか。容赦もなく。そう壬生は獨り言散るように思い、壬生はショートパンツだけを身に着けていた。あるいはそれが赤裸々すぎる格好だったのか。それを女が咎めるはずもなかった。ここではだれもが、男たちならまさに…、と。

獣のような声がつ、と。

壬生は、獣の

どんな？

獣のような

どんな？

獣のような声が

大きいの？

声がつ、と。

壬生は思う。みずからにだけささやくように、文字通りささやき声もて聲が立ち、と、

くさい？

聲が立ちつづけ

くさすぎる？

獣の

きたなすぎる？

獣の聲が

へんなやつ？

聲が立ちつづけ、と、壬生は

どんなやつ？

聲が立つ。

男は肌を曝した。ここでは、だれもがその炎天下には。壬生はそらすともなく視線を流し、流れた視線の儘に家屋と家屋の切れ目の向こうに、遠くに山が薄く霞んで見えるのを見、まるで、…と。

すでに青い。…生きてる？

壬生は思う。

空はすでに、…まだ？

まだ生きてる？…と
壬生は、空はすでに青かった。
思った。
獣の
死にかけた
獣のような聲を立てながら
まさに青く
生きてる？…と
まさに生きてる？
壬生は想い、まだ、…と。
まさにひたすらに青く
死にそうな獣のように、
と、壬生は、…まだ
わずかの雲さえも
生きてるね？
壬生は
わずかの白い雲さえも
思った。
まだそこで
あなたはひとりで
いずれにせよまだ、と
壬生は思う。
まだ生きてるね？ かくて偈もてかさねて頌して曰く

見た
救わなかった
すでに
わたしは
その扉
わたしはあなたを救わなかった
バスルームの扉
なぜ？
青いペンキの鐵製の
壊れたひとたち
そして同じ鐵の
救われるべき
飾りの鐵線が糸のように、からみつく糸のように、なにかをかたどって蕙のよう
に
救われるべきもろもろの、それらすべての中で
見た
救い得るものなど果たして？

扉の向こうに
あっただろうか？
のけぞった人
一部分の一瞬さえ
ないし獣
ひとかけら
或は
ないし偽造した
すくなくともかつて人だった
時に擬態した
もはや人のかたちを残さない獣の（…叫んだ獣）
まぼろしの中の
獣がわめく
陽炎としてさえも
見た
なかった
剥き出した目
なにも
眼球は（血走って？）
救わなかった
見開きながら何も（たばしって？）見ない
あなたは
同じように（たばしり走って？）
あなたはわたしを
叫ぶように（吹き零れるように）
救わなかった
まさに
なぜ？
叫ぶようにえづきながら
痛みさえ…
母の教へたまひし哥
あなたはわたしを傷つけなかった
見開いた眼
一度だって
なにを？（…獣のこゑ）
いつも
まさに同じように
わたしではない誰かを
時に（我が母の教へたまひし）
わたしの肌に

なにを？
わたしの骨に
発作の久生が
傷つけたから
さらしたのと
久生という、美しい
同じようなそれ
美しい名前など忘れて
なにを、あなたは
鬨りの中に
見開いた、何も見なかった右目に、そして
あなたは咬む
その左にも目
死んだ鬨りの
わなゝいていた唇
死者の鬨りに
わなゝきかけて
あなたの喉笛
不意にさらした停滞の一瞬
脛と脛の骨に
唇の色
不意に拓いた口蓋に
だれをしゃぶったの？
噛みつかれながら
それで？（齒はもはや）
同じように
見た（もはや齒は牙だった）
生きたあなたが息遣い
なにをなめたの？
息をひそめながら
その奥の（…舌）
わたしの脛を咬んだのと
舌で（…出来損ないの、極度に複雑な精彩を欠く紅）
同じように
のたうちまわる
六歳の？
なに？（のたうち回れ）
お尻を咬む
それは…（まさに生き生きと）
七歳の？

のたうちまわる（獣たち）
二の腕を
見た
糸をひく
胸
母の唇と歯に唾液
女の、ふくらみ
咬む
豊かにふくらみ、かつ
五歳の？
ふくらみのかたちさえわなゝきのなかに尋常をなくした
どうして？
見た
右手の小指
わなゝく（わななき、わなゝく）
頬の肉
のけぞった胸は（わななけ、心よ）それみずからのかたちを（思うが俥に）否定
した
噛みつく
なきさけぶように
噛み千切ることを恐れ乍ら
わなゝく
あなたは必死に
急激にしぼむ須臾の激動
その恐怖と闘いながら
血も？
わたしは見ていた
急激にしぼむ腹
ただひたすらに赤裸ゝな、あなたの恐怖
血も、そしてその
あなただけの
血管の中でも？（…その血さえもが？）
咬む
そこから？
髪の毛
飛び散れ（わなゝけ）
九歳の？
汗はしたゝる。その太ももに
咬む
たぶん（他人じみた体液のその）

十歳のふくらはぎ
そこから（温度を知れ！）生まれたよ
咬む
眼の中を這う血管に欠陥
齒は咬む爲に生まれた
たぶん、鳩尾にも
決して
膨大に
絶対に
ふきだせ
噛み千切って
見た
血を流させないように
吹き出せ
時には過失、不意に
見た
思ってもいなかった流血
もはや、雲の上まで
それは過失
わたしは扉の向こうに
咬む
すでに
鼻を
死ねばいゝのに（むしろ）
咬む
のけぞった（吼えろ、むしろ）頸
唇を？
咽仏は？（…咆えろ獣ら。）
十一歳の
のけぞった
そしてたぶん
死ねばいゝのに
八歳のそれも
どこに？

壬生同じき時外廊下手摺に蜥蜴這フを見キ蜥蜴が肌色黄ばみたる白なりキかくてかさね
テ偈に頌シて曰く

夢のような眼差し
潤み
潤い
人を見て潤み

潤い
人知れずにも
潤み
潤い
ひたすらな夢
浅い
かなしいほど浅い
春の夢のなかの
いちばん浅いうたゝねの夢が
それでも久遠にふれた一瞬に
不意に獲得した永遠の夢
そんな夢の
夢を見る眼差し
そのうつくしい
わたしのように
うつくしい人の名は久生
うつくしい名前
壬生久生ではなく
北浦久生
壬生はわたしが
もう二度会う可能性も無い
不在の父
戸籍の上にだけ
わたしを育み
壬生はわたしが
夢にさえ見たことも無い、顔もない
壬生はわたしが
逢ったことも垣間見たことも無い父なる人の
投げ捨てるように
壬生はわたしにくれた二字
北浦久生
かの女はわたしを育てなかった
わたしに咬みつき、ことあるごとに
笑う息の
聲をたてない息の
ひそめた息に
時にわたしを
ひとりで咬み、ことあるごとに
生み、生み棄てて
わたしを育てはしなかった

狂気の人
薬物のせい？
狂気の人
なぜ？ 壊れた叫ぶ獣のようなひと

子供に母の
眞實を教えるはいけない
譬えその見かけが誰の目にも
一人息子の目にさえも
あきらかに異形に過ぎなかったとしても
北浦恵美子が私を育てた
まるで娘と他人のような名前
北浦恵美子が秘密にした

その娘の
久生が咬んだ眞實をは
その孫に
かたくななまでに隠し通し

母なる獣のあきらかな異形を
気付かなかったことに強制する個人的倫理
狂気の人
おかあさんにそっくりね

うつくしいひと
誰も云った。さゝやく
おかあさんにそっくりね
狂気の人

大津寄稚彦の父も
母も、その夫も
その夫の
その妻も。さゝやく
おかあさんにそっくりね
うつくしいひと。わたしと同じく
幼い稚彦はひとり
その父と母、母とその夫
その夫の妻のむこうに見る
わたしを
聲もたてず
息をするのを忘れたように

六歳？
茫然として
私を見る
五歳？

まるで

七歳になる年？

私をはじめて見るように。稚彦は
彼以外の

誰かを始めてみたように。人の言葉を
生まれて一度も口にしなかった

稚彦は
うつくしいひと

狂気のひと

嘘のようななめらかな隆起

それは鼻
久生の鼻

時に包帯が

なぜ？
なぜあなたは自分を壊すの？（カミソリで？）

包帯を巻いた恵美子はすでに

叩け（ふいに手に）

鏡に（ふれたそれ、恵美子の無駄毛処理用カミソリで？も？）

鏡を（——その向こうを？）

恵美子はすでに治療に馴れた

ぶち壊す爲に？

顔面で

うつくしい夢のよううつくしい顔面で
悲鳴も無く？

ちしぶきしぶく

苦痛の

痛みの…ちしぶきしぶく
悲鳴も無く？

あまりにも清楚な唇

ちしぶきのしぶき

咬む

みずからの…ちしぶきしぶく

唇をもはや

噛み千切ろうと、…嘘

どうしてあなたは一度も噛み千切らなかったの？

やればできたのに…ちしぶきしぶ

あなたの唇を…嘘

どうしてあなたは一度も噛み千切らなかったの？

やればできたのに…ちしぶきしぶ

あなたの唇を

嘸み千切らないように

全部嘘。…

あまりにも清楚な喉があんまりにも清楚に女の

女らしい女のかたちをなぞって、ちぶしくしきぶく。そして…嘘

無慚にも清楚なまゝで足の爪に至る

うつくしいひと

夢のような

彼女は自分で飛び降りた（開かれた朝の窓に駈け寄って跳躍）

眼の前で（…鳥。）

わたしの（…鳥は羽搏いたのだった。）眼の前

手のとどく距離（眼の前で、）…嘘（鳥は、）

十四の春に

バスルームの扉を開けた時壬生はそこに匂いが充満していたのを感じて弱音。おどろくほどの。そしてあえてのけぞりもしなかった。他人の躰の中の内臓の弱音。おどろくほどの。乃至そこに溢れかえった躰液の匂いを想わせて室内は臭気に倦み弱音。おどろくほどの。籠る湿気た匂いに温度さえ感じられた。扉をあけた瞬間に停滞した臭気が弱音。おどろくほどの。それでも一気に外気に觸れて清涼さに薄められた。そのあからさまな一瞬の存在にはに気附いた。猶もひたすらに匂った。扉をあけても聲、弱音。おどろくほどの。そのくゞもった、喉のならず音聲の己むことはなかった。ふりむきもしない。音声は室内に響きさえせず、弱音。おどろくほどの。便器の周りにだけ小さくなっていた。そこにしか音が存在しないように弱音。おどろくほどの。感じた。壬生は嘘をつかれたように思った。コンクリートの壁と、鐵の扉の向こうにまで漏れて顯らかに聞こえつづけたそれは、耳を澄まさなければ聞き取れもしないほどにしか、そして匂いと音のさざめきの中に、ゴックは膝間付いて尻だけを突き出し弱音。おどろくほどの。便器を抱えて吐いていた。壬生はゴックが壬生の、彼女を見つめているまさに壬生の存在にさえ気づいていない事實を確信し、ゴックは吐いていた。わずかの吐瀉物は弱音。おどろくほどの。音をさえ立てなかった。唇だけが濡めった音を立て、雪菜のように、と。壬生は弱音。おどろくほどの。吐くゴックが胃液をだけようやく吐いて、そして唇の糸をひき垂れる儘に任せているのを感じ弱音。おどろくほどの。汚くないよ、と。

わたしは、…と。

ゴックはさゝやく、そこに、背後に、扉を開けたのが壬生以外にはありえない事を感じ、すでに壬生を感じ終わってゴックは壬生を感じ、そして感じ切り、まさにまざまざと感じ切り切ってゴックは

愛してる

さゝやく、心に、…穢くないよ、と、心にだけ

さゝやく、わたしは

愛してる？

心に、その

穢くないよ

愛してる

心にだけ、その
吐いてるだけ、なにも
愛してる
心にだけ、その、それ
穢くないよ、いま
愛してる
心に、心の爲にその心にだけ
わたしも、なにも
愛してる
さゝやく
穢くないよ、と、ゴックは、そして——なにしてるの？
聞いた。壬生は、自分の喉が発した聲を
——なに、してるの？
壬生はさゝやく。その嘔吐のひそかな、殊更に潜められた音に被せるように、敢えて被
せて、蔽い被せて、その音響を染めて、塗り込めようとする…と。
想う。
壬生は、…聲で？
俺の聲で？
——なに、してるの？
生まれるよ
もうすぐイノチが、と、ゴックは、もうすぐ、あたらしく
思ってもいなかった
あたらしいイノチが、と、
思ってもいなかった僥倖
——大丈夫？
さゝやいた瞬間（——ゴックの、ただゴックの爲にだけさゝやいた瞬間に）壬生は言葉
を失い壬生は自分が沈黙し、（窓の外には空が）黙り、黙するにまかせ、（あまりにも青
いはずだった。）ゴックの喉は（…あきらかに。）吐き続け、…吐いてるの？
想う。ゴックは、
吐いてるよ、と、壬生は思った、あなたは
吐いてるの？…愛してる
穢くないよ、と、心に
吐いてるの？
わたしは、と、ゴックは
心に
穢くないよ
ささやく。
心に。むしろ壬生の爲にだけゴックは、かくて僥に頌して曰く
音を聞く
そこにいたの？

胎内の
ひとりで
極度の、そして
ずっと
殊更なほどにちいさな變化が
そこにいたの？
音を立て
ぼくに
立てさせられた音が鳴った
あなたの
喉に
その
生まれるだろう
あなたのいばしょは
わたしは思った
ひみつにしたままで
もうすぐ
そこにいたの？
そこから
きょうはもう
生まれるだろう
あめはふらない
吐かれる喉の
そこにいたの？
その反対側の
かならずしも
出口から
ひみつにするきはなかったのだった
血にまみれて？
かならずしも
或は切り開かれた
ひみつにしたきはなかったのだった
胎の中から
そこにいたの？
血にまみれて？
もうすぐそらに
わたしのよう
はながさく
ゴックのよう？
そこにいたの？

久生のように
もうすぐそらが
久生がそうして
はなをかむ
そうしたように
そこにいたの？
生み出す
ぼくはあなたをさがさなかった
ゴックが？
そこにいたの？
ゴックのように
あなたをみすてたわけではなくて
胎の中から
ぼくはあなたをさがさなかった
血にまみれて？
まいそうされた
叫ぶ聲とゝもに
はなのかおりは
はじめて外気を
そらのその
吸い込んだ肺
せきらゝなあをに
はじめて異物に
とけていった
肺がふれる
そこにいたの？
吐く
ぼくをひとりで
ゴックは吐いた
まちもしないで…おれを
吐く
そこにいたのを？…わすれてた？
ゴックは罵るように
ぼくのこの…おれのことなんかわすれてた？
喉に吐いた
そんざいを、けれど
吐く
あなたはちどは
ゴックはそこで
わすれていただろう？

便器に縋り
そこにいたの？
すがりつくように
とりたちようたえ
便器をかゝえて…両手に
そこにいたの？
吐いた（両手のふるえ）
そらが
吐く
そらがはく
ゴックはまさに
だえきをたらして
便器の口に
そこにいたの？
顔を突っ込み
ぼくはあなたを
髪の毛を
みいださなかった
その濡れたふちにまでも
みつめるまなざしは
へばりつかせて
ぼくはあなたを
吐いた

かくに聞きゝ 8月28日壬生ゴックに白シて問へらく最近、どうなの？

なに？

コロナ。…いないよ。もう…最近は、…

いない？

あたらしい人、二三日くらい？…見つかってないよ

終わったの？

なに？

隔離。

…まだ。かくてゴック聲立てゝ笑ヘル聲胸元に聞きて聞きヲはるともなクに壬生ゴック
を居間なるソファに抱きかゝえて坐する儘に想ひ附きてゴックに云さク海。

うび？

海。

うに？

うみ。…伊迦那ゐ？

海？

宇美。…伊迦那井？

うみ？

行かない？ 宇美邇

海に？

行こうよ。ひさしぶりに、…さ。かくてゴックふたたび聲立てゝ笑へる聲胸元に聞きて聞き遠波留とも那久邇壬生ゴック居間なるソファに抱きかかゑて坐す儘にゴックが髪を撫でき時すでに夜九時を過ぎて壬生耳に観ずるにいまダ封鎖さしたる町たゞ静かなりキ壬生ゴックが行くや否や返答未だせざるに立ちてゴックが手を引きかくてバイクに乗りテ俱なりテ海に行きゝ町の三車線大通り等人影も無シ家ゝが照明等又街道が街燈等のミ明らかなりきかくて壬生ゴックと俱なりて海に行き湾岸道路にバイク止メかくて海を見テ海それ黒の一角ノ中に波の泡の白色ノみ青ミてさまざまに際立ち消えり海を聞ひて波立つ音耳にさわぎさわぎ続けてもの狂をしキまでに寂なりて静なりてあざやかナリき見上げたル空たダ昏く青ミて黒く遠ク雲のさまざまを散らシて流シそれら流動する雲母ノ如かりき壬生我を忘れてそれらを見き又曾禮良乎聞きゝかくて頌して

すさまじい

うみ、よくくるの？

遠い他人が流れて行った

うみに？

それらしら雲ら

うみ、よくくるの？

眼の前の

うみ？

遠い目の前で

しずかだね

せめて轟音が

だれもないね

すくなくとも私にとっては

しずかだね

せめてとゞろく轟音が

すずしいね

立てられるべきだったすさまじい

ささやくゴックの

轟音さえ響かせないで

いくつかのこゑを

巨大な白い

わたしのみみは

雲母の塊りは流れ、その

ききとりながら

しら雲ら

なんのこたえを

かたちさえもくずさないままに

するわけでもなく

あまりにも澄んだ
ただほゝえみ
白い色彩の
むねにだいた
色彩の無垢に
ゴックのためにだけほゝえみ
或はそれら
うみすき？
しら雲ら
うみ？
もはや暴力的な息吹きさえも感じた
すき？
巨大なはずの色彩ら
うみすき？
まなざしにうかぶ
うみ？
巨大なはずのしら雲ら
うみすきなの？
遠くに光の粒立ちが見えた
なにみてるの？
線を描いて横に延び
くも？
途中で途切れた
くもみてるの？
向こうに広がっていた
くもすき？ くも
それは海岸線の光り？
くも？
空と海との境界は
くもすきなの？…くも
黒と青みた黒の一色のなかに
うみすき？
顯らかな差異を曝した
うみ？
かすかに湾曲した直線として
くもすき？
海が鳴った
きれいだね
さざめき、ざわめき
だれもないし

リズムの一定など…
しずかだし
海が鳴った
きれいだね
どこまでも、容赦のない不意打ちの連鎖
うみくる？
もはや音響に
うみ？
どこまでも、無慈悲なまでに好き放題の生成
よくくる？ うみよくくる？
寄り添いさえしないで
だれと？ だれ？
どこまでも、
ひとりで？ だれ？
波打ちの白濁はきらめいて砕けた
うみすきうみ？
あくまでも音響とはあまりにも無関係に
うみすき？
あくまでも音響とはあくまでもふれあいもせずに
くもみてくも
まして響き合い
…くも
まして呼応しあうことなどなくに
きれいだね
人と人ゝ
ふいにおもった
少なくはない人ゝは
ゴックのこゑを
周囲にはるかな遠くに
みみにしながら
自分ら以外の
わたしがわたしでありえたことさえいちどもなかった
海に集まった人と人らをそれぞれに離れ
うみはうみでありえたことさえいちどもなかった
離れ離れに
くもはくもでありえたことさえいちどもなかった
ベンチに座り
しずかだね
海辺を歩き
ゴックはいった

砂浜に座った
だれもないね
人ゝは
しずかだね
そこにいる人の群れを
ゴックがささやく
嫌悪も無くに忌避してちらばり
だれもないから
人ゝは
しずかだね
生きた息吹さえも曝さなかった
うみすき？
話し合う聲の響きさえ聞き取れない
すき？
距離の中に
うみすき？
わたしはゴックを胸に抱きながら
わたしすき
そこにいる人の群れを
すきだよ。すき
嫌悪も無くに忌避してちらばり
うみすき？
彼等には
およぐ？
生きた息吹さえも曝さずに
およぎたい？
話し合う聲の響きさえ聞き取らせずに
すき？
ゴックの髪の毛の匂いを嗅いだ
およぐのすき？
見上げた儘に
うみすき？
空の雲母を？
うみ？
見上げた儘に
すき？ うみうみすき？
不意に聞く
すきな？ すき？
私の耳は、不意にゴックの
くもすき？

淋しいの？
きれいだね
ささやいた聲を聞いた
しずかだね
ゴックは私の胸に顔をあげ
だれもないから
鎖骨の上ののこぞるように
うみすき？ すき？
そして唇が笑っていた
うみすき？
邪気も無く
およぐ？
まるで無辜なるかたちを見せて
すき？ うみ
唇は。目が
うみすき？ またくる？
潤んだままに
すきな？ すき？
無機物の質感をだけ
すみすき？
殊更にさらす

九月朔日朝。耳の近くに聞いた。悲鳴。壬生は、短い、それ。ゴックの。それら。不思議な程の遠くに。ゴックが不意に悲鳴に近い聲を喉に立て、必死に押しとゞめようとしたまゝに聞こえるか聞こえないかの、…音響。一瞬の。ゴックではない他人が見ず知らずに喉にだけ立て、そこに投げ落としたような。壬生は聞いた。ゴックは未だに着衣も無くて、さらした肌の背中に体内の他人の誰かのあらゝぐ息遣いを逆らえずにさらけだしたかにも、荒い息遣い。途切れることの急激な、酸素の供給の無いあわたゞしいだけの息吹き。痛みをさえ壬生に、顯らかにあざやかに感じさせたほどに、大丈夫？

さゝやいた。

…ね、と。

ゴックはあらゝぎあえぎかけあらゝぎ振り返りもせずに

大丈夫？

さゝやいた。心に、たゞ壬生の爲にだけゴックは、…だいじょうぶ？

と、さゝやき聲のわずかの一音の匂いだにもないゴックの喉がこするようなノイズをのみ響かせ、壬生は目を逸らした。そしてゴックは息を止め、吸い、吸い込み、吐き得ずに唾液を引き、吸い、尚も吸い込み、吐きかけ、死ぬ、と。はく。

ゴックは、死ぬよ。

さゝやいた。心に、…なにが？

なにが死ぬの？

生まれるよ

と。

さゝやいた。心に、…なにが死ぬの？

生まれるのに？

と。

さゝやいた。心に、…死ぬ。…と自分の爲にだけささやき、…嘘。

ゴックは

あなたの爲に。

さゝやいた。心に、…あなたの爲にわたしは、…と、…ささやく

死ぬ。

生まれるのに？

と。

さゝやいた。心に、…死ぬ。

うまれるよ、…と、さゝやき、ささやく。ゴックは

あなたの爲に、と。

ゴックは、そして壬生は意味も無く又意図さえも無くてその傍らに、洗面所に自分の手を洗った。流れ出す水、その流れが——音響。

ほとぼしる。音響の逆り…それ。

聞く。

音響…と、手にぶつかって砕け、散る飛沫に成って散り、砕け、かくて傷に頷して曰く

のそけぞるように

不意に背をのばしたゴックがそのとき

のけぞるように

仰向けに、頭から

こんなにも？

後頭部から仰向けに

こんなにも？

倒れ

こんなにもくるしいの？

失神した不意の、不知の一瞬のように

くるしいよ

倒れ、のけぞって

こんなにも？

四肢をなげだし

こんなにも？

知っていた。わたしは

くるしいよ

ゴックが

こんなにも？

仰向けに横たわったその

こんなにも？

バスルームの
くるしいの？
タイルの淡い青の上で
わたしを見もせずただ上に
上の方にだけ視線をながし
天上を？
何かを見詰め
何を？
ゴックはさゝやく
洗って
さゝやき、ゴックは
…ね
ゴックはさゝやく
水で
さゝやき、ゴックは
シャワーの
ゴックはさゝやく
シャワーの水で
さゝやき、ゴックは
きたないよ
ゴックはさゝやく
わたし（…こないで）
さゝやき、ゴックは
きたないよ（…きないで…こな）
ゴックは（…こないで）さゝやく
あらうよ
さゝやき、ゴックは
あらって（…きたないから）
ゴックはさゝやく
みずで（…ながしきる）
さゝやき、ゴックは
…ね（…なかしぎる）
ゴックはさゝやく
きたないくない？（…ないよ）
さゝやき、ゴックは
あらって（きたなくないよ）
ゴックはさゝやく
きたないから、と（…ながすきる）
さゝやく聲に
見向きもしない儘にわたしは（…なかずぎる）

さらされた他人の全裸にぶちまけた
ノズルの水流
ゴックのそれ
シャワーの
…嘘
迸る（散れ）
もう、あらゝぎもせず
ほとばしる水
ただ、（飛び散れ）しずかな
水流
静かすぎた
飛沫（散れ）
しずかな息遣い
散る。飛び
だれ？（飛び散れ）
とびちる飛沫
ゴックの、…
ノズルの水流
洗った（…匂う水の、水の水らの匂いの）
シャワーの
わたしは彼女を
迸る
頭から（散れ）
ほとばしる水
つま先まで（飛び散れ）
水流
うつくしい？（散れ）
飛沫
その全裸が？
散る。（飛び散り）飛び
肥満にちかづく
とびちる飛沫
豊満
ノズルの水流
のけぞる
シャワーの
背筋
迸る（のけぞる）
唇、…なぜ
ほとばしる（散れ）水

なぜあなたはいま唇をとがらせたのか？

水流（散れ）

見ない

飛沫（のけぞる）

眼を閉じたから。ゴックは

散る。（…見た）飛び

見なかった

とびちる飛沫

何も（…息遣いながら？）

ノズルの水流

漏らした？（散れ）

シャワーの

恐怖の（飛び散れ）なかで？

迸る

窒息の（のけぞる）

ほとばしる水

安らぎの中で

水流（のけぞる）

浄化の？

飛沫（散れ）

穢くないよ

散る。（散り塵りに）飛び

まみれただけ

とびちる（散れ）飛沫

あなた自身の体液に（のけぞる）…自分

ノズルの水流

自分自身に？

シャワーの（…見た）

気付くだろう

迸る（…見ていた）

わたしは

ほとばしる水

コックをひねって

水流（さまさまの）

水を止めた時

飛沫（さまさまの）

むしろ（音響の群れを）そのとき

散る。飛び

わなゝいていたのを（のけぞる）

とびちる（…生きてる？）飛沫

その轟音。…とび散る水の、(此のすさまじい生き物らのすさまじい繁茂) 赤裸々に立てた赤裸々な(のけぞる) 轟音

その、さっきまで(散れ)のあきらかな(飛び散れ)その
存在の不在に

かくに聞きゝ 8月5日壬生メ覺めたるに朝暗く部屋のうち暗くシてあふれよ窓が向かふもあふれよ暗シ空あふれ曇りき壬生あふれそノ白濁の色あふれかえり見キかたわらにゴックがあふれかえって寝る寢息ノ音ありて耳にあふれよ聞きゝかくてあふれよ壬生ゴックが目覺めて後あふれよゴック朝食を作ルを居間にてあふれよ待ちてあふれ眼ノ左のあふれ前の先あふれ台所部分にあふれかえりゴック調理シたるをあふれかえって後ろ姿に見てあふれ、あふれかえって観る登裳那ク爾壬生あふれよすデに知りきすデにあふれよ空晴レき雲あふれよ き白濁なくたダ飛多須良爾あふれ白くしろくしてあふれ白ク空があふれよ青の青なる青があふれ處ゝに停滞シあふれ浮かびきかくてあふれ午前があふれかえって盡きゝ昼食と裳那く爾あふれかえってまさにあふれあふれて居間なるソファにあふれよじゃれてジャレあふれよあやしあやす儘にあふれゴック壬生が腕の中にあふれ眠りきゆゑに壬生あふれかえってややありて迦久天あふれ壬生あふれゴックが身ソファにあふれあふれて預けゴックかくてあふりかえってほとぼしりたばしり

ほとぼしり

あふれ

あふれかえるように涙よ、その

みずからの温度を

咬めソファが上にしれ寝姿さらシかくてしれ窓より差ス光まバゆくも斜メにしれ差し差シ込ミしれ寧ろゴックが身ノみしれ物の翳りに墜としつつみてしれ寢息やスらぎてしれ寢息静かなりてしれ寢息時に纔かにノみしれ亂れきかくて壬生暇もてあますともなくに庭に出テ日ノ直射浴び浴びタル儘に肌光ノ熱感じ感じるが儘に壬生傍ら樹木見かくて観るままに壬生…雨。

雨が…

雨？

…雨。かくに壬生ひとり思ひてかくて飛登里心にノみ白シてきゝやき言さく突然に

雨？

ふれもはや

突然に

せきらゝなまでに

雨？

…雨。かくてかく那里天壬生見上ぐるに空青ク青かりて青かる儘空雨雲もなきに雨ふらしき小雨にも満たぬ霧雨にも満たぬしかれども雨ハ雨なりて晴天に雨ふり晴天雨ふらしで晴れ晴レ渡りて晴レ晴れ渡りきかくて頌シて

それがどうしたというのだ？

匂い立つ

たとえその

木。…き

はれきったそらが
樹木。…じゅ
ふいに
き
あくまでもふいに
匂い立つ
あめつぶをしらせ
葉。…は
ふいに
はハ
あくまでもふいに
は
かげることもないひかりに葉の
葉ゝ
上に落ちた水滴はそれでもきらめく——あからさまに
匂い立つ
それがどうしたというのだ？
幹。…み
たとえそのかわききったままのつち
み
あしのさきに
みき
てりかがやくありの
み
ありらのはうつちが
きゝ
かわききるまま
幹
ひあがったままにそれでもふっていたあめ
きゝき
その水滴に濡れたひとつぶのつちのつぶのひとつぶだけのみずびたし。蟻
幹
蟻ら
匂い立つ
その
つつ
ちいさな複眼はまがうことなく見出したのだった
つつ。…っ
全方位の視野にひろがる上方の空。まなぎしの行きつく先まで
つつ、ち

その青もう一度
ちっ、つつ、つつつ、つつち、ち
視さえすれば氾濫が。おそらくは
ちっ
ひかりの。氾濫が
ちっ、ちち
輝いた閃光。おそらくは
土
全方位の眼差しの上方に、かならずしも見出されはしなかったそこに
ちっ
かがやく閃光
ちっ、…いっ
…ひかり
いっ…

茫然とした眼差しに、ゴックは天井を見続けた。壬生はシャワーを止めた後もそのノズルをつかみ続けて、そして足元にホースが云うことを聞かない儘理不尽な抗いをさらし緊張し続けるを感じていた。つわり？ と。壬生はゴックに問いかけようとして、そのあまりに謎めいて感じられた謎の無い言葉の顯らかさにひとりで倦んだ。ゴックは生むに違いないと思った。生み、育てるに違いない。それを壬生は良しとするとも抗おうとするともなかった。憂鬱になる程に、足元の先にあお向けた儘のゴック茫然としていて、穢いよ。

と。
とても、とても。
と、
…ね。
とてもとても穢いよ。

ゴックは思う、ひとりで
穢いよ。
秘密ごとめかして、ゴックは
穢な過ぎるよ

と、
さゝやき
穢いよ、ゴックは、それ。

天上に垂れかかった水滴のつぶが、その透明の向こうに天上に染みた褐色の沁みの色をそのままに透かし見せているのを、…ね、と、

——大丈夫？

壬生は云った。ゴックは我に返るともなくに、天井を見つめ続ける儘に、

——生きてる？

云った、その壬生の聲を聞いた。ゴックは今更に自分の肺の呼吸し続け、唇で息をし、吐き、吸っていた事をあからさまに冷たい水。

と。
想う、…びっくりするくらい
びっくりして
と。
驚くくらい
と。
驚いて、と、ゴックは、びっくりしてそして
失神？
と。
…嘘。——
冷たい水
と。
肌を濡らし、と、ゴックは肌を完全に濡らし
あふれだすそれ
髪を濡らし、産毛、…全身の、産毛。睫毛も…眉毛も？
と。
冷たい水
濡れ、濡らし、濡らされ、濡れ
と。
冷たかった水。もう、と
だから濡れた。…わたしは
もう、と。
もうすでに
水は？
と。
水はどこへ？
と。
どこへ…どこへ水は？——聞こえる？
壬生はさゝやき、——聞こえてる？ 壬生はさゝやき聲にささやき、壬生は、——俺の、…
ね？…と、
——俺の聲？
判った！
と、ゴックはいきなりに壬生を見て、そして——大丈夫だよ。
明日は…
判った！
我に返ったように見えた。ゴックは、そしてその唐突に正気付いた眼差しを
百合の花が海に降る
——心配しないで
判った！
——もう大丈夫だよ

壬生はひとりだけでつぶやいたように、さゝやいたゴックの声を聞いた。かくて傷に頰
して曰く

見ていた

いくつもの水滴が

まさに彼女の

肌を濡らした水滴が

ふるえもしないで滑りを散るのを

その色

透明な儘で

向こうを曝し切ることも無くて

あるべき肌の

その色

気付かないほどにゆがめた色彩

水

透明ではない…美豆

透明な色…美都

十九歳の春に…美津

…嘘。——

その

冬（——いまだ厳しく凍てつく）

櫻に遠い春の直前の

冬？

明日も厳しい冷え込みが予想され

二月の半ばに

雪菜は吐いた

腹の中に

子供の息吹きも無い儘に

雪菜は吐いた

なぜ？

と。（——洗って）なんで？

雪菜は云った

のけぞるように（——叫ぶように）

明日も厳しい冷え込みが予想され

背をのけぞらせて

明日も厳しい冷え込みが予想され

のけぞるように

雪菜は。…吐く

へし折るように（——なぜ）

首を折り曲げて

息が（——洗って）もう

出来ていないかのように唇を
他人のように先をだけ（——なぜ叫ぶように）ふるわせ、そこだけが他人
の部位だったかのように
なんで？（——振り向きざまに雪菜は）
わたしは見る
なんで、（——洗って）吐くの？
彼女をそっと
わたし、（——水浸しにして）なんで…
慈しむように
なんで（——シャワーで）吐いてるの？
雪菜だけを
死ぬのかな？（——なんで？）
私はその、あきらかな怯えの（——洗って）色の目に生起した一瞬を
しにたくないの？
見た。（——振り向きざまに）雪菜は
なんども
わたしが（——雪菜は）目を覚ます前に
なんども
ベッドをぬけて（——振り向きざまに）
死のうとしたのに？
ひとりで（——水浸しに）吐いた
嘘なの？
渋谷の（——、水びたしに）部屋…その
死にたくないの？
雪菜の（——はやく）部屋で
怖いのか？
神宮の（——なんで？）森？
死ぬのが
いまだに（——振り向きざまに）なにも
なんで？
肌にまとわずに
怖いのか？（——雪菜は）
さらされた褐色が
死ぬのが
わたしが（——なぜ？）電気をつけた瞬時に
怖くないよ
あざやかに
俺は（——洗っていいよ）
やわらかいオレンジの
あなたが（——頭先から）俺のそばにいるから？

光に
そして、(——つまさきまで) 俺を
くすんだその
俺だけを (——いいよ) 愛していてくれるから?
褐色を (——ね?) 曝した
他人の死に怯えはなく
見つめた。(——あらっていいよ) 吐き
怯え得るのはいつも自らの死だったというなら
ひとり (——全部)
雪菜のいくたびものその
ひとりで (——やりたい放題)
自殺未遂は
なんども (——好きなだけ)
あくまで (——洗っていいよ) 他人の死だったに違いない
何度も吐き、ようやく
顔をあげた雪菜は、(——早く) 怯え
明らかに (——ね、…)
雪菜は (——洗えよ) ひとりで
のけぞるように
あきらかに (——早く) 怯えて
背を (——ながせよ) のけぞらせて
死ぬの?
へし折るように (——糞だね)
想う。(——あんた) わたしは
首を折り曲げて
一人だけで (——くそだね)
息が (——なに…) もう
死ぬの? (——なにやってんの?)
出来ていないかのように (——なに見てんの?) 唇を
ひとりだけで (——くそ?) わたしは
他人のように (——くそなの?) 先だけふるわせ
想う、(——なにやってんの?) …いつ?
なんで? (——なにも…)
わたしは (——なにもできないの?) 見る
なんでなの?
彼女を (——はやくしろよ) そっと
なんで、(——雪菜は) わたし
慈しむように
なんで (——振り向きざまに) 吐いてるの?
雪菜だけを (——くそ)

死ぬのかな？
その朝、（——はやっ、）ひとりで目を覚まし
なぜ？
かたわらに居ない（——や…）雪菜の
どうしたの？（——ろよ。ろっ）どこへ…
雪菜の不在に
なんで？（——はやくしろよ）
かすかに（——はやく）一度
どこなの？（——ながせよ）
一瞬だけ（——くそ）怯え
寒かった。（——はやっ）なぜ？
まるで、（——ねがう）外に
どこ？（——わたしは）
雪が降っているかのように？
…嘘。（——その聲）まさか——
雪菜が（——叫ぶ）居ない事に
ベッドに（——雪菜の）
雪菜が（——叫んだ聲が）居ないことに気付いたわたしは（——聴て）
どこに？（——しずかに）
彼女を探すつもりもない儘
…尿意。（しずかに）
そこにいたの？
吐く（——沈黙することを）
そこに？
吐き、（——彼女を）雪菜は
さらされた褐色が（——シャワーで）
…だいじょうぶ
わたしが電気をつけた瞬時に（——わたしは）
怖くないよ
あざやかに（——雪菜を）
死ぬのさえも（——水浸しにしながら）
やわらかい（——はやく）オレンジの
俺があなたのそばにいるから？
光に（——洗え！）
そして、（——はやっ）あなたを
くすんだ（——やっく、く）その
あなただけを愛していてくれるから？
褐色を（——はやっ）曝し
なぜ？
と。（——くそ）なんで？

雪菜は（——ながせよ）云った
のけぞるように
背を（——はやく）のけぞらせて
へし折るように
首を（——ながっ）折り曲げて
息がもう（——はっ）
出来ていないかのように唇を
他人のように（——なっ。な）先だけふるわせ
わたしは（——なっ）次の（——なっく、）日に
雪菜が日野市でひとりで死ぬのを一人で見た。その
雪の白

かくに聞きゝ 8月十六日昼ゴックが部屋ノ寢台にありきかくてかたわらに素肌曝シたる
儘に寝息たテたるゴックひとり眠りキ壬生目をだに閉ざスことなくて天井ヲ見かくテ見
て観ルに見き天上に叩きツけるやうにも差シ込みたる外なるなにもノかの反射の閃光が
白くひたすらにも白ク鋭クかゞやきゝ 壬生見て観つツけそノ閃光の微動もなきにかくて
頌して

まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
知れ。あなたに話そう
まさに。あなたの爲に
知れ。へばりついたそれ、光の中にさえ
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
死者の翳り、わたしは名まえさえも
ましてその存在のあった記憶さえも無い
その死者の肉の齒の群れら
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
知れ。母は十四歳の時に身を投げた
代々木にあてがわれたマンションの十二階
鳥のように？
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
その朝の日ざし、朝の閃光
横殴りの、そして吹き込む風
眼の前に広げられた母の大口の記憶
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
母のすでに居なくなった部屋の中に
ひとりでで私は…まさか
歓喜の聲を？ まさか、解放された歓喜の聲を？
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
むしろ苦痛。自分が死ぬ、その事実すら
あきらかに知りもしない儘に
窓に踊った母の爲に？…まさか

まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
孤独。まさに…底知れない孤独、無間の
無限の、永遠に取り残された孤独に永遠というもの
その切実さを知る…まさか
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
悲しんだ！ わたしは。だから、わたしはまさに
哀しんだ！ ひとりで、飛び立ち失墜した母の死を
私を咬み、貪るように咬んで遊んだ母の爲だけに…まさか
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
わたしは知らなかった。その時に、わたしの体を
四肢を
かすかにふるわせていた感情の形をは、終に
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
死者の翳りはつぶれた腕の
流動する肉のわななくままに
玉散り
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
あなたに話そう。まさに
あなたの目をこそ覗き込みながら？ もはや
だれも他人とは言えないだろう、私すら
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
わたしすらわたしが一度もわたしであり得たなどと
錯覚し得もしない今こそ
死者たち。不滅の、滅び得ない死者たちの翳りに
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
知れ。稚彦は十二歳で
雨の中に。うつくしい知性の無い稚彦はときにわたしの
肌に戯れ、貪るようにも…交歓。心と肌の。雨の中に
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
雨の中で、血を流しながらひとりで
死んでいく稚彦をわたしはひとりで
見ていたその、匂う匂い。雨の濡れた土の？ 匂う匂い
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
性に目覚める？ 幼馴染の稚彦の
うつくしく匂う柑橘系の肌の匂いに…そのあきらかな
他人の肌に。肌をおしつけ、なすりつけさえ
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
見出していた。少年の肌の
そのうつくしさに茫然と、わたしは彼の
知性の無い濁音のあ音を耳に聞き

まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
戯れつづけた。慥か十歳？…その頃から
わたしは稚彦の幼い体を、まさに
わたしと同じく幼い体
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
わたしの眼には、わたしと同じく完成された
成熟された体のうつくしさを…心を
心をこそかさならせながら？
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
心など。…人間の言葉など、わたしの口しかなかった
濁音のあ音…人のふりした人の言葉など、そして
心と名づけられたものなどもはや
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
人になりおおせた擬態の心、その
言葉になど遠く離れて。かさなった
いわば、…濁音のあ音。存在をもて？
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
慥かに彼をわたしは殺した。雨の中で
わたしの戯れた唇を、まさか
拒絶した？ その稚彦の不意の一瞬に
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
拒絶した？ その小高い山の上の無人の四阿屋…六角堂？…その樹木の翳りに
わたしの胸にいやいやをして？ 口には
濁音のあ音。雨にぬれよ
樹木。それら、茂った樹木、嚴島の鹿の気配を背にして
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
静寂。参道はずれ、忍び込んだ崖のちかくに
茂れ。樹木よ、生き物の
すさまじい繁茂
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
秘密にされたわけではない。ただ
言葉もて、だれにも話されなかつただけの
まさに秘密？ ふたりの秘密
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
拒絶した一瞬の稚彦に、憎悪？
わたしの突き放した腕が突き放し、稚彦を…なぜ？
その一瞬、樹木の幹に——檜？
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
揺れた枝、齒ゝは上空に。ぶつけた後頭部のせいで
吹き出した血。眼の前に…なぜ？ 流れ出した血

口からも？

まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに

稚彦の茫然。茫然とわたしを、…剥かれた眼、知ってる？

濁音のあ音。あなたはは今、血をながしてるんだよ、知ってる？ それこそ

つまり

まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに

痛み。それこそがつまり、まさに痛み。知ってる？

あなたはふれた。今、痛みこそ

あなたは咬んだ、その痛みをこそ

まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに

稚彦はすでに自分で舌を咬んでいた

なぜ？ 稚彦は

いつ？

まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに

過失として？

すでにして、口にあふれさせたその色は血の

過失など、あったのだろうか？…稚彦に

まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに

知性のない稚彦に

わずかにでも、せめてもの僅か程度だにも、もはや

過失など。——あったのだろうか？

まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに

あるがままに。まさにあるがままに

稚彦は死ぬ。あるがままに、その濁音のあ音

あるがままに血を流し死に

まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに

心など！…まして精神

ましてそれ、精神のかがやきなど！

濁音のあ音

まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに

まさに自分の死に直面したまま

稚彦は自分の死に懸けた事実さえ知らなかった

あるがままに。まさに、ただ

まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに

あるがままに稚彦は自分の死の事実をだにも

雨よ洗え。その

雨よ流せ。その

まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに

知れ。死者ら。壁にへばりつき

天井に肉を

流動させた極彩色のうちに
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
わたしは見ていた。もうすでに
あらく息遣う稚彦はもう血にまみれて雨の中で
彼はもう助からないと。…故にまさに
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
稚彦は生きながらにすでにまさに死んでいるのだと
確信。あざやかな
それは確信。揺るぎもなかったわたしの鋼鉄の確信
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
散れ雨よ、逃げ出したわたしの、雨の中に
散れ雨よ、水浸しの荒い息遣いを
恵美子は咎めて案じて諫め
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
濡れた？ ぬれてるね？ シャワー浴びて！ シャワー浴びて！
すりぬけるように。わたしは
びしょびしょじゃない？ びしょびしょじゃない？
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
ぬれたんか？ のうぬれたん？ おえんではようしゃわー！ あびにゃあいけんで
はようあびてき！
恵美子のかたわらをすりぬけて笑いながら？
風呂場に…笑いながら？
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
放置された稚彦はもう
いままさに
ひとりで死んだに違いない
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
シャワーの温水に体をながし
温めながら
わたしは稚彦の死をまさに確信した
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
死者らの鬩り。さまざまに
腐った血の玉を散らし
不滅の死者らの鬩りの色ら
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
あなたに話そう。まさに
あなたの爲に話そう、その夜に
久生がわめく。その夜にわたしは
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
抜けだした。家を。わたしの…恵美子の

宮島の。その丘の中腹にあった家、わたしは
護身用に？…恵美子の包丁を持ち出して
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
雨はすでに已んでいた。そんなことはすでに
知っていた。すでに、部屋の中から、その夜中一時
わたしは雨の音の無いのを知って
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
家を出た。ただ稚彦の死を
この目で確認するためだけに
わたしは昏い登り路を
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
登った。気配する鹿の眼差し。わたしは
登った。見上げれば、ひよっとしたら
満天の星が？
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
見た、そこに、その
六角堂の参道を外れた繁みの中に
崖のこちらに眼の前でなんども失神する、生きた稚彦を
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
失神と覚醒を繰り返す。まさに泥にまみれてまさに
泥だらけで？ まさに血の色さえ隠し通してまさに
泥だらけで？ 泥の中から、今、生まれたように？ まさに
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
わたしは狂った？ むしろ
あまりにも強烈に覚醒して？ わたしは死にかけた
なんども目の前に失神するすでに死んだ稚彦の腹部に
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
突き刺した。包丁を、その時に
わたしは確信した。わたしが
最初からこうするつもりだったことを
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
夜中に目を覚ました一瞬に
雨の音の無いことを確認したその耳に
わたしはまさに、さきらかにこうするつもりだったと
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
むしろシャワーに雨水を、あるいは
肌にこびりついたかもしれない稚彦の汗をも
洗い流しながら？ まさに。わたしはまさに
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
六角堂の山道を、雨の中に

その飛沫。雨のしずくのしづくしづくのしずくらの下に
走る息を躍らせながら？ まさに。わたしはまさに
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
吹き出した血。頭から、濡れた髪…黒。そして
光沢はあざやかに…
吐き出された口の血。その時に？ まさに。わたしはまさに
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
むしろ、その日山道を下った二件隣りの大津寄稚彦の家に
稚彦を迎えに行ったその時、玄関の奥に笑いかけた、その人
大津寄結子の不機嫌な笑い声に？ まさに。わたしはまさに
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
むしろわたしは、最初からこうするつもりだった
刺し、突き刺し、刺し抉る
最初から
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
わたしはすでに知っていた。わたしはすでに
こうする事さえ知っていた。わたしは思った
その時に、まさに刺した。わたしは
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
刺した！ 嘔き出した…血？
見なかった。その匂いさえ
嗅がなかった。もはや
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
朝までいた。そこに
稚彦の肉体が流した血に、他人の。もはや
稚彦にさえとって他人だったに過ぎない他人の血に
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
汚れながら。おそらくは。茫然の中に、土の
匂いの、そして血の
匂いの、そして
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
左に上がる日の光の
夜明けの紅蓮に
目を開けた
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
あなたに話そう。まさに、あなたに
玉散る血、玉散らせながらしたたる血、したたらせながら
喰う。死者たち。それら自分の腸さえ引きずり出してからみつく腸らに
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
その二股に割れた首を絞められ鬩りの死者たち

不滅の不死の
極彩色の肉の色たち
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
山歩きの老人が、早朝に…名前は忘れた
私を見つけた。近所の…加賀武雄の祖父？
言葉も無く
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
問われても、なにも、なにひとつも
言葉も無く、そして彼は、美しい少年の死んだ泥だらけと
うつくしい少年の生きた茫然をかわるがわるに
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
見た。人々は。歎きながら。哀れみながら。悲しみながら。悔みながら
なにが起こったのか、ついには判りきれないままに
見た。人々は、そして
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
ふってわいたような、ふてぶてしいほどの、赤裸々な
大津寄結子の悲嘆の絶叫
…なぜ？ まさか
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
そんなにあなたが彼を愛していたとは
寶珠という名の、稚彦に
知性などなにもありはしないと悟られたのちに生まれた妹は
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
せつないほどに、無言にさらした。…悲しみを
せつないほどに、無言にさらした。…ただ熾烈な懷疑を
せつないほどに、無言にさらした。…無防備な絶望を
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
わたしはそれらを見なかった。隔離され、治療という名の
カウンセリング、隔離され、癒しという名の
監視のしたに
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
町を変えた。学校を変え、住所を変えた。名前は変えなかった。久生とともに
恵美子の弟がわたしを代々木に
引き取った、その
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
代々木八幡の近くの高層マンションに、…だいじょうぶ
東京にはいい病院、いっぱいあるから…と
久生の？…ぼくの？…
まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに
知れ。貪れ。死者ら。死者らは喰う

玉散り

玉散らせ、死者らは

まばゆいほどに。それ、まばゆいほどに

ずぶ濡れのゴックを見て想わずに我に返った一瞬に壬生は、聲を立てずに笑った。壬生は水浸しの床にところどころたまった水を、そのひとつの表面を伸ばした足の先にそっとふれ、…音もなく。そして撫ぜるように蹴ってみ、少しの飛沫さえ散らさずに水の面は揺らいだ。壬生は、そして——違う。

と。

勘違いしないで…と。

想い、ひとり、——違う。あなたを

あなたをあざ笑いはしなかった

さゝやく。心に

あなたの

…聞こえる？

自分の爲だけに、心に

あなたの

さゝやき

狂気？

壬生はさゝやき、そして

狂気を？

さゝやく

——さむくない？

壬生の聲にゴックは応えなかった。壬生はゴックの一瞬の沈黙にさえ気づかない儘に、

——寒いでしょ…

——大丈夫かな？

——風邪ひくよ

——こども…

——服、…着替えたら？

——生きてるかな？

壬生は思わず聲を立てゝ笑った。——って…

と、

——というか、まだ、服、着てなかったね

——なんで？

壬生はシャワーのノズルを

——なんでわかったの？

思わず手放し、手放したことに

——なんで、こゝ…

気付かない儘に、その音

——なんで、わたし、…なんで

足元に響いた、ノズルの跳ねた、その

——なんでこことて？

壬生はゴックの爲にだけ笑んだ。笑み、見つめ、ゴックは壬生の笑んだのを見、見つめ、——誰？

と。

誰の爲に？

と、ゴックは

誰？

と、

誰の爲に、いま？

…と、ゴックの太ももが便器に割られたように広げられた上を、壬生は跨いで放尿した。聞いたに違いない、と。壬生は思う。その音、放尿の、音。響く、水。水分。その、それら水がさわぎ、震える音、ざわつく、…と、——誰？

と。

誰の爲にあなたは…

と、笑ったの？

誰？…と、ゴックは

だれ？

と、

誰の爲に、いま？ かくて偈に頌して曰く

あなたは違う

と——違うんで

あんたはあんひとたあな

ちごうとるんで

恵美子がささやく

あなたの母親とは

と——違うんで

くるうとつてもあたまんなか

くるうとるんはうつらんけえな

ちがうんであんたはあんひとたあ

ちごうとるんで

恵美子がささやく

耳元で？

遠く離れて

耳から

わたしの…

耳から口を

遠く話して

狂気は遺伝しないのだと

狂気そのものは遺伝しないのだと

狂気？ いや

そもその
みいだされた風景その
それぞれの風景は絶対に
お前の見たそれ
その風景
ちがうんで
お前の聞いたそれ
その音響
うつらんのんで
感染することも
遺伝することも無く
ふれることさえできない儘に
あくまでも固有の
まさにお前が
お前の見たそれ
その風景
ちがうんで
まさにお前が
お前の聞いたそれ
その音響
うつらんのんで
あざわらいそうになった
わたしは——十歳の？
わたしはすでに
恵美子はさゝやく
すでにしてわたしは
あざわらいそうになった
だいじょうぶなんで
お前は久生とはちがう
久生の見た風景
まさには久生の
久生の見たそれ
その風景
ちがうんで
久生の聞いたそれ
その音響
うつらんのんで
哄笑を知るか？
なんという孤独だったのだろうか？
哄笑をやるか？

何という赤裸々な
もはや地獄めいた
無間の、底さえも無い？
わたしは恵美子をあざわらった
あなたはしらない、と
その底の無い孤独の
どうしようもない救いがたさを
あなたは知らない、と。まさにいま
あなたのわたしを勵したつもりのその言葉に
わたしは見ていた、まさに
無限の孤絶
ちがうんで
あなたはしらない、と
そのなすゝべも
出でるすべもない
奈落のふかさを
ちがうんで
あなたはしらない、と
あなたがひとり
救った気でいた少年は——十一歳の
どうしようもない孤獨の
理論的に正当な
奈落の熾烈さだけにおのゝき
お前は見ろ
と、あんたはあんたなんで
お前は見ろ
お前だけの見るお前の
固有の
お前の風景を…と
あんたはちがうんで
お前は聞け
と、きにせんでええ、もう
お前は聞け
お前だけの聞くお前の
固有の
お前の音響を…と
もうなんもきにせんと
わたしは滅ぶ
一瞬さえも
わたしの固有の滅びの中に

わたしを亡ぼし
私は生きる
 歸るすべもない
時間の中に
 須臾の滅びのかさなりの無際限なるまでのその果てに
 ひとりであまりに
 あきらかにひとりで
わたしはひとりで
わたしを見出す
 それ
 私の見出した風景を
それ
 私の聞き出した音響を
 極彩色の
 色…さまざまの色ら
いろいろの
 さまざまな固有の…色
 淡い色の
 いろいろの散乱
散華せよ
 轟音の
 もはや
 なすゝべもない轟音の
微弱の音の
 それら無際限なまでのつらなり
 響き、鳴り、鳴り響いた響きら
 固有の消滅ら
散華せよ
 せめて
 花のように？
 花ですらない肉の色づき
せめて
 散華し空中に
 地に落ちる前に
 燃え尽きればいい
花ですらない肉の…肉ら
 おそろしいほどの孤独のきらめきを
 祖母は救いとしてわたしに示す
 おそろしいほどの無限の孤絶を
祖母は慈しみの聲にさらす

あなたは知るか
わたしの咬んだ——十歳の？

哄笑を

あなたは知るか
わたしがまさに

あなたの爲にだけ隠し通した

わたしの咬んだ——十一歳の？

哄笑を

やさしい恵美子は隣の部屋の

久生のもらした

濁音の聲の

長い叫びを

聞き取る耳を——十歳の？

手のひらに包んだ。より鮮明に

籠った音に

反響させながら

かくに聞き、8月16日夜すでに更けゆゑに夜ゆゑに暗き此レ照明等着げざルがゆゑなり
きかくてもういきていることさえ壬生及びゴック居間のソファにもういきていることさ
え横たわり壬生横たわりてゴックその上にもういきていることさえ横たわりかくて横た
わりておのおノにもういきていることさえ仰向け壬生もういきていることさえわすれく
らいの

そんな

しずけさのなかで…

素肌さらしたるま及びゴック素肌曝したる儘かくてすでにざわめきたったその戯れ
じゃれ相ひける後にざわめきたったその倦怠のみ觀じ壬生黙シき外雨なりて内ざわめき
たったその雨の音ノみ響きテかくて壬生ざわめきたったそのゴックが身を離シひとり立
ち何處かざわめきたったその行かんとシ至近にざわめきたったその立ち止まりテざわめ
きたったそのあめのあまつぶのたてたおとたちの

ちらしたひまつを

ころにおもえ

立ち止まりたるを見きゴック何を云ふともなくにたダもはやなきだしたくなるくらいの
背中ノみさらしかくて壬生もはやなきだしたくなるくらいの伸ばしたル左の手の指ノ先
にゴックがもはやなきだしたくなるくらいの太ももにふれゴック敢ゑてもはやなきだし
たくなるくらいの壬生ノ指先のふるるに気付かぬをもはやなきだしたくなるくらいの装
ひテ立ち止まりテもはやなきだしたくなるくらいのせつなさが

ただせつなさだけが

しっそうした

立ち止まりたる儘に壬生は見きゴックが背中なるちへどはいて肌に突き出シたる鬚りそ
レちへどはいてこの女ノ弟のもノならん兩手をノみちへどはいて上に突き出して何にち
へどはいてふれるともなくに何をかちへどはいて支えんとす形をのミなしちへどはいて

くいつきかみつきくいつきくいついたままぶらさがったねずみ

とらにかみついたそのねずみのいっぴき

さいごに

みいだしたそら

そのいろ

頭部は右のミ下にずれ垂レ落ちて歪ミきもろノ手何をも支ヘズみみずをかめそレ無數なる死者らみみずをかめまた生者らまた未生の者らのみみずをかめ肉又骨また諸細胞等またみみずをかめ諸神経等また諸内臓等それらみみずをかめみみずそのみみずをいまこそくいちぎれその

ひらいたくちびるにたれさがる

ひっしのみみずの

のたうつちょーしん

壁または壁あるひは床又は床あるひは天井又は天井あるひはソファの部分又は部分あるひは窓そのガラス又はガラスあるひは窓そのサッシュ又はサッシュ等さまざまに突き出しみづからを曝シ曝シテみづからを突き出し突き出してかくてそれら無數なりき血ノ玉腐りたる匂ひあるが儘玉散り空間に及び壬生が目の眼差しが内にもたダよひてゆらぎゝ…弟、

と

なに？

弟。…かくて迦久爾壬生が唇なにといふともナくに發シたる言葉を壬生はひとり耳に聞きゝかくてゴックいまさらに

何？

と

さゝやきみづからがさゝやきたるに気付きかくてゴック振り返り壬生を見きゆゑ壬生はひとり笑ミてひとり唇に聲シて笑ひきゴック首をよじりてそのまゝに壬生を見壬生ゴックの目あるひは無然たりて壬生をのみ見けるを見かくて靚をはりて壬生白シてゴックにほゝ笑ミて言さく

元気なの？

かくなりゴック解せず

なに？

かくてかくに應へて言シけるを壬生ひとり笑みテひとり唇に聲シて笑ひゴック首をよじりてそノままに壬生を見壬生ゴックの目あるひは無然たりて壬生をのみ見けるを見かくて靚をはりて壬生白シてゴックにほゝ笑みて言さく

弟さん…

かくなりゴック壬生が何を謂はんとシ又ゴック何とシて答ふべきか知らずまた放へるだになしゑ無くて

なに？

かくてゴック終に聲シて笑ひ壬生が目にゴックが笑ミ媚びたルにも見へて壬生ひとり笑ミてひとり唇に聲シて笑ひゴック首をよじりてそのまゝに壬生を見壬生ゴックの目あるひは無然たりて壬生をのみ見けるを見かくて靚をはりて壬生白シてゴックにほゝ笑みて

言さく
サイゴン？
かくなりゴック聞きて聞きながら壬生が聲ヲ聞きたル氣もせずてあなたは
と
ゴックは思ひき
あなたははいま
と
かくてゴックはひとり
ゴックは思ひき
あなたはいまわたしをだけ見た
と
かくてゴックはひとりひとりなりて心に
ゴックは思ひき
わたしを。なぜなら
とゴックはみづからの眼のいまだ笑みたるをも忘れ
なぜならわたし以外に
と
ゴックは壬生にもはや見蕩れるようにも
ゴックは思ひき
わたし以外に目に映ったものがなかった
と
一人想ひ壬生が口の何をか云ひかけたルが開きかけ
…だから？
と
かくて壬生が唇のふたたび閉じることなくにひらかれたる儘
…今も？
と
かくにゴック心にのみ云して壬生はひとり見きゴックが瞼また唇なんノゆゑなるかゝす
かにふるえふるえしてかくて壬生言さく
元気なの？
さゝやき聲もて云さく
コロナとか…だいじょうぶ？
かくに壬生はゴックが爲にのみさゝやきゝかくて頷に曰く
孤独な人ではなかった
みあげるのだった
かの女は
ときには
あきらかに孤独な人ではなかった
わたしは、むしろ
かの女の

ひとりで
話聞くその家族たち
ざわめきたつじゅもく、その
父と母
しげったはがひのひかりに
父と、その父は同居しその妹と俱なりて
かがやきたつその
母はすでに死んだ
まぶしさを
なぜ？
みあげるのだった
話聞くその家族たち
ときには
弟と、弟の友人たち
わたしはむしろ
友人と、あるいは女たち
かおごとみあげたそのいっしゅんに
弟の女
めが
いつか、…と
あおぞらのいろを
もうすぐわたしより先に結婚する…
みいだすまえにわたしはめをとじ
さゝやき聲で
みるのだった
かの女はそう云い
とじたまぶたのくらやみに
私に
さわぎたつ
何かをもとめるともなく
むすうのかがやき
誰かに
ざわめきたつ
誰かの何かをもとめるともなく
むすうのきらめく
もうすぐわたしより先に結婚する…
さまざまなかたち
結婚したいの？
ひかりをみた
さゝやいた聲に

ひかりをみた
しなくちゃならない
わたしははじめて
さゝやき、かの女は
めにものを
結婚したいの？
みることのできた
さゝやいた聲に
ひとのように
しないと…
かんきしたふりを
と
かんきしたふりを
さゝやき、かの女は
みあげるのだった
孤独な人ではなかった
ときに
かの女は
むしろわたしは
あきらかに孤独な人ではなかった
うみべのみちで
ほとんど鳴らないスマートフォンに
せをむけて
メッセージだけ頻繁に送り
のけぞって
だれも尋ねない
ひっくりかえったはんたいのむこうに
鐵門にいつでも鍵をかけ
うみをみた
ふたりしかいない
そらをみた
家のドアをは明け放す
うみをみて
尋ねる者のいないせいで
うみとともにそらをみて
ゴックの家で
うみがいもうえに
ゴックにしか私は逢わずに
そらがいましたに
スマートホンの鳴らないせいで

みえているのだとさっかくしようと
ゴックの聲と
たくらんだ
それにかさなる自分の聲しか
たくらんだ
わたしは終に聞かなかった
はしれにわとり
犬が吠えた
はしれにわとり
時に
いつでもふじゆうそうにあるく
おそらくは、す向かいの家が放し飼った犬が
いつでもからだがりょうひんだったかに
鐵門の前を通り過ぎ
いつでもふじゆうそうにあるく
走り
はしれにわとり
駈け
はしれにわとり
その足音と、もに
わたしはみあげた
吠えた聲を聞く
ときに
想った
きぜつしそうなほどの
その歯と舌の狭間に零れたあら、いだ
きゅうかくどで
唾液塗れの息が立つのを
くびをまげ
聞いたように
えづきえづき
わたしはひとりで思った
くびをまげ
ゴックはすでに忘れていた
よるのそらの
私の指がその太も、に
そのくもを
いまだにふれつゞけていた事さえも
えづきえづき
ゴックはすでに忘れていた

くびをまげ
その眼差しが
みずからのいろを
わたしをだけ見つめていた
さらしきらない
その事実をさえも
よるのくもらを

放尿し、そして放尿し終わった後で壬生は思わず振り向き、振り向きかけたまさにその時に、そこに、…と。思った。壬生は、ゴックはいる、と。そこに、と、壬生は、大股を、と、——いつも蟹股で、蟹のように、こゝの外の女たちと同じように、蟹股で、すり足で、そのくせ足の裏をたたきつけるように、歩く。…背後のゴックは、と。

大股を広げて、と、壬生は、…首をのけぞらせて。

歩く。…いつでもゴックは、と。

むしろ茫然とした眼差しで。

唇をさえかすかにひらきながら、と、いまだに全身を濡らしたまゝで。

壬生は振り向いた正面の壁に散った…白。壁の色はペンキを塗られた白。飛沫の粒のきらめく無色を見、そして一瞬すべるように落ちかけた眼差しに、そこに、…と。思った。

壬生は、ゴックはいる、と。そこに、と、壬生は、大股を、と、——いつも蟹股で、蟹のように、ここの外の女たちと同じように、蟹股で、すり足で、そのくせ足の裏をたたきつけるように、歩く。…背後のゴックは、と。

大股を広げて、と、壬生は、…首をのけぞらせて。

歩く。…いつでもゴックは、と。

むしろ茫然とした眼差しで。

唇をさえかすかにひらきながら、と、いまだに全身を濡らしたまゝで。爪にネイル。ラメ入りのネイル。足の爪にだけ。もはや剥げかけた、…ゴックはさゝやいた。

——なに？

壬生は自らの放尿の臭気がたちのぼって、鼻にまでふれ、…生きている。

と

壬生は思った。

今も猶も。

今こそ顯らかに、…と、壬生は、——どうしたの？

さゝやくゴックの聲は殊更にもやさしく、そして茫然とした色を以て壬生には感じられ、一思いに流した尿の、その引きずり込まれる水流の音をいまさらに感じる。鳴り響く、と、そう言う以外には手だての無い轟音が小さく、あどけないくらいに粗雑に。容赦もなく赤裸々に、空間の下の方の一か所にだけ。音響…判りますか？

さゝやくように

あなたに、と。

そしてあくまでさゝやくように

判りますか？

ゴックは

…体内に目を覺ましていた
さゝやく。むしろ
…私たちの知らない間に
と、自分の爲にだけ
…体内に目を覺ましていた
と、もはや自分の爲にだけとも思わずに
…私たちに予測もさせずに
ゴックは
いたぶるように
そしてかの女は
嘔吐させ
と
さいなむように
その心に
胃液をなめさず
さゝやき一度だけまばたき、…泣いてるように見える。
壬生はそう思った。
いまゝさにあなたは
と、壬生は、そして——泣いてるの？
ひとりで
と、心に、そして壬生は
むしろ恍惚として？
さゝやく、——ね？
泣いているように見えた。
壬生は
むしろ恍惚として？
——泣いてるの？
…嘘。ただ
と。心にさゝやき、唇に
それが、
——ね
冷水に
と
一気に冷やされその果てに
と、そして泣いてるの？ と、三度目に唇がさゝやいたときに
むしろ上気させられた肌の血の温度の
と。…正氣付いた。
もたらした泣いているような赤らみ
ゴックは不意に我に返り
頬、…目

——え？
眼の下
と
眼の白い…
ゴックはさゝやき
鼻のあたま
まるで
そのまわり
自分の爲にだけひとり言散たように
赤らみ
——なに？
…嘘
壬生は、
むしろ（ひかりよ）恍惚として？（ひかりよむしろせきらゝすぎるほどに）
と。思い、心に
泣いているように見えた（…雪解け）
そして（…魂の崩壊）唇に
水浸しの（そして）
もはや（瓦解する冰山よ鳴れ）なにもさゝやかなかった。むしろ
かわかない儘の眼
ゴックをただやさしく
眼、そして眉、あるいは
微笑むまゝに
眉、そして睫毛、あるいは
さゝやいた。聞く。
睫毛、そして唇。鼻
ゴックの唇の、ようやくにさゝやいた
鼻のあな、ふるえた瞼…なぜ？
聲を、
唇の、五秒に一度のかすかな痙攣、まさに
——泣いてないよ
あなたはまさに
——嘘
むしろ恍惚として？
——泣いてない
泣いているように
——泣いてる。
と。壬生はさゝやき、聲にして笑い、一度だけまばたく。かくて傷に傾して曰く
涙の
雪菜のように

その温度の
誰もが
どうしようもない穢らしさを
誰も
何度も感じた
誰一人として
女たち
雪菜のように
歌舞伎町に…まるでわたしが、いつのまにか
泣かなかった
流れついたかのように（家出した、十六歳の…）
泣いているわけでは無くて
そこを（…樂園？）目指して（…樂園の町）辿り着いて（…俺に差し出せ。どこ
でも、）
ひたすらにえづく
女たち（…俺がふれれば、そこは）
えづくように
わたしに（…いつでも樂園になって仕舞う）焦がれた女たち
齒をくいしばる
時に（好きって言ってごらん？）泣く
汗を
涙と共に（…恥ずかしがらないで）
その肌に
その（もう、）温度の（人格さえ保てないくら）
くまなく汗を
どうしようもない（あなたの家畜状態、いやむしろ）穢らしさを
逆らせて
その（あなたに寄生虫状態でむしろ）双眇と（あなただけが）
垂れ、したたり
鼻。その（好きなんですって、言ってごらん）下の
流れ落ちても猶も
唇までの（…楽になれるよ）
その肌に
涙の穢れた通路
ふれ続けた汗の
時に泣く
停滞がさらに汗を
なぜ？
噴き出させ
歡喜？ うれしくて

雪菜は齒を食いしばり（齒に）
懊惱？ ことさらに、とぎほぐせない難しい痛み
涙ぐみながら（齒に齒がかみつく）
絶望？ もう
齒を食いしばり
わたしがかの女のものではないと
私の腕に
あるいは
抱かれた後で
すでにいつでも
私の体に
その女は私をなど
抱かれるうちに
所有してはいなかった
唇をだけ
苦惱？ しっているか？
貪った抱擁
見る者のすべてが自分を罵り
その汗ばんだ
嘲り
ないし
非難し
あせを流した
罵倒し
乃至
暴力じみて
汗まみれの
リンチじみて
体をふるわせ
音も聲もないまゝに
搔きむしり
明らかに加虐していた風景…女たちのまなざし
雪菜は肌を…齒を咬み肌を搔き篋り
哀しみ…女たち
褐色の女は
時に泣き
いよいよその肌を茶色くし
涙のその温度の
雪菜は齒を咬み
どうしようもない穢らしさに

叫ぶように
埋没してみせた
唇にさゝやく
あなたもなの？
唾液をこぼさないように
今
ひたすらに（…たすけて）
だれの爲に？
自分の（…いたい）喉に
その目の見た
飲み込みながら（…汗、…）
自分の爲に？
叫び聲もて（汗しみて…）
わたしに捧げられた糾弾の非難を
雪菜は（…汗）さゝやく
自分の悲しみの爲に？
洗って（…いたい）
赦し、すでに
ね（…たすけて）
自分にふれない私の爲に？
洗い流して（…ね）
忘れて仕舞ったような
穢いから（…痛い）
自分を赦さない私の爲に？
洗い流して（…汗、しみて）
強引さで
わたし（…体中）穢いから（…体中いたい…）
自分を、思うようには、愛してくれない私の爲に？
洗い流して（…たすけて）
なぎ倒す様に
汗塗れで（…痛い）
私の爲に？
穢い（…やばいよ。もう）
打ちのめす様に
臭い（…たすけて）
あなたにないがしろにされた私の爲に？
汗まみれで（…痛い）
叩き
洗い流して（…つつ）
あなたにふみにじられた私の爲に？

だから (…ね)
叩きつけるように
いますぐ (…たすけて) わたしを
あなたに愛され、奪い取られた私の爲に？
洗い流して (…いたすぎる)

咬み
取りつかれたように (…かゆっ)
あなたに愛され、ただ安息した私の爲に？
洗い流して。(…かゆかゆっ) もう

噛みつくように
神憑かれたように (…かかっ)
あなたに愛され、蹂躪された私の亡骸の爲に？
体中 (…かゆっ) 洗い流して。もう
なぶり、さいなみ
正気をもはや (…いたいんだよ、すごい) 失ったように
あなたに愛され、あなたを一瞬たりとも愛しはしなかったどころか心救しさえし
なかった私の爲に？

体の中まで、(…かゆすぎていたすぎて) もう
そのあきらかな嗜虐さえ
皮膚をさえ (…かゆすぎでいたっ) かすかに (…たっ) 痙攣させて
あなたに愛され、もはや棄てられた私の爲に？
全部、内臓まで、(…いたっ) 全部 (…ね)
わすれてしまっていた高揚のなかで
洗い流して (…つらっ)
あなたに愛され、なにも得なかった私の爲に？
二度と (…いたっ) もう

まるで女は
あなたには (…たっ) 触れないようにしよう
あなたに愛され、愛される喜びを感じられなかった私の爲に？
わたしは (…ゆっ) 思った

女たち
二度と (…うゆっ) もう
あなたに愛され、愛される痛み、ないし悲しみだに感じられなかった私の爲に？
ほかの (…いゆっ) 女たちに
被害者のように私に泣いた
暇つぶしのようにも
だまされさえしなかった無残に？
貪られるままに
かの女たちに、その
貪る男を擬態して

求めるものを与えて遣った
かの女たちに施したように
レストランのサービス係が
あなたをその、溢れかえった
気の利いた心づかいに
汗のおいと
誰かの眼差しを占領して仕舞うように
温度の中で
だましたつもりはなかった
二度ともう
眞実？
あなたにふれないようにしよう
そんなものを興える気はない
あなたの爲に
女たち
自分の
わたしを抱いた女たち
そして
女たちの、むらがった發情の
愛されて流した（にじんだ…）その（したたった…）汗が
いくつもの
その肌に
無数から
ふれた瞬間に（アレルギー？）
撰ばれた者たち
赤變させ（免疫異常？）
女たち
痛みに（神経疾患？）近い
涙の
痒みにむせて
その温度の
のけぞるようじ
どうしようもない穢らしさを
じだんだをふむ
時にはさらし
そんなふうにも
その特權的な
搔きむしる雪菜
少数者の稀有の存在を
アレルギーの

高揚の内に
その肌は
気付きもしなかった女たち
もう二度と
穢い
かの女の爲に、と
とても穢い生き物たち
かの女の爲だけに、と
温度のある
かの女を抱きながらも
穢い
わたしは思った。わなゝく
とても穢い
四肢をかきむしる
イノチあるものたち
雪菜を抱き汗をなすりつけさえしながら
思わず壬生は聲をして笑い、そしてゴックにさゝやいた。——今日、さ
え？…と、
——今日、何日だっけ？
九月だよ、と、ゴックは、もう…
——今日何日？
九月…と、あしたは
——なんか、もう
ねえ、と、…ね？
——スマホも持ってきてないし
休みの日だよ、と、
——忘れちゃう。…ね？
記念日
——日付け
独立記念日。明日は
——何日？
二日だから、…と、ゴックは心の内にだけさゝやき、そして水洗便器がすでに鳴りやん
でいたのに気づき、それに殊更に驚きかけた時に、不意にわれに返ったゴックはさらさ
れかたちをくずした胸を腕に隠し、まばたき、そしてゴックは云った。
——寒いよ。
壬生は笑いも、笑みもせずにゴックを見下ろし、まるで、と。
思う。
俺が彼女を嗜虐したようだ、と、それ、水浸しで、仰向け、便器の前に大股をひらき、口
で息をし、瞬間、眼を見開いたまゝに、見開かれた事実をさえ忘れそのまゝに放置した
眼のその茫然の色に、——なに？

問い返す壬生の聲はいまさに、ひたすらにもやさしく聞こえた。

——寒い。

と、ゴックは

——寒いよ。ひとりでさゝやき肌がいまや、隠しようもなく全身に鳥肌だっていくのを感じ、洗い流した水流の冷たさにいまだ汗づかないまゝ、大気はすでに籠った熱気に肌を苛み始めているに違いなかった。壬生は自分の額にながれる汗の一粒が右の眼じりにふれて、かすかな痛みをはしらせたのを感じた。かくて儼に頷して曰く

子供のように？

骨格の無い

蝮のような

ないし

鳥賊のような

乃至

イソギンチャクのような

子供のように？

私の腕にされるが儘に

私の体に身を預け切って

ようやくにして

殊更な程に

子供のように？

ようやくにして

骨格の無い

子供のように？

立ち上がったゴックはその一瞬に

表情をすべて一度消失し

ゆたかな

と

立ち上がったゴックはその一瞬に

表情をすべて一度消失し

ゆたかな表情をあふれ返らせ…どんな？

複数の表情のさまざまな同時に噎せ返らせていたその事実を

立ち上がったゴックはその一瞬に

表情をすべて一度消失し

かつてのその事実を

私は——わたしに、…知った。ゴックは

知らせた

意識さえしないまゝに

子供のように？

骨格の無い

子供のように？

そしてゴックはいまゝさに
はじめて笑み
笑みかけるべきものを
はじめて見出したその一瞬を
あらためてまさに見たかのように
ゴックは腕の中で
私に笑った
腕の中で
子供のように？
骨格の無い
子供のように？
不意に見上げたわたしに
わたしの爲にだけに
ほゝ笑みかけて
喉の奥に
その奥にだけ
笑った息、そして
笑った聲を
生じかけさせながら
かくて同じき時返り見夕窓にまバたき偈に頷シて曰く
ふいの恍惚
蝶
知る
羽ばたきの
わたしはわたしの恍惚を
羽ばたきの蝶
知る
窓に
ふいの恍惚
開け放たれた
眼差しは
窓に
最早この時に
うちでも
燃え上がって仕舞えば？
そとでもない
眼球は
境界に？
まさにこの時に
うちと

砕け割れて仕舞えば？

そとを

恍惚の

同じ時に

知る

占領し

そのただ白濁する

舞う蝶

知る

色は？

温度の無い高揚

逆光の蝶

知る

白？

美しい、とだけ

翳り

言葉を知り

逆光を撃つ

壬生は不意に聲をして笑い、そしてバスルームのドアを開けた。その半ばたたきつけるような音に、ゴックは立ち尽くした儘身を固め、強張るゴックを振り向いた壬生の眼差しは見た。もはやゴックはひとりで足っていた。便器の正面に、そして撰洗面所の蛇口は時に、水滴を落とした。十秒に一滴。壬生は、気付かない心の向こう、耳にあきらかにその音にふれ、それを聞いた。壬生は笑っていた。知らない、と。

思う。あなたは、…と

ゴックは未だに、自分が自分で立っている事さえ知らない。

壬生はそう思った。あからさまなまでに怯え、かならずにも壬生に怯えるというでもなく、鮮明に、殊更にも壬生を見続けながら怯えたゴックはいきなりその手を引いた壬生の邪気も無い笑い聲に——傷つけないで

ごめんね。…と

傷つけないで

ごめんね。…と、ゴックは

今日はいい天気だよ

わたしの言ったのは全部嘘だよ。——傷つけないで

ごめんね。…と

傷つけないで

ごめんね。…と、ゴックは心にだけさゝやき、——だめだよ。

ゴックはみずからすがりついた壬生の耳に、かみつくように唇を近づけて、

——だめだよ。

心にさゝやき、壬生がゴックを連れ出そうとしていたのはあきらかだった。ゴックは何度も…なんで？

——だめだよ。

と。まばたき、…まだ、
よ。ゴックは、まだ、と。

濡れてるよ

と、裸の肌は、まだ

と、裸のまま

と、ゴックは、濡れてるよ、と、濡れたガラスのように

濡れたプラスチックの椅子のように

濡れた犬の耳の立った先のように

濡れたお皿の洗われた乾かない水滴塗れのように、と。——関係ないよ。

壬生は耳にさゝやいた。ゴックの爲に？

ゴックにさゝやく。壬生はそう思った。バスルームを連れ出し、轉げるように壬生にすがり、ゴックの目は外廊下にすでに周囲を見ていなかった。壬生は、…がっかり？ 今だれも見えていない事を知り…がっかり？

思う。…がっかり？

ないし…

ほっと？

むしろ、ほっと？ 壬生はわざとゆっくり、ゴックの部屋に抱きかかえたゴックを、…風はない。

かならずしも

風と呼ばれるべき程の

風はない。…さゝやく。心に、或いは羽交い絞めにするように、と、今、あなたは羽交い絞めにされたように、と——飄っていると、誰も。飄られているように、…誰も見えない空間で。

あけ広げられた空間、例えばブエノスアイレスまでもあけ広げられた空間の、遮りの無い中で。

と。

壬生は、見れば誰もが暴力の内に、…と、壬生は

飄っていると？

下の道路を通りすぎた一臺のバイクの音にゴックが身を固まらせたのを知り、壬生は、それでも聲を立てゝ笑うともなく、かくて儂に頷して曰く

ドアを開いた瞬間に

覚えていた

それは閉められ切ってはいなかった

二十年以上も

最初から、一度も

時を隔てて

半ば開かれた儘に

なぜ？

ドアを開いた瞬間に…流れ込む外氣？——むしろ光り

なぜ？
暗くはなかった（…ひかりのむれ）
殊更にも
室内は（かたまりをなしてきよだいなむれをなし）元からまどに
彼女を愛したわけでもなかった（…皮膚を掻き毟る女）
とぶ蝶をもあそばせ
殊更にも（…齒を）
ドアを開いた瞬間に
彼女に（齒を食いしばる女）愛されたわけでもなかった
洪水なした光り（その群れた群れら）
おそらくは
外の
何人目かの
赤裸々な光
そして最後の（…皮膚を掻き毟る）男として
ドアを開いた瞬間に
結果的に？
溢れ孵った、そして、それ
ふれあった（…皮膚を掻き毟る女）わたしに
外氣？
雪菜は（…齒を）ささやく
もとからあけられていた窓（——蝶は？）
やばい
壁の（——もはや蝶は？）高みの窓は
かゆい
好き放題に風を入れ
咬む
外氣？
齒を咬みしめはじめながら
すでに溢れ返り
その（…褐色の肌が）十六の
噎せ孵るほどに
雪菜は
入り亂れていた
私と（…皮膚を掻き毟る女）肌を
外氣？
はじめて（…褐色の肌が）重ねて
怖がらなくていいよ（…なにも）
かゆい
わたしは（…なにも）謂わなかった

ほてりもち
敢えて? (…なにもあなたがおそれるべきものはもはやなにもなかった)
触れ合う (…掻き毟られた充血) 肌が
自分の濡れた肌
ほてりのうちに
その剥き出しの肌を
ほてりはじめる
怯えるゴックに
汗ばみの (…体液に) 刹那に
怖がらなくていいよ
痛いくらい (…あふれ)
わたしはささやきさえしなかった
痛いくらいかゆい
胸をだけ
アレルギーなの
なぜか胸をだけ
雪菜は (溢れ返った体液に) 云った
左腕にだけ隠したゴックに (——持ち上げるように)
自分の (その愛さえもが溢れさせる、涙もふくめて、さまざまな生きた生き物
の) 言葉を (…体液)
髪に (——持ち上げ、つぶれたかたちを矜持した) 口づけた
まるで何も
何の (——驕った女のように、眼差しに) 意味も (…怯えた茫然) 無く
信じられないと
ゴックの
そういわんばかりに
いまだ濡れた
汗かくと
束なった髪の毛
汗が出ると
頭の一番上に唇を
汗がさわると
どうせだれも
全身が
誰が見ていたとして
痛いくらいに
どうせだれも
痛いくらいにかゆい
誰かが見いていたとして
全身が赤くなって

どうせだれも
…ね？
なにを云うの？
堪えられない
なにをするの？
堪えられない
大人びた諫めるような目で
アレルギー？
ゴックは
…みたいな。…ね？
怯えただけの子供じみた眼で
なんで？
ゴックは
知らない
剥き出しの肌に
痛い
風を知る。かならずしも（…微細な）
いたいくらい
吹き荒れるでもない（…微妙な）
かゆい
かすかなやさしい（…むしろ、おおきくふきあれさえすれば）
堪えられない
大気の流動（…撫でた？）
堪えられない
せめて誰かの
していいよ
誰かの？
好きなように
剥き出しの肌に
汗まみれにして
誰かの眼差しでもあれば
していいよ
剥き出しの肌に
堪えられない
大気は容赦もない温度に撫でて（…光り）
堪えられない
もはや（…灼熱の）誰も
好きにして
肌に（…すでに）温度を（…すでにして灼熱の）擦り付けるように
気にしないで

せめて誰かの（だれもがいまや）
好きにして
今、（だれもがいまや）何時？
洗って
もはや（だれもがいまやねむりにおちたのだらう）誰も
堪えられない
わたしたちをなど見ない（光りよ）
堪えられない
なぜ？（ただ）
洗って
わたしたちの（ただ、ひたすらにまばゆかいものよ）
子供のころから
これみよがしに曝した肌も
…だから
蝶は？（散る粉末）
ね？
もはや（光の中に）誰も
子供のころから
わたしたちをは捨て置き（散る粉末）
夏の
蝶は？（散る色彩）
クーラーの利いた
もはや（光の中に）誰も
冷たい綺麗な
鳥は？ あるいは（舞い散った色彩の、空間の一か所にだけの存在）
きれいな温度が
隣の屋根の上を疾走した猫は？
好きだった
一瞬の、立ち止まった一瞬だけの懐疑的な凝視
冬は嫌
ふれる
コートの下
なにしてるの？
セーターの下
ぬれた肌、乃至
下着の下で
なにをしてるの？
肌が濡れる
流れ落ちた水滴
肌が噎せる

そこで
肌がふれる
肌に
自分が流した
なにを喰う気？（…俺を？）
汗がふれる
あるいは（…まさか俺を？）他人の肌に移り移った水滴
気にしないで
流れ
やりたいだけ
流れ落ち
抱いていいよ（…海水のような）
ドアを開いた瞬間に
汗まみれになって（…粘り気と）
空、…と
汗まみれにして（…塩分）
ドアを開いた瞬間に
堪えられない
それは何だったのか？ 見上げられた
堪えられない
色彩？
食いしばる
空
歯が
光の？
くいしばった
その、空
雪菜の歯が
色彩
かの女の耳の中にだけ
雲が流れる形に短く停滞し
食いしばった音を（…聞け）
かたちさえも
立てさせていたに違いなかった
くずさない儘
子供のころ（…聞け）
ドアを開いた瞬間に
と
ゴックが喉に立てたちいさな笑い聲を
雪菜は（…さざ波の音）ささやく

かたちさえも

南極で

聞いた

氷の上で

かたちさえもくずしきらずに

汗さえたちどころに

聞いた

凍り付けながら

雲、色は（…雲母）

綺麗な肌を

私の喉に立った（巨大な）聲

全部晒して

色は（巨大な、且つ眼差しに縮小されたちいさくうかんだ東の間の綺羅々）白

綺麗な大気に

笑った聲？ むしろ

遊ぶ夢を見た

笑ったようにも聞こえた？

子供のころ

声を？

かくに聞き、8月29日朝壬生め覚めめ覚めたるま、ゴックが未だ眠りける部屋をさざめくような出で出て外廊下にさざめくような空ノ明けたルさざめくような紅蓮ノ焼けを右にさざめくような見きかくて壬生さざめくような階段を降りさざめくような下なる台所にさざめくような降りルに目さざめくようなやさしいおとを

むらがりたて、

すぐさまに眩みき外明けノ紅に染まりたレども未ダ明け切らずて青暗きヲ目はさざめくようなすでにその明ルさにさざめくような馴れき壬生此れにさざめくような戸惑ひ恠しみきかくてさざめくような壬生臺所に水さざめくような飲まんとシ冷蔵庫さざめくような開けんとスにそのさざめくような翳より小さきさざめくような獣の聲たちてさざめくような姿なく姿那キ麻麻さざめくような疾走シ遁走す音ノさざめくような鋭きのミ足元にさざめくようなおとを

むらがりたて、あじさいは

あめのなかに

聞こえき足ノ先にあめのなかに獸ノちひさき柔毛あめのなかにわづかにこすれたる気配だにあめのなかに感じき壬生あめのなかに思ふに鼠やらんと又あめのなかに思ふに鼠あめのなかに壬生を見て観をはらぬにあめのなかに壬生が足に向かひて駈けあめのなかに至近ナルあめのなかに危ふきをあめのなかにさざめくおとをたてながら

あじさいのはならは

ゆるるのだった

駈け抜けたるやらんとかくてちるひまつ足元又とぶしぶき足元の先又ちるひまつその先とぶしぶき又その先の先とちるひまつ見鼠が翳さがすともなくに又とぶしぶき鼠未だ姿

さらしてありけるとも思ハなくにちるひまつ見て観とぶしぶき見テ探シ見ルにちるひまつ…先生。

かくに聲聞き…先生、もう起きた？

かくに聲背後に聞き壬生すでに此の聲ゴックに他ならぬを感じ觀じをハリてありければ返り見もせず又なにのゆゑにか思わずに言葉忘れたる心地シその心地する儘に…早いよ

かくに聲聞き…まだ、…何時？

迦久爾聲背後に聞き壬生ゴックが降り來タル足音又氣配だにも感じざりシを…何時？

かくに聲聞き…ね

のど渴いたの？

迦久に聲背後に聞き壬生いまさらに我に返りいまさらに聲まさにゴックに他ならぬを感じ觀じをはり知りまさに知り足れば…のど乾いた？

かくに聲ありかくて壬生振り返りて振り返りたるに壬生ゴックありてゴック微笑ミテゴックありて微笑ミテ壬生を見テ見上げかすかに顎あげたるを見キかくて壬生すでにみづからが頬ゴックが爲に微笑みたるを感じ觀ジをハリて知りまさに知りて…いいよ。

冷蔵庫の中に（——いゝよ）あるよ

いいよ。（知ってる？）冷蔵庫に（——飲んで）あるよ

水、（知ってた？）冷蔵庫の中に（——飲んでも）あるよ。（——いゝよ。）だから

水、（知ってる？）飲んで…（——飲めるよ）飲んでも（——冷たい）いいよ

それ（冷たい水）飲んで（——いゝよ）それ

冷たいよ。

かくにかくて聲ありかくて壬生見て見つめつづけ笑みて笑みつづけたる儘にゴック壬生を見たル眼はなしもせずして手に横探りに冷水がプラスチック・ボトル取り取りテ…むぎ茶を。

と。

壬生思ひて想まま久生は

夏に祖母が、と、壬生は、まるで

久生は作らなかつた

まるでそれが夏の必ずの風習のように、と

久生は

と、壬生は、かならず麦茶を、恵美子は、と

久生は作れなかつた

と、かならず夏に、と、壬生は、ボトルに

久生は

と、同じようにボトルに、プラスチックの、と

久生は作らなかつた

と壬生は心にひとり白してさゝやき言してゴック壬生の前で壬生に口を開きかくてゴックいま壬生が前にみづからの口を開きたるを知りかくてすでに知りたるに恥ずかし氣…と

恥ずかしげもなく

かくにゴックは思ひて

小鳥

かくに

餓えた？

かくてかくに

鳥の

ゴック壬生が目の

恥ずかし氣も無く

かくて

眼の前にゴック

餓えた子鳥の？

ひとり

餓えた

思ひて心に

かくて

恥ずかしげもなく

白してささやきて

かくてかくに

小鳥のように？

言して壬生は見きゴックが口の開ケたるに冷水がボトル開けかくてひそやかに口に水の
つめたきを注ぎ唇が脇に零れ喉は飲みテかくてゴック目をだに閉ジざりきかくて頰して

十一歳の夏

叫び（…咬む女）

その夏に、驚くほどに

叫び（…咬みつく女） つづけ

久生は乱れた

叫び（…咬む女）

亂れた久生は

叫び（…咬みつく女） 続けて

注射

叫ぶ人（…わたしを）

鎮痛剤のような？

あるいは（…ほゝ笑みながら）むしろ

錠剤

吠える（…当然のように）人

安定剤のような？

まさに（…当たり前のように）ひとりで

私はあなたの事實を知らない

吼える（…咬む）人（…咬みつく女）

私はあなたの事実を知らない
吠えた (…咬む女)
だれもが、心の
人の (…ときには笑った)
その、心に宿ったやさしさといつくしみとあわれみのせいで
人の知る言葉では無くて
私にはなにも告げなかったから
彼女の (…大声で)
なにが、いま
獣じみた? (…咬みつく女)
私にはなにも告げなかったから
その (…咬む女) 固有の言葉もて
なにが、いま起きているのか
吼えた (…ときには濁音に)
私にはなにも告げなかったから
濁音と、(…清音のはざまの) 短い
なにが、いま
叩きつける (…たゆたうような) 太鼓の
私にはなにも告げなかったから
連打に (…なめらかな) 聞こえない (…とぎれない) 休符のように (…長音を)
なにが、いま起ころうとするのか
跳ね、(…叫ぶ) 撥ね、(…喉は) 匆ねて跳ね、(…叫んだ) 撥ね、(…喉は) 匆ね
る (…咬む女) 撥音
私にはなにも告げなかったから
なすりつけるような (…なにを)
なにが、やがて
ながい (…なにをあなたは) 長い
私にはなにも告げなかったから
引き延ばされた始まりの無い (…咬む女) ん音
なにがやがて、そしてどこに辿りつこうとしているのか
咆えた (…なにをあなたはそこで見てるの)
私は彼ら
ののしるように (…うわめづかいで?)
大人たちの
咆えた (…あなたは何を)
祖母ととその友人
泣き叫ぶように (…咬めばいい)
教師とその友なる教師ら
咆えた (…あなたにあげよう)
友人とその父または母

あざ笑うように (…咬む女)
母またはその母ら父ら
 吼えた (…咬めばいい)
父またはその父ら母ら
 むしろ (…あなたのもの) 自分自身を
彼等のすべてに
 屠り (…あなたが産み落とした、すべて) 喰いちぎった傲慢さもて
問いかけかけた唇を
 聲だけで (…あなたのもの)
必死に抑えた。その唇が、不意に開いて
 身じろぎもせず (…咬めばいい)
なにが?
 聲だけで (…咬む女)
と、唇が
 微笑んだままに (…咬みつけばいい)
なにが?
 聲だけで (…咬む女)
と問いかけ
 懐かしいほどの (…あしたは雨が) やさしいまなざし
なにが?
 聲だけで (…咬む女)
と、彼等の眼差しを
 時には (…あしたは雨が降るだろう) わたしを腕にだきながら
一体、…
 聲だけで (…叫べ)
と、見開かせて私を
 地獄の (…その) 聲
なにが?
 ふいに (…人の口が) 優しい
と、凝視の内に彼等に
 優しい胸の (…はじめてあなたの唇で知った) 不意の (…はじめて音響) 抱擁
なにが?
 頭の上には (…あしたは雨が降るだろう)
と、見つめられないで済むように。わたしは
 地獄の (…叫べ) 聲
いま…
 見上げたまなざしが (…あなたの固有の)
と、ひとりで
 見出す久生の (…叫べ) 微笑の
いま、ここで

翳りだにない明るさの（…あなたの固有の聲に叫べ）翳り
と、問いかけかけた唇を
うつくしい（…あなたがあなたであった固有性など）
いまこゝで、一体何が？
やさしい（…ましてその）唇に
必死に抑えた
地獄の（…かけがえのなさなど？）聲
叩きつけるようにドアを開けた。その、半ば開いた儘に放置されていたドア、——ゴックの部屋の鐵製のドアを、聞いた。薄い、そして華と葉と蔦のような絡み合う飾りのある鐵がその時にまさにななゝき、何かにぶつかって振るえ、…誰？
ゴックがさゝやいた。
誰かいた？
——外に？
誰？
——みんな、…と。
壬生は笑みもなくさゝやき
——見てたよ。みんな
ゴックの耳に
——ゴックさんを、みんな
彼女の爲にだけ
——見てたよ
さゝやく
…嘘。
——みんな見てた。
…だれ？
——みんな、自分で
…だれも居なかったよ
——自分でしてたよ
…なにを？
——きれいだから
…だれ？
——ゴックさんが、
…だれが、いた？
——綺麗だったから、と、はじめて自分が笑った聲を聞いたような、そんな錯覚の中に
壬生は自分の喉の立てた笑い聲を聞き、かくて傷に頷して曰く
ぼくたちは淫乱を擬態する
あなたはさゝやく
空の下でも
さゝやきながら
何の爲に？

ココナッツを
吐き気がするほどの
その白い
繊細のうちにも
果肉を齒と
眼差しの前で
唇に咬み
誰の爲に？
あなたはさゝやく
雪崩れる気配もない空が青く
すでもう
かぎりもなく青く、その導くような
透明な果汁はしたゝり落ちた
連れ出すような
あなたはさゝやく
その下に搦める指の
言葉さえ
温度と重みは
忘れた一瞬
かくてかさねて頷して曰く
見せて、と
日野市の
さゝやきはしないで
多摩川の土手で
やさしく
雪の降る、白い
むしろどこまでもやさしく
白い色の中に
うそのようにやさしく
まだ生きてるの？
さゝやきはしないで
死んでいく
見せて、と
ひとりの雪菜に
糞い
まだ生きてるの？
焦がれる儘に
自分が自分に
心から願い
加えた

冀い
暴力のせいで
そんなそぶりは
それは雪菜の流血
みせもしないで
ほかでもない
見たいの？
まだ生きてるの？
ゴックはさゝやき
雪菜の流血
先生、見たいの？
雪菜の
邪氣も無く
まだ死なゝいの？
あざ笑うように
雪菜だけの
充足（ミち多りテ）して
それは流血
嘲弄じみて
まだ？
わたしだけを赦し
額から、そして
ゴックはさ（ざ）さ（ざ）や（じゃ）く（ぐ）
鼻
見たい？
唇…齒？
見せて、と
折れた齒？
ゴックのさゝやきを
流せ血を流せ流せ
ゴックさえ忘れかけたその一瞬に
冀い
ゴックの部屋、その今や
だれかに冀い、何かを…
嘆かわしい程に（泣きたいくらいに、もう）明るい（なきだしちゃいたいくらい
に、もう…）その
冀う儘に——光が、まさに光がわたしを？
部屋の（ただただ純白）中で
流せ血を流せ
彼女の肌を拭うための

叩きつける
タオルをわたしは兩（もろ）手に（もろに）もった（もろにてに）
糞い、そして禮拜した人のように地に
邪気も無く
コンクリートの（——光が、まさにひか）鹿い路面に
向こう向いて
流せ血を流せ。雨が
あざ笑うように
叩きつけ
こっちみないで
まだ（しぶといミミズ）生きてるの？
充足（満ち）して（盈ち足り氐）
死んでいく、（ぶった切ってもまだ死なぬ）足元の（しぶといミミズ）雪菜に
兩脚、ひろげて
雨が（…イノチよ）洗い流すその前に
嘲弄じみて（叫ぶように）
雪…
お尻、（泣き叫んだ、その）つきだして（その聲のように！）
その雪は、仰向けて、獨り死んでいく雪菜の
わたしだけを赦し
額の血にさえふれて
手を附かないで
流せ血を流せ流
わたしだけを赦し
溶ける
なにゝも触れないで（…噛み締めた）
あなたを、…と
ゴックは（…咬みシめた）さゝやく
わたしは思う、…雪
もっと（…ぼくらのこどくを、ぼくらは）つきだして
こんな日にも、…
見たい？（…ざわめく百足）
こんな日こそ？…雪
私は笑った。喉の
愛し続けていたように、（ふりつもる）心から
喉の奥にだけ
まるで（ゆき、それら）あなたをだけ、愛し
眼差しに
愛し続けていたように（ぼくらをつつみ）
やさしく笑んで

眼の下の（やがて）ほくろ
眼差しに
褐色の（まっしろなぼくらの）肌に
彼女をだけいつくしむ
それだけは（じゅんすいなあいじょうさえも）かろうじて自分の流した
濡れた（したゝる）肌を
血に染まらずに
拭き取りもしないで
がなせ（したゝった）血をがなせがなせ
わたしは眼差しを
孤絶した（したたる）ひとつの（ふるゆきは）ほくろ
擬態させた
あなたはもう、と
まるで（したゝった）彼女に（いつまでもぼくらの）見蕩れたように
死んでいく、…と（いつまでもぼくらの、ふるゆきは）
彼女に見られる餘地もない
…雪？（しろくて、そして、やさしいのだった）
背後の目を
雪の中に、息さえ（褐色の肌）白く
まるで彼女に見蕩れたように
すべては（あざやかに）白濁
彼女の爲に
まだ（汗ばんだ褐色）死なないの？
幸福の？
愛していたように、と
彼女の心の幸福の？
わたしは（なげかわしいほどに）思った、その
まるで彼女に見蕩れたように
十九歳の
その美しい
二十歳になったばかりの？
美しすぎる裸身に
雪よ、純な（なげかわしいほどに）思いを積もらせて
眼差しさえ見蕩れさせ
二月に？
擬態した
クリスマスに僕たちは雪菜の渋谷の部屋で遠くとも近くとも言えない神宮の森
の翳りを見た
その白い
その道玄坂のバルコニーから（——それはただ、真っ黒く沉んでいた）

豊満な肌を
雪よ、その穢れもなき
その
あいしていると、いまさに彼女に僕は擬態した
肉と骨
わたしは思う
骨格と筋肉
雪菜を、むしろ殊更に
贅肉ら細胞の集合を
まだ死なないの？
擬態させた
裏切って見せたのよう？
美しく
あなたは美しい
夢のようにも
雪の中に（…純白の）
見蕩れるまでにも
閉じよ、（色こそまさに）眼を
美しかったものとして
もはや
擬態させた
雪菜をなど
見たいの？
愛した記憶はなかった
邪氣も無く
いつでも
見たいの？…わたしを
なぜ？
あざ笑うように
雪菜が
わたしを？
わたしを愛した記憶などなかった
充足して（ちたみりて）
雪よ、（純白の、色こそまさに）白い…
見たいの？
なぜ？
嘲弄じみて
私はまるで（冷酷だった。ただ）殊更に彼女を
なんで？
痛み

わたしだけを（…鳥たちは）赦し
死んでいく雪菜に
見たいの？（まず最初に目をついばむ）
大口の久生にも？
ゴックは（…死者に出会った時には）さゝやく
死
見たい？
傷ついた肉體
見てる。…と
壊れた肉體
わたしは云った
そして心
さゝやき聲で（——もっとやさしく）
微笑むときでさえ、なぜ？
見たい？（…もっと）
痛み
見てるよ。…と（——もっと、せめてやさしく）
あからさまな痛みだけが私のまなざしのなかに息づかい
わたしは云った
めざめ
なぐさめるようなさ（じゃ）ゝ（ざ）や（じゃ）き（ぐ）聲で
目覺め続けて
見てるの？
雪よ…白い
見てるよ。…と
純白の雪よ
わたしは云った
表參道に
かすかにふるえたさ（や）ゝ（や）や（や）き（い）聲で
夜十二時に散歩した。その日
駄目だよ。
ふたりのクリスマスに（——すでに存在しなかった青山アパート。覆い隠された廃墟。そこだけまさに眞黒の闇。）
見てるよ。…と
あなたを愛したことなどなかった
わたしは云った。あえて
なのになぜ？
ふたゝび（なんども）なぐさめるような（なんども）さゝやき聲で（なんども）
あなたはわたしを愛さなかった
恥ずかしいよ

なのになぜ？
見てるよ。(なんどもあなたはわたしをなめた) …と
そのまま見つめていても
わたしは云った
このまま降る雪の中に
諫めるような、さゝやき聲で
血まみれの
なんで？
失神した雪菜を(…もう、いいよ。)見詰めていても
見てるよ。…と
人って、こんなふうにも(…もう、)死ぬんだね…
わたしは云った
此の人の死んだことさえ気づかないはずだ。だってもう
たゞ、茫然として、口をついた、そんなささやき聲で
僕はなにも(…もう、死んでもいいんだよ。)見ていない。…雪
なんで、見てるの？
雪よ…
言って振り向きかけたゴックの尻をたゞく
白い…
ゴックの目がわたしを見ないうちに頸をおさえ
雪って(…もう、いいよ。)食べられるよ
わたしは向こうを向かせた
あなたは自分を(…もう、)屠殺した
ゴックは気付かなかった
あなたは(…もう、いいよ。)自分をト殺した
わたしのその刹那の暴力性に
その魂さえ(…もう、)亡ぼせ
ゴックはあくまで感じた
わたしはまさに
…おそらくは？
まさにわたしは雪の中でひとり、むしろ自分こそが雪菜を殺し…すくなくとも
死にまで追い詰め見上げれば樹木の枝に鳩
恍惚と
気づかないうちに(…一羽の鳩、身を固め、そして)弑殺していたのだと(目
を閉じて…)
見蕩れた者の無我夢中の
嘆きの聲さえ
狂乱
わたしの
みじかい

うそのような嘆きの聲さえ
ただ一瞬
降る雪よ
たゞひとつの舉動だけの
褐色の肌に、汗をにじませた雪菜は
見たいの？
降る雪を
ゴックは云った
凍り付けば（あなたは）いい、…ぜんぶ
その聲の
なにもかも…
終わらない間に
南極で？
私はタオルで
軽蔑したような（あなたはたぶん、いま）流し目で（…救われた？）笑う（…
いま？）
ゴックの頭と顔を覆った
かくてかさねて傷に頷して曰く
いきをひそめて
もうすでに
わたしはみつめた
ぼくらはほろびたにちがいない
そのすゐてき
もうすでに
すゐのとうめい
うみはかれたにちがいない
すゐ、きれいなみづ
もうすでに
すゐのつぶが
あれののぶどうは
つぶらにも
さいがけちらし
あなたのかたのさきにふるえて、それが
ねこたちがむさぼり
すべるおちる一瞬の
ちょうがどこかへ
その一瞬のまえに
まいそうした
いきをひそめて
もうすでに

わたしはみつめた

いきものなどもう、すべてもう、ずっとまえからほろびさっていたにちがいがな
かった

かくに聞きゝ 8月12日雨の音激シキ午前にみていたのだった壬生寝臺によこたわれる
ゴックがみていたのだった腹部に唇をふれかかてみていたのだったゴックが手ノ壬生が
頭をなせたルを感じき壬生みていたのだったすでにして目をみていたのだった閉じたり
きかかてみていたのだった、それら

めをとじてなおも

極彩色の鬩りの

死者たち…

雨鳴り半ば開けたる窓の向かふに潤ミ潤ひたる氣色おびたダしくもみていたのだった雨
鳴り響きて壬生みていたのだった耳と肌にもみ雨の降りシきるを知りきかかてみていた
のだった雨の音激シキ午前にみていたのだった壬生寝台にみていたのだったよこたわれ
るゴックが腹部にみていたのだった、それら

肉に、骨に、變形の肉ら、奇形の骨らの

自在な生成に

咬みつく死者たち…

舌をはわせかかてゴックが唇にかスかなる笑ひ聲たちたルを感じき壬生におうすでにシ
て目をにおう閉じたりきかかてにおう雨鳴り半ば開けたる窓の向かふににおう潤ミ潤ひ
たる氣色おびたダしくも雨におう鳴り響き響き渡りて壬生におうのだった、あきらかに

それら死者らの血と肉の

くさった匂いら

耳と肌にもみ雨の降りシきるを知りき迦久天雨ノ音激シキ午前に壬生寝台によこたわれ
るゴックが腹部にスこし齒をふれかかてゴックが腹部をすこし齒に咬ミかかてゴックが
腹部にスこし齒をあて匂ひきそれみヅからの唾液の又ゴックが肌の匂いのまざりたるに
も感じき壬生すでにして目を閉じたりきかかて雨鳴り半ば開けたる窓の向かふに潤み潤
ひたる氣色於毗多陀斯克裳雨鳴り響き響き渡りトどろきて壬生耳と肌にもみ雨ノ降りシ
きるを知りきかかて頌して

あなたに話そう

最初は明らかに

まさに

あきらかにたわむれ

あなたの爲にだけ話そう

稚彦の肌を知ったのは

あなたにはゆたかなにおいがする

夢のようにも

わたしは思った

うつくしい少年

あなたのはだには

知性の無い、むしろ
わたしはささやく
狂暴に笑う、濁音の
くさいよ
うつくしい少年
笑ったあなたの声を聞いた
ふたりであそんだ
うそだよ
稚彦の家の
笑った、そして
稚彦の爲だけの部屋に
みだれた息に
壁の子供用五十音表
あなたが笑うのを
ふいにじゃれはじめた稚彦が
わたしは聞いた
わたしのそれに手を突っ込む
目を閉じたままで
確認したいの？
あなたが笑っているのを
わたしは笑う
知った。眼を、それでも閉じた
だれも他に居なかった
そのまま
わたしは笑う
あなたが笑った一瞬をわたしは
性の目覚め？
耳に聞いた。わたしは想いだしていた
わたしは稚彦の爲にだけ
最初に学校で顔を合わせたとき
五十音表の下で笑んだ
あなたはすでに逸らした目の
貪るように
端の隙間いっぱいわたしを
弄り翫ぶ稚彦の手が
見つめつづけた。かたくなに
握りつぶして仕舞うに違いない
自分からはわたしに言葉を
恐怖を感じた
告げられないまま、時に

わたしは彼を
極端に従順な
恐怖を感じた
家畜じみた？
つきとばし、そして
あるいは
彼のまなざしに
やさしい慈愛の母親めいた？
わたしをさらした
聲でわたしを見詰めながら答えた
聲を立てた
あなたは病んだ、と
うつくしい少年の
わたしは思った
狂暴なだけの口
もうすでに
濁音をわたしは
あなたは壊れた、と
耳に聞いた
わたしは思った
近づく稚彦の
他の多くの
頬を叩く
女のように
聲を立てた
休みの日の
うつくしい少年の
教員だけのイベントで
狂暴な濁音
近くのグラウンドで遊んだ時に
彼の目の前に
その夕方のお茶会で
わたしをさらけだしながら
翳り。…青い
彼の爲に
大樹の横の青に翳り
稚彦の爲だけに
私の前に座ったあなたは
性の目覚め？…狂暴な
怯えたように目を逸らす

うつくしい少年の知性の無い
わたしなど、そこに
性の目覚め？…その爲に
もとから存在しなかったように
立たせた稚彦を
虐待され、公然と
さらさせた。うつくしい
辱められているような目で
肌の色に、とめどもなく
怯えたように目を逸らす
すべてさらさせてしまいながら
わたしなど、そこに
わたしは見ていた。目を剥いた
もとから存在しなかったように
稚彦のただ
頭の上に、無数に垂れた樹木の蔭を
狂暴な、その
わたしは見ていた
眼差しを
なに？
濁音
わたしはささやく。あえて
唇に濁音、そしてそれ
あなたにだけ、わたしは
ながい長音
ささやく——なに？
息がつづくまで
なに？
後ろ手に
これ、なに？
わたしは稚彦に
なにって？
後ろ手に胸をはる事を強制して
この木、名前、なに？
ふれた
あなたは名前を知らない事を
稚彦に
そのときはじめて知ったのだった
性の目覚め？
胸と喉を

稚彦の
私にいっぱいのにけぞらして
思った。わたしは
見上げた頭の上の葛に
稚彦の
あなたは聞いた
性の目覚め？
笑い声と共に、又は
彼の爲に
性急すぎる
彼にふれた
聲に焦燥させみだれさせながら
家に帰って
息遣い
恵美子を見た
あなたはみんなに聞いて回った
その日も、また、次の日
だれも名前を知らなかった
それから
知らない、とは
歸って来る度に
それでもかたくなにあなたは
手を洗い、執拗に
わたしに、知らない、とは
うがいをし、執拗に
あなたはかたくなまでに
手を、ないし
わたしにだけは謂わなかった
冬でもシャワーで体を流す
あなたは聞いた
少年の潔癖を
だれにも、かれにも
恵美子を見た
あなたの頭の遥かな上の
久生は吼える
葉の翳で鳥が
恵美子は案じた
聲を立てた
母親似の潔癖？
みじかく

久生は咬む

壬生が窓を開けたことを、壬生はゴックに秘密にした。ゴックがすでに気付いていたことを壬生は最初から気付いていた。押し開けられた窓の木枠がきしんで、…なに？ と。
なに？

音を立て、みじかく一度だけ響き、…なに？ と。

なにを？

吹き込んだ瞬時の外気が、まるでそこにだけ立った風が逢ったかのように、…風。
と。

いつでも、まるで新鮮な者のようにところを擬態させて、風。

私が生まれる前から、ずっと前、南米大陸に白人がはじめて足をふれる時にも、釈迦牟尼が華を無数にふらせる時にも、人が二本足で立つ前からすでに

吹き続けていた、あるいは、それ

太古の風？…と、壬生は思い、部屋の中が急に、さっきまでまさに籠り、熱気に噎せ返り、飽和していたかのように擬態させ、その事実を肌にさとらせて壬生は、…なに？ と。
なに？

ゴックは目かくしたタオルの生地の下に眼を閉じた儘に、…なにを？

と。

これから、何を？

壬生は誘うようにバルコニーに連れ出して、その狭さ。廣いとはいえない、狭くはない狭さ。すぐ目の間に手摺が見えて、それ、鐵の、花と葉と蔦をかたちどった絡まり合い互いにかからめとりあったかのような、それは白い。塗られたペンキの、時にしたたった白い汚点が床に。…なにを？ と。

知ってる、もう、なにも、と

なにを？

あなたのすきなように、なにも、と

なにを？

後悔？ もはや、後悔など

なにを？…と。心にささやくままに、ゴックはもはや身をこわばらせるともなくに…見えるよ。

ゴックは云った。背後に、抱きしめるように添うた壬生に、背をのけぞらせるようにして身を預けて——見えちゃうよ。

と、ゴックは、…感じる？

と。

あなたの肌は感じただろうか？

いままさに、…光、と。

その光に直に

素手で？…と

ふれられてその

肌に温度は目ざめた…と、…光の

光の温度は——知ってる？ と、壬生は——気付いた？ と、心に、自分の心にだけささ

やき、——誰かいる？

ゴックがささやく。

——外に

と、

——いま外に誰かいるの？

と、壬生はゴックが身をこわばらせもせず、ただ、寧ろ壬生に投げだし預け切って仕舞ったのを…なに？ と。

なにを？

ゴックは、何をみてるの？ あなたは、いま、

…誰と？

なにを見てるの？ あなたは、いま、

…誰と？ と、ゴックは、——誰もいないの？

ささやくゴックに壬生は

——いない？

答えもせず、むしろ

——誰も？

言葉さえ忘れた気がし、眼差しの右の下の方に、その、路面に、バイクに乗ったまま、出て来るべき誰かを待っている女がいたことは知っていた。女は、日焼け止めの、覆面とスカートと手袋とサングラスに、その人相の面影もなくて、…あなたもあなただって。

と。

みあげた上方の他人の家のベランダに、全裸の女とほぼ全裸の男が、はだをさらして抱き合っているのを見、見上げ、…知ってる

あなたも、すでに、と。

壬生は不意に思いついた。…足の下に

ひくくなるバイクのエンジン音は

あなただって聞いていたのだ。まさに

あなただって聞いているのだ

いまも、…と、女は路上にそのふたつの肌を見詰め続けていた。家の中から待ち人が出て来て…娘？

壬生は、…娘？

それは…娘？

と。

どなるように娘にささやきその早口の終わらない間に娘の、後ろに乗りかけたまなざしは壬生たちを見上げた。その目の色は、同じく覆面とサングラスが隠しとおした。つけっぱなしのエンジンがふかされて、…訴える？

と。

ここに、侵入した強姦魔とその犠牲者が、恐れおののき方や勝利の恍惚をさらし、ここに物見していたのかもしれない。

訴える？

警察に？

誰に？…と、さわぐ？

騒ぎ立てる？…と、壬生は、思わず笑いだして仕舞いそうに、そしてバイクは走り出し、あやうく娘は投げ出されかけた身を治め、前の女の手袋の二の腕をつかむ。かくて偲に頷して曰く

だれも見ないだろう

と、わたしは

すくなくともわたしは思った

だれも

もはや

だれもわたしたちを見ないだろう

物音は在った

もしくは聲

遠くに

遠くとは言えない近く

近くの

脚の下の

壁の向こうの

聲——見てる？

ゴックがささやく、——だれか

みてる？…ゴックが、…だれか…——ね、

誰もいない？

ゴックは自分が

その素肌が

誰の目にもさらされえる

剥き出しあることを知っていた

なぜ？

誰もいない

なぜ？

だれも、いま

なぜ？

私たちの裸身に眼を

とどめるものは、——見えちゃうよ

と、ゴックは、聲に

怯えも——見られるよ、と

慄き、もしくは羞恥——だれかに

恥じらい？——見えちゃうよ

ささやき、むしろ無邪気に

じゃれあうような声を

なぜ？

ゴックは唇のさきに
なぜ？
歌うように立てて
知ってる？ と
わたしは私の心に——ね
知ってる？ ささやく、唇に、——ね
知ってる？…綺麗だよ
と、心に
わたしは自分の…綺麗だよ、と
心にだけ、——知ってる？
ささやき、唇に——ね
綺麗だよ、と
わたしは、…知ってる？
と、心に、殊更に
秘密めかして
心に、——知ってる？ と
唇に？——見てるの？
ゴックは云った
ささやき声で
綺麗だよ、と、私は
見てる？ と、——見てる？
誰か見てる？
ゴックをなど
眼差しは見向きもしないままに
綺麗だよ、と、——誰が？
見てるの？ と、ゴックは
飽く迄も
嘘のようにも無邪気に
誰が？…と
ゴックのささやく声を聞いた

かくに聞きゝ 8月22日晴れて晴れ切りたりきかくて早朝壬生バイクにゴックを背に乗らせ海へ行きゝかくて海まばらなる人と人ゝのみ散らし静かなりきかくて壬生空に雲ノ雲母なす雲ノ綺麗らかなるを見又海波立ちて青くもはや青みだに感じさせずに白く綺麗メきに白くざわめきて騒ぎ立ツを見肌ですでに灼く日のひかりノ温度ありきかくて傾して

その朝に
おとうさんって、どんなひと？
さゝやく
おとうさん？
海、行こう

いるよね?…ぼくにも
海?
どんなひと?
その朝に
恵美子はそして私を見詰め、思い出したようにいきなり笑んで
ゴックはむずかる
おかあさんに聞いてみな
焼けるよ
おかあさんが知ってるよ
灼ける?
企むように、十歳の夏?
肌、黒くなるよ
夏休み?
その朝に
恵美子はやがて
風
聲をたてゝ
空気は停滞していたのだった
その唇に笑ったのだった
籠り始めた
はじめて会った時
灼熱の日の
雪菜は
ひかりの温度に
丸山町のクラブの前で
空気は停滞していたのだった
中を窺いながら
刺す日のひかり
夜の、壁の、おとした暗がりの中で
赤裸ゝなまでに
コンビニで買った…盗んだ?
色をいろいろにさらし
パンをひとりで咬んでいた
風
誘惑するように
疾走するバイクが
むしろ
その速度
誘惑するように
風

わたしは彼女に
むしろ風圧に抗い
話しかけた。通りがかりに
風圧にうちのめされながら
ひとり？
速度
家、すぐそこだから
加速する速度に
雪菜は答えた。…家？
三車線の大通りに
ひとりだよ。…と
車もバイクもほとんどない
あらためて私を
速度
見上げて笑った
加速する速度に
雪菜にわたしは、彼女の爲に
背中でゴックがなにか云った
笑ってやった。…ひとりなんだ
ヘルメットの下
すぐそこ。…と、雪菜は
マスクの向こうで
ほら、…あの…あの
なにか聲を
高いマンション。すれ違う
立てられた聲は
言葉と言葉ら、聲と
聞き取られる前に
聲らのひびきのなかに
風に流れる
背後のビルを
すでに
指さしてそして振り返り見た
聞き取られる前に
私を見詰め
風に流れる
ひとりで雪菜はパンを咬んだ
東の海
それは冬
まさに

十一月？
東の海
いい子だね、と
ゆゑに
真鍋孝美という名の教師が
まなざしは空の
私にささやく。その
海の近くに開口した
十一歳の
光の閃光に白く眩む
グラウンドで
昏む目が
友達らの誘いを
見出す白
敢えて断って
銀色の
稚彦と日影に
そして暗い
あそぶ私を、いい子…
ものの翳りにすぎない
壬生君って、やさしいんだよね…
ビルのかたちの
わたしは思う
切れた先
その
湾岸道路の
逆光の中に見たと、いつの間にか
一直線の
逆光に見上げて見たといつの間にか
白濁の向こうに
記憶された真鍋の顔に
あまりにもあざやかな
あなたはまさに、いま、差別した
銀色の綺羅ゝの
あなたはまさに、いま、この少年がだれにも無視され
かがやきを見た
排斥されてしかるべきだと規定していた
ゴックは不意に自分の名前を思い出した、その名前、グイン・ヴァン・アイン・ゴック。
莫迦、と。ゴック、馬鹿なやつ、という意味の名前、…日本で、「ゴックさんて、意味、
何？」ホテルの専務が云った、その日本人…バイト先の、ビジネスホテルの、三十代の…

結婚してもいい。此の人と…

此の人となら？「…馬鹿」

上目に笑ったゴックを、——なに？

咎めるような、「莫迦っていう、意味です。」

「馬鹿？」なんで？ と。言いかけて専務は口ごもった。此の人なら。

此の人となら？ 思った、おそらくは、触れてはいけない、複雑な家庭の複雑な親子関係の…或は捨て子？ ベトナムでは一般的に、いい名前は付けない。運を、名前が吸い取って貪ってしまうから…と、「莫迦。」

ささやくゴックの上目づかいの目に、「…馬鹿です。」その男、田村専務——グイン・ヴァン・アイン・ゴック。莫迦、と。ゴック、馬鹿なやつ、という意味の名前、ゴックは自分の名前を唐突に想いだし、その、さらされた外気。外の大気にそのままにさらされた、あくまでもさらされた大気、まるで、と、ゴックは、

どうしてわたしは濡れているの？

と。

思う、ゴックは、背後の壬生の息づかう存在だにもすでに忘れ、ひとりで、——どうして？

雨の中を

土砂降りの雨の中を

と、ひとりでここに

なにも着ないで？

素肌をさらし

と、ここにひとりで

ずぶぬれになったように

と、ゴックは

どうして？

と。

ゴックは心にささやき、そのささやきさえ壬生は知らずにかくて偲に頌して曰く

髪匂いが鼻の先にあった

水浸しだった

濡れた

なにもかも（…今だに）

いまだに乾かない儘の

瞼も（…猶も）

ゴックの

眉毛（…猶もいまだに）

髪の

そして（…今でも）

匂い？

睫毛さえ（…今に至っても）

髪の毛の匂い？

その毛先さえ（…猶も）
ゴックの？
水浸しだった（…まだ）
あるいは
雨の中から（…まだ、今も）
水の匂い
ふいに（…ずっと？）晴れた
人の躰に
空の下に（…もう、）
もっとも無機的な
いきなりさまよいでたように
勝手に伸長するそれ
水浸しだった（…もう、ずっと？）
髪にふれて
ゆびさきが（…これからも）
みずからを匂い立たせた
爪の先さえ（…したたる）
匂い
ふれるものさえ（…したたりおちる）
こんなにも
濡らして仕舞う程に
と、わたしは
水浸しだった（…今も猶）
こんなにも晴れ上がった
知っていた（…したたる）
無慈悲な迄の、と
水の（…したたりおちる）臭気
わたしは
透明な（…その前の）
空の下に、わたしたちは
色の無い（…一瞬）水の
わたしたちだけで
不可解なもの…
肌をぬらし
色の無いみずは
濡れた肌は
その一粒の（…ふるえた）水滴としてさえ
と、わたしは
その存在を（…一瞬だけ）
水滴を

隠さない（…それはふるえた）
と、思う
透明に（…なぜ？）
ささやくように
向こうを（…今だに）透かして
心に
なぜ？（…今も猶も）
水滴を垂れた、水滴を
それ固有の（…ふるえた）
と、心にささやく聲を
形など無い儘に（…ふるえた）
垂らすと
あきらかに（…ただ一度？）その
わたしは聞いた
存在を（…その時まさに）さらし

かくに聞きゝ 8月20日戯レじやれあヒじやれテ戯るゝまにマに昼食を用意せんとス壬生ノ調理す裸身ノ儘なる背中にゴック笑ひき居間なるソファにひとり轉がりて仰向けにサ
ラサレタル素肌を壬生が目線ノ無きにも誇り傲レるばかりにも矜持シてかくて壬生フラ
イパンの立テたる音と音らの音に耳スませかくて肉ノ焼ける匂ひをゴック鼻にかぎテふ
いに指先にみづからの鳩尾ヲ撫ぜかくテ指にかスかなル汗ノ汗ばみだる触感を觀ジたる
には氣づかズてかくて壬生ハ聞きゝ油撥ねき壬生は聞きゝ粒立つ油にざわメき騒ぎさわ
ぎたツまゝ肉は焼カレきかくて頷シて

匂い立つのは油の、そして焼かれる肉の、あるいは
隠れて、わたしは
何度か海を見に行った。たとえば
隠れて、わたしは体臭を嗅いだ。なんども
ユエンとも、ユエンとさえ、日焼けを厭う、病的に
久生の
匂い立つのは油の、そして焼かれる肉の、あるいは
その体臭を

憑かれたかにも、日焼けを厭うユエンとも、何度か
同じ匂いがするようだったら、わたしは死んでしまうつもりだった
何度も海を見に行った。雪菜とは
隠れて、わたしは
匂い立つのは油の、そして焼かれる肉の、あるいは
隠れて、わたしは久生の首を戯れに
一度も海など見なかった。一度も…クーラーの利いた
じゃれついて絞めた。笑みもせず
過剰に冷やんだ乾燥の彼女の部屋…道玄坂の上の
例えば久生が

匂い立つのは油の、そして焼かれる肉の、あるいは
わたしの二の腕を
最上階一階下の、驚くほどに
咬んだ時に
無意味に広いルーフバルコニー、その部屋で
何の意味が？ 喰いちぎりもせず
匂い立つのは油の、そして焼かれる肉の、あるいは
何の意味が？ しゃぶりつきもせず
肌に冷気に鳥肌立てて、わたしはひたすらその肌に
何の意味が？ なぜあなたは
雪菜と共に、戯れ、時に
わたしにばかり咬みついたらう？
匂い立つのは油の、そして焼かれる肉の、あるいは
決してわたしを傷つけないよう
クーラーを切る。…嗜虐？ わたしの…クーラーを切り
隠れて、わたしは
だめだよ。ささやく、性急な、…だめだよ
隠れて、わたしは久生の体を折檻した
匂い立つのは油の、そして焼かれる肉の、あるいは
殴打する
雪菜の聲を体の下に、わたしは
なぜ？…あきらかに
だめだよ…わたし、また、…ね？…駄目だよ。むしろ
そうすべきものと、あきらかにそこに見えていたから？
匂い立つのは油の、そして焼かれる肉の、あるいは
二人だけの時
目隠したまま暗闇で
十一歳の
突き出した尻に汗に塗れろ…嗜虐？
わたしは殴った
匂い立つのは油の、そして焼かれる肉の、あるいは
蹴り
わたしの嗜虐？…寒いよ。ささやく
戯れて
寒すぎるから。…もう、と
じゃれつくように
匂い立つのは油の、そして焼かれる肉の、あるいは
笑みもせず
十二月だろ？ もう…とクーラーを止めて
隠れて、わたしは

窓でも開け放ってしまえばよかった。むしろ
隠れて、わたしは何度目かに
匂い立つのは油の、そして焼かれる肉の、あるいは
久生の口に指を入れた
わたしは雪菜の両腕のかすかな抗いをつかむ、両手で
一本、二本
そして
咬みつけかけたその口の
匂い立つのは油の、そして焼かれる肉の、あるいは
大きな開口に
時にひっぱたく。時に、…なぜ？
三本、四本
かならずしも、雪菜を愛した事実も無くて
馴らしていけば、たぶん
匂い立つのは油の、そして焼かれる肉の、あるいは
そのまま握りこぶしさえ入るだろうと
雪菜が唇を大きく開き、息を吸い込む。叩かれ
引きずり出してあげよう、あなたの
殴られたときにはかならずいつも、雪菜はひとり
あなたの内臓を
匂い立つのは油の、そして焼かれる肉の、あるいは
手を突っ込んで
大きく空気を、長く吸い込み、…なぜ？…と。心に
喉の奥にまで、腕を突っ込み
ささやく。心にだけわたしは、何故生きてるの？
さかさまに
まだ
引きずり出してあげよう
なぜあなたは生きてるの？
涎を垂らす
まだ
母は口から
ゴックが一步、前に進み、そして狭いベランダに、すぐそのベランダ、その花と葉と
蔦の飾りをかたちづくった鐵のもろもろにまさにその肌、胸先から下の肌を触れさせて
しまいそうになったので、——まるで、と。
まるであなたは今、
眼が
その目隠しされた目が、まさに
見えているように
と、壬生は

あなたは今、蔽われ、まさに目隠しされた儘に、と壬生は想い、ゴックは唇をかすかに開いていた。壬生は、そして花

或は葉。

或は蔦。

それらが鐵の固く未だ錆びない儘にさび付くそれらの未來を眼差しの中にだけ予期させた、そして白。

塗られた白。

その色。

ペンキを塗られた、と、壬生は、そしてひらかれた唇にゴックは息を吸い込み、その胸の下に、かすかに正面からは右に傾いた脇腹が鐵の、そのせり出した葉の突起の一つにふれそうになった時に、…痛み。

と、壬生は、…痛み。

突き刺さり、あなたは背筋をのけぞらせるだろう、と、思い、壬生は、痛み。

その尖った、しかし

なぜ？

丸みを帯びた

なぜ？

丸みを帯びた葉の突起に

經年のせいで？

吹き出すもの、と、壬生は、…なぜ？

日に刺されて？

思った。壬生は、…例えば血、と、…なぜ？

日に刺されて、例えば

プラスチックが打ち捨てられた儘で

その色をは終に失い得無い儘に

色あせていくように？

痛み、と。

壬生は、そしてゴックがもう一步危うく踏み出しかけたときにゴックは一度のけぞって、目を、と。

壬生は心に、その須臾に心にだけさゝやいた、目を剥く、と。

聲をかさねて、あなたは眼を

剥き、眼を、あなたは、と、剥き、その、と

目隠しの、剥き、隠され、眼を、覆われた、と、剥き、あなたは、隠されたその、と

眼を剥きながら、目隠しの

下で、と、眼を、と、あなたは、

剥き、その、と。一度さかむきにのけぞったゴックは青空の逆光に肌、背中の中白。

なめらかなおうとつのかすかを曝す。

ゴックの肌にいくつもの翳りが青みを以て、そしてそれは這うように。

自在に。

自由に。

むしろなににも捕らわれなかった一瞬を其の時にすでに獲得していたかのように。壬生の眼には見えた。須臾の停滞の、のけぞったまゝの一瞬のあとにゴックはいきなり前のめりに身をへし折って、そして吐いた。

壬生は見ていた。

ゴックがベランダの向こうに、激しく腹部を極度にもへこませながら嘔吐してなにも出し得ないでえづくのを、…あなたは、と。

壬生は思った。いま、まさに

その胎のなかに宿したもののさえ口から

馳て

吐いて…吐き、吐き出して吐いて…吐き、吐き出してしまふに違いない、と。ゴックはベランダにもたれ手摺に胸をこすりつけながら、つぶれた胸の息苦しさを感じもせず、たゞ純粹に自分が吐いている自分の息の、喉の、腹の、太ももと二の腕の、もはや全身の息吹の熱氣のふたゝびを感じた。かくて偲に頌して曰く

目隠ししたまま暗闇で

ゴックの

ゴックの爲だけの

ゴックの固有の暗闇で

その逆光を盡きた

光の洪水

光の氾濫

光の下に

さらされ盡しながら

ゴックは吐いた

目隠ししたまま暗闇で

ゴックの

ゴックの爲だけの

ゴックの固有の暗闇で

わたしは思った

まるで久生のように？

目隠ししたまま暗闇で

ゴックの

ゴックの爲だけの

ゴックの固有の暗闇で

まるで久生のように？

あるいは美恵子の

あるいは大津寄稚彦の

あるいはその家族たちの

あるいは彼と私をとりまいた幼い友人たちの

あるいは彼と彼等をとりまいたおとなたちの

今知る

彼等、その十二歳
ないし
その十一歳
ないし
その十歳のときの
眼差しの見た不遜で
傲慢な
おとなたち
かれらはすでに私の年下だった。
今は知る彼等の幼さ
彼等の無残な迄の
幼稚さ、稚拙さ、目隠しゝたまま暗闇で
ゴックの
ゴックの爲だけの
ゴックの固有の暗闇で
まるで久生のように
あるいは私の
久生は時にわたしを抱いた
その宮島の
神社が見えた。島の西の
山なりの土の
林だった
樹木の向こうに。その
家で、恵美子がひとりで
わたしと久生を育てた
家で
祖父はすでに死んでいた
戦争で？
遺影があった
軍服の
若くして？
あまりも若い遺影の儘に
若くして？
私には何も語らなかつた
私には何も語られなかつた
そのやさしさの傲慢の所爲で
そのいつくしみの暴力的な無慈悲の所爲で
久生は抱いた
その居間の
畳の上に

今風に敷いたカーペットの上で
時には唇に
久生以外の口からはかつて一度も
きいたことのない音
やさしく
いつくしむ
眼差しにわたしを
知っていたの？
見つめながら
知っていたの？
わたしがあなたの子供だと？
せめて愛さなければならない子供だと？
犀の角のように
唇に聲
犀の角のように
あまりにも孤絶した
犀の角のように
聲
犀の角のように
濁音の
犀の角のように
叫び聲？
犀の角のように
ときにはまさに
犀の角のように
聞く耳が
犀の角のように
張り裂けるような
犀の角のように
蹙音で
犀の角のように
語りかえるように？
犀の角のように
耳鳴りのする蹙音で
犀の角のように
弱音
犀の角のように
葉の
犀の角のように
ひとつの葉が

犀の角のように
葉陰に
犀の角のように
ひとつだけこすれたような微弱の音で
犀の角のように
ささやくような
犀の角のように
のゝしるような
犀の角のように
わめくような
犀の角のように
つぶやくような
犀の角のように
そっと
犀の角のように
耳に
犀の角のように
語りかけたような
犀の角のように
人の言葉だと
犀の角のように
久生はそう思っていたに違いない
犀の角のように
自分の唇の知る音響を
犀の角のように
孤絶した音響
まさに、久生の口から以外に
まさか雲雀は。まさか
まさか揚げ羽は。まさか
まさか雀は。まさか
まさか紋白は。まさか
まさか燕は。まさか
まさか鳥、まさか白鷺、まさか鶯、まさか鶴は。まさか
まさか蜥蜴は。まさか
まさか豚は。まさか
まさか猫は。まさか
まさか鼠は。まさか
まさか牛は。まさか
まさか野犬は。まさか
まさか猿は。まさか

まさか百足は。まさか
まさか狛犬は。まさか
まさか地蔵は。まさか
まさか木彫りの仁王は。まさか
まさか陳列された阿修羅は。まさか
まさか人は。まさか、久生以外に
久生の唇
その喉以外に終に知らず
その歯いかに
終に咬まなかった音響を
わたしは彼女の爲にだけ
胸に抱かれて遣りながら
ひとりで耳を
すましたままで
わたしはひとりで聞いていた。時に
すでに忘れたすでに
不在のものを想いだす
その腕の匂い

かくに聞きゝ 8月4日夕方壬生ゴックと俱なりて寢室にアリきかくてゴック壬生が胸の上より身ヲ起シかけ起こししたるに不意にいそぎ返り見シてかくて壬生に言さく
痛い！

…なに？

壬生驚きてゴックを見ルに壬生素肌すでにさらシき又ゴック素肌すでにさらシき暑氣ノ籠りたる儘に汗の匂ひ又肌にふしたる汗の匂ひ又肌にすべりたる汗の匂ひ又肌の又は髪
の匂ひ等たち匂ひたちて壬生ゴックが額に前髪汗ばミてへばりつきたる見きゴック目に
壬生にもまシて驚きたる色さらしたるまゝにかくて白シて壬生に言さく

痛い？

…なに？

夕日傾ぶきたれば窓より紅の色又は朱ノ色又は黄ノ色又はそれらまじらせたる色さらシ
たる日ノ光り横殴りにゴックが背ヲ染めたりけるヲ壬生ハ見かくてなにごとか言ひかけ
んとしたるにゴック一度息を吸ひすぐさまに吐キ吐き終えずして白シて壬生に言さく

痛かった？

…なにが？

ゴックひとり壬生がまばたきたるを見きかくてゴック壬生に白シてさゝやき聲もて言さ
く

踏んだ。

なに？

ゴック壬生を見きかくてあらたにも言はんとする須臾謂はんとしたるを悉くに忘れツ
かくてまばたきかくてゴック壬生に白して沙沙彌岐聲もテ言さく

今…

踏んだの？…なにを？

時に壬生唇に聳たてテのみ笑ひかくて眼差しに茫然のゴックを案じたりけるをゴック見かくて思はず我に返りてゴック笑みもせざりて茫然とシ茫然の驚きの眼差シのまゝに壬生の額に口づけたりきかくて壬生首に蔽ひたるゴックが肌ノ温度をノみ感じきかくて頷して

匂うような温度が
しらないの？…あなたはすでに
首にふれた。まるで
すでにゆふひにふれてみた
傍若無人に。まるで
しらないの？…あなたは
恥知らずに。まるで
すでにくれなゐに
おしつけるように
くれなゐのひに
匂うような温度を
はだをもそめた
その肌は感じた。わたしがまさに
ぼくたちは
なすりつけた温度をその肌は
そのいろにそめあがり
傍若無人に。むしろ
そのいろにそめあがり
恥知らずに。むしろ
ぼくたちはむしろ
その温度に対してだけ冴えた
くれなゐだった
肌の温度に
しらないの？

壬生は見ていた。ゴックの曝した、前のめりの丸まった背中、その肥満しかけた肌は艶を失って、もはやもとからそんなものなど在りはしなかったかのように、幼いまでに色気のない骨格、そのかたち。肉、その肉のふくらみ。肌、その肌の色。翳、その影の揺らぎ。産毛、その産毛のきらめきあるいはきらめかない儘の眼差しの内の不在を曝し、壬生は吐き続けるゴックの、わなゝく脇腹に両手の指先をふれようとして思いとゞまる。——なぜ？

壬生はあやうくふれなかった指先のすぐちかくに熱を帯びた肉體の発した温度を、——なぜ？

壬生は感じ、壬生は見ていた。その目で、汗ばんだ生き物、まさに、——なぜ？

と、壬生は思う、心に、——俺は棄てたに違いない
あなたを

なぜ？
ふれもしないで
かたわらに
すでに捨て去っていたに違いない
なぜ？ と、生き生きとした、吐く生き物。ゴックは汗ばみ、汗ばんだ肌の汗を知ったみ
ずからの触感より以前に嘔吐に噎せ返った体内の、——喉の？
發熱を、…水を。
と。
わたしはもとめた。
水を
と。
きれいな、つめたい
水を
と、ゴックはその心に、頭のなかにだけ木霊してさゝやきわなゝく背中、押し曲げられ
時にのけぞりかえる頭部、その髪、黒、乱れた白濁、光沢の、それは光、と、壬生はその
先には空間。
と。
慥かに空間
やがて空の青にさえ至り、と、かくて偈に頌して曰く
あなたを今
不思議だった
だれも
わたしは思いだす
なにも
記憶
救えはしない、と
その存在の故に？
わたしはひとりでそう思った
思い出す
ゴックの曝した
現存する記憶の故に？
彼女の孤独に
わたしは
むしろ自分の孤絶を
…まさか。
さらしたようにも見い出しながら
わたしは不思議だった
ゴックは吐いた
狂った生き物
恍惚として？

あきらかに
その胎に
狂った生き物
歡喜して？
どうしてかの女が
いまだ生き物の痕跡を見ない
私を生めるだろう？
のたうつ苦しみ
ゴックのように
生きた細胞の
つわりに吐き
苦惱して
來たるべき
息吹の爲に
ゴックのように
患ったひと
肌をあらし
あきらかに生きてあるもの
來たるべき
病んだ人のように
ゴックのように
玉がまるでつぶれるように
まさに妊婦のように
左右から押しつぶされて
まさに妊婦として
真ん中でつながる
妊婦のように蟹股に、当然にあるき
臆て生じる
狂ったいきもの
口として口たる開口から
叫ぶ微笑の
肛門として肛門たる開口迄
狂ったその生き物が？
貫き通した
かつての
空洞
ゴックのように
穴
男とまぐわう
貫き通す

私と？
打ち込まれた
わたしのよう
な
鐵棒のよう
な
未知のだれか
と？
道
…まさか？
空洞
狂った生き物
穴
不思議だ
った
道
いつから彼女は狂
ったの
だろう？
なにものも
誰も何も教
えな
かった
現生の
わたしに
だけは
なにものも
のが持
ち
やさしさゆ
ゑに
持たざる
を得な
かった
いつくしみ
ゆゑに
或は限界
じみた
誰もなに
も教
えな
かった
鐵棒の
よう
な
いつから？
空洞
まさか狂
氣の
穴
今に變わ
らない
狂氣の
内に
道
まさか
他なる在
り方
わたしを
生むわ
けが
他なる限
界は
まさか
なぜ屠殺
され
わたしを
宿すわ
けは
滅ぼされ
てしま
ったの
ら
う？
どうして
彼女が
なぜ？

生めたゞろう？
なぜ屠り
あの
なぜ滅びてしまったのだろうか？
恐ろしい程の
なぜ？
苦痛の中に
生きた未だ
大股を擴げ
イノチとさえ言えない寄生した
私以外の
胎に他人のイノチを削り
わたしのよう男を
胎に他人のイノチをすゝり
啜えこんだそこを
胎に他人のイノチを喰らう
成り成りて
イノチ以前の
切る
あきらかな命が
成り成り合わず
ゴックをまさに
刃先で切る
今、吐かせた
鳴り鳴りて
歡喜して？
切る
もはや胎に
鳴り鳴る怒號？
歡喜して？
聲をあげる
胃に
まさか、私を
歡喜して？
狂って居ながら？
腸にも
わたしは時に不思議だった
歡喜して？
わたしはいつも不思議だった
蝶にも？

その九月
歓喜して？
秋分の日の休みの日
大腸にも
十一歳の私は
歓喜して？
見た
幻の金色の大きな蝶にも？
朝、母親が
歓喜して？
起きて居間に
肛門の先をさがしてさえも
轉がり込むように
歓喜して？
入って來、そして
吐かれ得るものなど何もなく
むしろなにも叫ばずに
歓喜して？
むしろなにもさゝやかに
拒絶するように
狂った目
歓喜して？
なにを見てるの？
胎にあるその
剥かれた目
歓喜して？
今、なにを？（…咬む？）
異物を
私は（…食べもしないのに）知らなかった（…あなたは咬むの？）
歓喜して？
久生がなにをしようとしたのか
拒絶するように
わたしは知らなかった
歓喜して？
久生がどこへいこうとしたのか
寄生の異物を
久生はいきなり居間の真ん中に
歓喜して？
立って
口から吐いてしまおうと？

立ち盡くし
歡喜して？
わたしをかえり見しかけたその時
拒否反応
その須臾に
歡喜して？
吐いた。口から
縁のない他人の血を流し込んだ血管のような？
聲もなく
歡喜して？
真っ黄色の
拒絶反応
不可解なねばる
歡喜して？
糸を引いた液体
縁のない他人の肝臓を移植したような？
唾液？
歡喜して？
その糸さえ
ゴックは吐いた
照らした
歡喜する？
光は
ゴックはえづき
叫びもせずに
苦しみに
私は殴った
体中
久生を
こころさえも
聲もなく
染め上げて
久生は何も
歡喜する？
なにも知らない無辜の犠牲者のように？
まなざしに
ひつつかまれた髪に目を剥いた
開かれた目の見た
臆病者の上目遣い
なにも見ずに

手が汚れた
ただ自分が咬んだ
あなたにふれたから？
苦しみと不快をのみ見出し
聲もなく
汗にまみれ
怒号も無く
歡喜する？
たつ音響
イノチたち
久生の暴れた四肢がものを
歡喜する？
叩き壊す
拭き零れるように
叩き出したその庭で
歡喜する？
ホースの水で洗い流す
ときにはまさに
水浸しの久生の何時か亂れた
歡喜する？
はだけた腹に
拭き零れるように滅び
私は見た
歡喜する？ それら
手術跡
イノチたち
帝王切開？

かくに聞き、8月27日ゴック部屋にありテ窓際に振り向きたる刹那に汗ばミたる鳩尾に汗ノ粒流れ落ちき時に壬生羽交い絞メにゴックを腕に絞メ壊さんとシたるが如クに壬生腕にゴックを抱きてかくてゴック壬生が唇を吸ひてかくて昼間の喰ひをはりたるのちノ唇ノ臭氣ノそれぞれの複雑なるそれらを壬生又はゴック感じてかくて頷して

あ！…と
父に会ったら、聞こうと思った
わたしは聲に出して
小学校の
部屋の中
父親参観に
ひたすらに
不在の父に
たゞひたすらに

父に会ったら、聞こうと思った
あかるい部屋の中で
激しい折檻を加えた後で
あ！…と
その
わたしは不意に聲に出して
ざわめく彼の屈辱の息遣いのあららぎに
その
なぜ、あなたは狂気の人をその恍惚のさなかに抱いたんですか？
人を呼ぶような？
なぜ、あなたは
あ！…と
わたしは思う
誰かを呼んだような？
あなたが抱いたその時から
大聲に
久生は今に変わらなかった
まばたいた目、…それはゴックの
そうでしょう？
不意の叫ぶ
穢れた奴だと
叫ぶような大声の
軽蔑する？…彼
不意に
不在の彼を
まばたいた眼、それはゴックの
腐った奴だと
驚いた？…むしろ茫然の
罵倒する？…彼
驚いた？——どうしたの？
不在の彼を
と
稚彦と
どうしたの？
同じように久生は
ゴックは
まさに、時を隔てた
性急すぎた早口で
双子のように？
ひとりでまばたくゴックの目、…それは二度

久生の唇も生まれたときから
どうしたの？
濁音を嘗めた
最近、聲だしてないじゃない？
おそらくは
まぶしい…すでに
その唇以外に
わたしは笑んで
人の唇が
すでに真昼のひかり
ついにいちどもふれなかった
わたしはゴックに
固有の濁音
笑んでわたしは
生まれたときから
彼女の爲だけに
あなたは叫んだ
なに？
その口に
ささやくゴックの
あなた固有の濁音で
かがやけ
あさなは叫んだ
どうしたの？
父に会ったら、聞こうと思った
かがやけひかりら
あなたを今更探す気はない
お前も、叫んでみなよ
父に会ったら、聞こうと思った
わたしはさゝやく
唇の
見つめながら——そのまばたきを
わななかせた濁音を
性急な三度の上下
耳の至近に聞きながら？
あ！…と
顔のない
わたしはゴックを
いまだに顔をまったくもたない
あ！…と

顔なしの父に
見つめられながらゴックは
父に会ったら、聞こうと思った
あ！…と
耳元にひびく
不意に声を立てて笑い崩れたその壁に
今に聞くのと変わらない
蜘蛛は早足に
濁音のもろもろに
駈け上り、いきなり止まる
あなたは息をふきかけた
日差しの真ん中…間接光の
あなたは息をふきかけた
白濁の淡さに
そして笑った？

壬生は窓のサッシュに背を預け、むしろ目を閉じていた。或いはなにをも、もう、みた
くもないと思ったわけでもなくに背を伸ばす。ゴックは背を伸ばし、自分がす
でに吐き終えた、ないし、つわりの発作を一時終えたことには気づいていた。ゴックは感
じた。自分の唇が、あるいは口の中が、いまだ吐き出そうと時に發作的に嘔吐の味を感
じはじめる、その微弱にぎわめく、さざめくような、何も見ないわけじゃない。

壬生はそう思った。何も見ようとしなわけじゃない、と、ただ、あまりにも光が、と、
あまりに光こそが、と、あふれ、あふれかえり、横溢し、汨濫し、赤裸々に、もはや恥知
らずなほどにも赤裸々に、と。そして眩む。光の中で、まさに昏む、と、息遣い。ゴック
はゆっくりと、呼吸を整えるように息づかい、自分の耳に、聴て整うとどのいかけの呼
吸の音を聞き、聞き取りながら、うれしい？…と。

わたしは嬉しい？…と、ゴックは今、喜びも無く

誰の喜びも無くて

誰も生まれ出てはいけない。それは

かなしいから。誰の

誰の祝福

誰の歎喜

誰の待望もなくて

誰も生まれ出てはいけない。それは

悲しいから、と、ゴックは、ト殺しろと？

のぞまれなければト殺しろと？ と、ゴックはうれしい？…と。

わたしは嬉しい？…と、ゴックは今、喜びも無く

誰の喜びも無くて

誰も生まれ出てはいけない。それは

かなしいから。誰の

誰の祝福

誰の歓喜

誰の待望もなく

誰も生まれ出てはいけない。それは、と、ゴックは
うれしい？ と、誰が？

誰

誰が？ と、むしろ、と、眩む目が目を閉じたところで、と壬生は
眩みもしない。なにも

ひかりの痕跡なした

そのオレンジの筋

黄色の

朱の

筋以外には、と、眩む目が目を閉じたところで、と壬生は
眩みもしない。なにも

ひかりの痕跡なした

そのオレンジの筋

黄色の

朱の

筋以外には、と、歓喜しよう、と、ささやいた。

ゴックは、その心にだけ、歓喜しようと、ささやくように、まさにささやき聲もてささ
やき、その聲、喉の知らぬ、喉にふれて感じられた聲の、耳に知らぬ、そのままに耳に
あきらかに聞こえて感じられた時に、不意に、思いがけずに振り向いたそこに、ゴック
は壬生が自分をひそかに案じる眼差しに見つめていたのを見、壬生はようやく、息を吐
いた。かくて偲に頷して曰く

思い出す

あきらかに

思い出したところで

思い出す

一体何が

あきらかに

わたしはあきらかに

単なる無意味

思い出す

単なる憐憫

庭につれだした久生

恥を知れ

それは母

恥を知れ

知っていた

恥を知れ

わたしは慥かに

恥を知れ
その胎に生まれた
恥を知れ
それは母
恥を知れ
知っていた
恥を知れ
わたしは慥かに
恥を知れ
その髪をつかみ
恥を知れ
ひきずるように
恥を知れ
なぎたおすように
恥を知れ
砂に
恥を知れ
砂利に
恥を知れ
土にその
恥を知れ
ひきずる体をなするようにして
恥を知れ
蹴り飛ばした尻
恥を知れ
まえのめりに倒れ
恥を知れ
骨は？
恥を知れ
崩れ
恥を知れ
骨はないの？
恥を知れ
自分でくずれおれるように
恥を知れ
あたまから庭の真ん中に倒れた
恥を知れ
洗い流せ
恥を知れ
穢れたものは

恥を知れ
洗い流せ
恥を知れ
穢いものは
恥を知れ
迸った
恥を知れ
ホースの水流
恥を知れ
その飛沫
恥を知れ
わたしは洗った
恥を知れ
久生を、その肉体、魂、いや。…精神？、そのすべてをこそ
恥を知れ
洗い、洗い流そうとした
恥を知れ
久生を、その肉体、魂、いや。…精神？、そのすべてをこそ
恥を知れ
洗い、洗い流し、吐きしようとした、
恥を知れ
私を？——むしろ私をは保存し通して
恥を知れ
かならずしも
恥を知れ
固執し愛したわけでもなくて
恥を知れ
飛ぶ飛沫、飛び
恥を
散る飛沫、散り
恥を
飛び散る飛沫、飛び散り
恥を
玉散る飛沫、玉散る
恥を
聲など
恥を
なにも、なにも聲など
恥を
久生の孤絶

恥を
なにも、なにも聲など
恥を
久生もわたしもおなじように沈黙し
恥を
同じように水浸しに、飛ぶ飛沫、飛び
恥を
散る飛沫、散り
恥を
飛び散る飛沫、飛び散り
恥を
玉散る飛沫、玉散り
恥を
まばたく目は見た
恥
自分の表情をは見なかった
恥、恥辱
空
恥
晴れた秋の
恥、絶望？
わたしは？
恥
知らない
恥、なつかしさ
むしろ泣いて、泣きじゃくりながら？
恥
知らない
恥、かなしみ
むしろ嘔り、忿怒しながら？
恥
知らない
恥、さいなむような
むしろ笑い、わらいとばしながら？
恥、いとおいしい
知らない
恥
自分の顔をは見ないままに飛ぶ飛沫、飛び
恥を
散る飛沫、散り

恥を
飛び散る飛沫、飛び散り
恥を
玉散る飛沫、玉散り
恥を
見た
恥を
そのはだけた腹部
恥を
着衣のはだけた腹部に
恥を
母の
恥を
縦に斬った長い手術跡を
恥を
そこから？
恥を
わたしは？
恥を
知らない
むしろ泣いて、泣きじゃくりながら？
知らない
むしろ嘔り、忿怒しながら？
知らない
むしろ笑い、わらいとぼしながら？
知らない
あなたは、と
わたしは知った
あなたは髓かにわたしの見る、と
わたしは知った
あなたに變らないそのままに、と
わたしは知った
生んだのだった、と
わたしは知った
切り裂かれながら、と
わたしは知った
生んだのだった、と
わたしは知った
私を
背後に怒号が立っていたのだった

恵美子だった
はじめて目の当たりにした
おさない——と
彼女の双渺はそう思っていた。まさに
見開かれた
叡智を宿し
なにもかも知り尽くしている自分を
知っていた幼いわたしの
幼い知性を
なにをしとるんなら、と
それ
なにをしとるんなら、と
恵美子の怒号
なにをしとるんなら、と
わたしをはがいじめにし
なにをしとるんなら、と
諫め
なにをしとるんなら、と
殴りつけるように
なにをしとるんなら、と
私を抱きしめ
なにをしとるんなら、と
何故？
なにをしとるんなら、と
なぜ涙声
なにをしとるんなら、と
聲だけ泣き叫ばせて？
なにをしとるんなら、と
乾ききった瞳で
なにをしとるんなら、と
あくまでも
なにをしとるんなら、と
ごめん…違う
と、ちがう、と、わたしは
ごめん…違う、と
なに？…あれ、と
なにをしとるんなら、と
わたしはささやく
なにをしとるんなら、と
なに？…あれ、と

なにをしとるんなら、と
風呂場に連れ込んだ私を
シャワーで一度洗った後に
拭きとる恵美子に
そしてささやく
恵美子はわたしを
見あげてむしろ
あれって？
戸惑いながら
なにや？…なにや、あれって
笑みかけながら
なに？
窺いながら
あれって？
いぶかりながら
なにや？
恠しみながら
なにいうてるん？
深く
あれって
ひたすら深く案じながら？
なんや、あれって
指
わたしが裸の肌をさらし
自分の腹部に指を這わせた一直線の、…なに？
なにや？ それ…それ
縦の
なにや？
指の
なに？
上から下へ
それ…
落とす
それなに？
指の
あんた、なに
無言の儘で
なにいうてるん？
彼女を
なに？…なにを？

恵美子だけを見詰めて
おかあさんか
唐突に恵美子は気付いた
知っていた、——お母さんのお腹の傷、なに？
そう謂えばいいのだった
不可能だった
その人を
お母さんと名指したことは
学校の教師相手以外にない
教師の衰れむ眼差しを予測しながら
彼又彼女たちの爲に
すこしの悲しみをにじませて
姑息にそうささやいた以外には
病院で生まれたんよ、と
そして恵美子は飲み込むように云った。あそこから
と、あそこ切ってな、…と
あんた、難しかったから
生むのな（——生まれるのな？）
難しかったから、と
大変な思いして、あんた
生まれて来たんで
恵美子は云った。…知らなかった
だれも
わたしも
恵美子も
自分たちが
二人そろってその人
久生を
その存在を
忘れてさえいた事には
祖母は台所に返って言った
悲鳴を立てた
忘れていた
煮物を焦げ付かせていたのを見て
私は島の
木造の
縁の向こうに
居間の果てた
向こうの庭の
光の中に

わたしは見た
久生がひとり
あおむけて
両手をついて身を投げ出し
失神したように顎をだけ
つきだして
何を？
なにを見てたの？
上を見た眼が
ひらいていたのか
とじていたのか
それさえもわたしに知らせないまま
ひかりのなかで
蝶は憩う
二羽
白と黄色
濡れた久生の
ひとつは黄色。それは肩
右の肩。その
水滴の横に
ひとつは白。それは頭
濡れた髪。その
光沢の上
濡れて光る
白濁の上に
蝶よ！
蝶よ！
蝶。…その、それら。蝶ら！

ベランダで、ゴックは不意に思い出す、吐いた…と、どこへ？

その目。

壬生の、自分を見て、あるいは案じ、あるいは愛おしみ、あるいはなつくしみさえし、あるいは鮮明にも恠しみ、いぶかり、危ぶんだ、その目を、と、まさにその時にゴックは不意に思い出した、吐いた…と、どこへ？…と、手摺りの向こう、身をのぞきこませた向こうに、…と。

思いだしていた。触れていた、と、

その先端が

葉の、と

鐵の

かたちづくった葉

その葉

葉が太ももに
こすれるようにふれていた、と、
その先端が
蔦の、と
鐵の
たれるおちるような曲線の蔦
その温度
蔦の日の光の熱のある表の温度
裏の翳の、冷たい、と
蔦が太ももと脇腹
まさに脇腹にも
おしつけるように触れていた、と、
その先端が
花の、と
鐵の
描き出した花…何の？
蓮？
その蓮華？
花が太ももに、脇腹に、時にのけぞり、時におしつけた胸に、腹の正面にも
こすれるように、おしつけ
なでるように
なぶるように
つきさすようにも、と、その向こうへ
どこへ？
と、ゴックが思わずに空の方、ベランダの手すりのその葉、葉と蔦、蔦、蔦と花、花、花
と葉、まさに鐵の葉、蔦、花ゆゑに鐵の葉ら蔦ら花らのほうに踵をすべらせるように返
り向きかけたときに失った、と。
壬生は思った。あなたは、と。
いまゝさに
氣を失い失神した。
いま、まさに、と、壬生は思っていた、そのうしろ向きに倒れ掛かったゴックを腕に抱
き止めながら、——わたし、と。
ゴックは
Em…
と
ベトナム語で。日本語でささやいたあとに我に返って Em…と、そして言い直す——わ
たし、と。
その時にゴックはすでに自分が、唇になにをささやこうとしていたのかさえも忘れ壬生
は嗅いだ。その髪の毛の匂い。胸に押し付けられた頭の重さの、その上に、顎と顎にまでへ
ばりついたその濡れた髪の毛の、かくて偲に頌して曰く

そのかたち
あるいは彼こそは
匂いさえ
ともだち？
腐った
大津寄こそは
肉の腐った
わたしの？
匂いさえ
あるいはもっとも親しい友達だったに違いなかった
骨
知恵遅れ、と
骨髄さえ
当時の言葉で彼は謂われた
それさえ腐ったような
今やその音にして五字、それ
その匂い
音にしてひとつの無聲音を含む五字、それ
その匂いさえ
それは差別用語として
その色
忌まれていたに違いない
そのかたちに
あの遠い北の島國
あざやかな色
その言語の本拠地で
かれら
幼い時
死者たち
十二歳のころまで
その鬚り
知恵遅れの少年と少女は
鬚りの死者たち
だれにも慈しまれるの倫理だった
肉と肉の
だれもが
隙間にも吹き出し
その幼い目で
零れだす様に
決して自分と同じくは感じず

内臓の色
決して自分と等しくは区分しない彼等を
その匂い
故に慈しんだ
翳りの死者たち
後に知る
鉄の葉に
その同じ少女が
鐵の花、鉄の
中學に入った同じ十二歳の時に
葉と蔦に
あるいは一部十三になった冬の後の春に
その投げ落とした
誰もが見た
コンクリートの翳りにも
その同じ少女が
その死者たち
同じわたしたちに排斥されるのを
翳りの死者たち
まるでそれが
食るように
あるべき倫理か作法のように
食りの影も
ふたりいた
その匂いも
ひとは少女
その気配だになく
ひとは少年
赤裸々に
ひとは後藤霞見と名づけられ
食るものたち
一人は大津寄稚彦と名づけられた
翳りの未生者たち
義務教育の中学に
玉散る血が
あくまで別枠で籍を置きながら
空中に泳いだ
霞見は昨日までと違う少年たちと
翳りの現生者たち
少女と少女達と

久生に違いなかった
少女達と少年のまなざしを
いままさに
見ていたに違いない
目の迄
まるで倫理のように
見たことも無い幼児に
まるで作法のように
咬まれ
あなたはわたしと同じではないと
喰い千切られた
あなたはわたしに交わる権利はないと
腸が舞う
まるで倫理のように
翳りの死者たち
まるで作法のように
死んで猶
あなたはむしろあやういと
滅び盡きもしない
あなたはむしろなにをしでかすかもわからないと
翳りの死者たち
まるで倫理のように
あなたに話そう
まるで作法のように
まさにあなたの爲に話そう
稚彦はその目に觸れなかった
喰う
すでに
わたしは食った
十二歳で彼は死んでいたから
ベランダの鐵
なぜ親しんだのだろう？
その花、その
まさに、久生と同じだと思っていたから？
葉と蔦、その
わたしにとって
蔦に花…それら
久生の見ている風景の
照る白濁
峻烈さにかれらの風景は

翳る白の
及ばなかった
白い青み
わたしにとって
翳りの死者たち
久生の見せた風景の
わたしは鉄の花と葉と蔦に
峻烈さに彼等の見せた風景は
かたちをつぶして
及ばなかった
変形された
慰めるように
硬さの欠けたその骨を
誰を？
さらけ出しながら
慰め合うように？
わたしは喰う
彼を？
みずからの
慰めるように
眼球？
どうして？
肛門に？
なにを以て？
頭部の先の不意の開口
何から？
そこに芽生えた
慰めるようにわたしは
十四個目の眼球
十一歳の時にも
喰う
彼を慈しんだ。まさに友人として
見た
家がすぐちかくだったから？
まさに歯に
かけがえも無い、まさに友人として
喰い千切られて
恵美子と稚彦の両親が親しかったから？
咬みつぶされながら
かけがえも無い、まさに友人として

眼球は見た
うまれてはじめて、たぶん、はじめて
あなたに話そう
家の外に見た同じ年頃の生き物だったから？
まさに
かけがえも無い、まさに友人として
あなたの爲に話そう
一人子で、わたしは、そして
奇形にて
彼にはひとりの兄と、ひとりの妹が
奇形に過ぎない
かけがえも無い、まさに友人として
変形のかたち
十一歳の時
肉と肉
わたしの家の庭に遊んだ
骨と骨が
稚彦と
互いに擬態した
その妹
互いの歯で
名前は寶珠、と
喰い千切るたびに
そのままほうじゅと讀む
鼻に立ち
九歳の彼女と
鼻に匂う
わたしの家の庭に遊んだ
その悪臭をかぐ
何をして？
わたしは見ていた
記憶にはなかった
喰い千切られる
何をして？
その眼球を
その記憶の
わたしを見る
途切れめに鮮明に
その眼球を
あざやかな蝶

變形した
色は？
ななめにねじれた
記憶になかった
その眼球は
色は？
押しつぶす
その記憶の
腸のさらした歯の
途切れめに鮮明に
無數に
食べられるかな？
咬みつぶされるまで
寶珠がいった
私を見
戯れて
咬みつぶされても
おそらくは
私を見
こゝろにもないその言葉を
さゝやく
食べらえるかな？
聲も
なに？
ない儘に
蝶、…ね
ささやく
寶珠はまさに私の顔を
あなたに話そう
その目を見て
まさに
彼女は云った
あなたの爲にだけ
蝶って食べれるんだよ
あなたに話そう
さゝやいた？
その花
つぶやいた？
鉄の花
わめいた？

蓮の花？
それともふつうに？
その色
私は云った
ペンキの
おいしいんだよ
日の焼いた
その瞬間に
もはや
寶珠は聲をあらゝげ
黄土色があった
嘘
その花の白
叫んだ
玉散った
なんで？
腐った血がさまざまに
と
重力をなど
嘘
知らない儘に
と
玉散った
なんで？
まさに漂う
流した目の先に
腐った血
目を翳らせた
轟音
庇のおとした
思いだす
青みのなかに
私を見る
地のすれすれに
喰い盡された
蝶は飛んだ
久生の翳りの
背後に私は
その眼窩の空洞に
唐突に擧

げた

八歳のとき？
 稚彦の笑った聲を聞いた
振り返り向きざまに
 そのわたしと
振り返ったそこに
 又はその寶珠と
おともなく
 又はそのわたしと寶珠もろともに
立っていた久生は
 何の關りも無く
聲もたてずに
 関わり獲る可能性だに
私を見て
 なにもない
あきらかに笑んだ
 稚彦の他人の
かすかな微妙な
 笑い聲を聞き、うつくしい
ほほえみに
 美しい少年
あきらかに笑んだ
 だれもがすれちがいざまに
そのときまさに
 稀に見る痛々しいほどの美しさの
わたしは彼女を愛して？
 少年を
愛？
 口を開けば
いずれにせよ
 濁音に音にのみわめく
あたたかな
 美しい少年を
やさしい思いの中に
 だれもが
私を見ていた
 おとなたちは
その双渺は
 だれもが
その懐いた

彼を振り向き見た。匂っていた
思いの形は
鼻の至近に
なにも
おさない寶珠の
いかにも
乳幼児の肌じみた
兆しさえないで
粉ミルクめいた臭氣が立って
彼女は笑んだ
鼻は嗅ぎ取り
手を伸ばせば
姿を見せずに
八歳の？
頭のうえで
幼い手さえ
稚彦は笑った
届くその距離に
かさねて頷して曰く
腕の中に
立てないの？
鳴り響く
轉がり込んだ瞬間に
自分で、もう
その轟音を
彼女はまさに
自分の足では
わたしは聞いた
我に返った眼差しをさらし
歩けないの？
鳴り響き
我を見失い
自分で、もう
何が？
なにもかも
一歩たりとも
鳴り響き
こゝがどこかも
息が出来ない？
何が

見失った眼差しを
もう、口を
何も聞こえないほどに
あきらかに
開け切る事さえ
轟音を聞く
わたしの腕の
できないかにも
もう息さえ
中にだけ
あなたはかすかにそのふたつの唇
できないくらいに
彼女はさらした
それを離れた
もう生きてさえ

かくに聞き、8月13日壬生早朝いまだ明けやらヌに忍び出スかにも息ヲ潜目息を又足ヲ潜め足をかくて寝臺を抜けいまだ眠りたるゴックを放置シかくて忍び出スかにも息ヲ潜め息を又足ヲ潜メ足ヲかくて外廊下を抜け階段を下りて暗きに一度足を踏ミ外さんとシながら忍び出スかにも息を潜メ息を又足を潜め足をかくて壬生居間を抜けテ庭に出テ壬生息を吸ひマきに吸ひこみテ空わずかに明るみはじめたるは東に日の姿現シたるやらんと觀ジ思ふともなくに見上げたル傍らなる樹木それ大樹にそれら茂りたる葉と葉ノ翳りにそれぶらさがりたる無数の蔦と蔦ラにそれ黄色まぜたる桃色に似る花丸ク破れかけたル袋なシテ咲き垂れありき壬生はじめて見たルその花にゴックを起こシて呼ばんとさへ想ひて壬生立ち尽くシて壬生見蕩れその花ノ色冴えたるころなく壬生見蕩れその花のかたチうつくしげなるところ纒かにもなくて壬生見蕩れその花ノ匂ひむしろ酸臭たりて糞尿の腐れるにだに思わずに壬生見蕩れひとり心に歡喜せりかくて頌シて

わたしは音を聞いていた
みあげたその
遠くに
いちばんうえの
その時、たしかに
そのいろは
バイクが横殴り路面に叩きつけられたのだった
よあけのときに
わたしは問を聞いていた
あかるくなっていくばかりか
その衝突の
むしろ
その時、たしかに
いよいよその

誰の悲鳴も、ざわめきも
いろをこくした。そしていよいよ
わめく聲さえないままに
いろをすませた。だから
その一瞬。…あとはただ
あのあおは、このくらしいろの
まったくおなじ
ゆきどまりの、すべての
同じ静寂

すべてののかのうせいのゆきつきたばしょだとわたしはおもった
壬生は腕の中にゴックを抱きしめて、そして抱きしめようという気などあったわけでは
なかった。抱きしめなければゴックは、そのまま顔れて仕舞うに違いなかった。もはや
体をその一瞬に、支える力さえ無くした様に、そして壬生はその耳にささやき、そのさ
さやき声もて壬生はゴックに云った。

——濡れるね？

と、その、ゴックの答えのない儘に、そのややあって、ひらきかけたゴックの唇をさえ
捨て置いたままに、

——まだ、…

と、ゴックが不意に、鼻に立てた息で笑ったのを壬生は聞いた。

——濡れてる。…風邪ひくよ、

と。壬生は言いかけ、この熱帯で？ と。壬生は思った。この熱帯で、ひとりで、風邪を？
と、ぬれたばっかりに、濡れた體を、ぬぐうのがわずかに遅れたばっかりに、と、そし
てその時、頸をへし曲げるように折って上を、…つきだした顎を、日に白濁させかけな
がら、壬生を見たゴックの、かすかにひらいた唇を、壬生は、なにも、と。

もうなにも云わないで

いわないでいいよ

もう、なにも、と、そして心に

心にだけ、なにも、と

もうなにも云わないで

いわないでいいよ

もう、なにも、と、ゴックは心に

心にだけささやき、ゴックは壬生の爲にだけ聲にして笑った。かくて儂に頷して曰く

あなたに話そう

まさにあなたの爲に話そう

まるですでに

まるでもう

あきらかに

隠すすべもなく

死んだ人だったかのように

その十歳の時

大津寄稚彦は地にその身を横たえた
仰向けで
彼は死んだ、と
誰もが思った
仰向けで
あたまから
あふれかえるほど
血をながしながら
学校の校庭の
端の日影のジャングルジムの
夏休みに
久しぶりに誰かが昇った
下級生を押し分けた友達の
もはや
顔さえわすれられた昏い記憶の
その途切れ眼に
取りつかれたように？
いきなり何かを
思い出したように？
稚彦は彼の跡を追った
なにかを彼に
奪われたかのように
だれかを彼に
奪われるその寸前のように
晴れ？
天気は？
雨？
その記憶の途切れめに
稚彦は落ちた
日の直射した一瞬のあと
そのおびただしい青い翳りのなかに、あるいは
降りしきる雨の
飛沫とその
立てて盈たした
轟音の中を？
墜ちる少年
うつくしい稚彦
知性など
なにもない濁音の
あ音でのみ話す美しい稚彦

茫然として落ちたのだった

墜ちるひと

みあげたまなざしは正面に

あるいはその

脚の下に

空を見た

それ

逆光の青

乃至

墜ちる風景

雨の

曇りの

白濁の中に

あめならば

おちる雨つぶにかすかに遅れて

ほぼ

同じ速度で

くらい記憶

その記憶の途切れめに、まさに

叫喚

騒ぎ

わめき

罵るように

無辜なはずの

だれもがだれをも糾弾し

さいなんだような？

轟音

まさに人の口の

口と口とが立てたそれ

まさに轟音

かたわらに

耳のすぐ後ろに

だれかが立てた

遅れてたてた

誰かの口の悲鳴を聞いた

誰の？

その記憶の途切れ眼に稚彦は

眼差しの中で

彼はすでに死んでいた

仰向けで

彼はすでに死んでいた
眼をいまだに
彼はすでに死んでいた
閉じずにいまだに
彼はすでに死んでいた
見開いたままで
彼はすでに死んでいた
瞬きも無く
彼はすでに死んでいた
雨に打たれて？
彼はすでに死んでいた
眼を見開き
彼はすでに死んでいた
太陽の直射の光を
彼はすでに死んでいた
まのあたりに
彼はすでに死んでいた
ひとりだけ
彼はすでに死んでいた
見つめもしないで？
記憶のまさにその途切れ眼に
彼はすでに死んでいた
地に投げた
ものどもの形と
さまざまのものの
翳りが稚彦の
首からしたのみ蔽いつつみ
その色に染め
首から上に直射した
日のひかりはまさに彼の顔だけを
白濁した
雨の中にも？
降りやまない
霧雨の中に？
朝から切れない
ぶあつい曇りの
雲の下で？
その記憶の途切れめに
稚彦はまさに血を流した
頭から

見ていた
わたしは
息さえ忘れて？
頭の上には
飛ぶ鳥の羽音
駆け寄った教師が覗き込んだ瞬間に
夢から醒めて
夢に醒めた
そんな見開いた眼差しのままに
稚彦は立ちあがり
逃げ去るように
走り回った
その教師から
彼の——彼女の？
顔さえもはやない
暗い彼の——彼女の？
その周囲をひとりで
目を剥いて
血を流しながら
稚彦はなんども
ひとりで走った

かくに聞き、8月24日昼壬生寝台が上に肌を曝してありきゴック壬生が上にかぶさりテ肌を曝してありき汗ノ匂ひありき夏のまさに夏の温度ありき熱氣籠りキ壬生耳にゴックが寝息聞き、壬生目を開かず目を閉じたる儘部屋ノ暗きを感じき壬生はすでに知りき空曇りき空いまこそ雨落とさんがまでに暗くクラクして雲に白濁シ白濁の色さまざまに白濁せり雨ハ未だ降ラズ壬生は見ずして壬生はすでに知りき壬生目を閉じたる儘ゴックが頭をなぜ指にその髪のかすかに汗ばミてあるヲ感じきかくて夢を見き夢がうちに花あり花芳香はなチてたダ静かなりき壬生未だみづからが眠らざるにまたうたゝ寐せざるにまたまどろみだになきに見ル夢を見ながらに恠シみて夢を見き鼻ハ匂ひて夢がうちの花の馨を嗅ぎき又花は同じクに嗅ぎきうつつなるゴックの髪または肌が立テたる馨を嗅ぎきゴックが髪またハ肌が馨壬生は何度も嗅ぎてゆゑに此レすでに知りき花が馨壬生が心に心覺ゑなし壬生指先からまるゴックが髪ノ毛先つまミその無機物じみたる触感に何を思うともなくたダ感じて觀じきかくて頷して

花はまき散らされていた
目を閉じた暗闇に
ゴックの寢室のなかに
耳は音を聞いた
身をよじって
壁の向こうで
ないし

まるで
首をすこしでも左に曲げて？
耳の近くで鳴ったように
眼を開けて
響いた音響
目に見させずれば
き音の
拡がるはずの視界の中の
清音のき音の
ゴックの寢室の床に
おそらくは
花は撒き散らされていた
鼠が立てたに違いない
色彩
その聲
白と生々しい赤
吠えはしなかった
紅、紫がかったそれとむしろ
鳴きはしなかった
青みを帯びた紅
鼠は歯を咬みしぼったような
黄色、かぎりなく
声をあげた
白に近づく。黄色、かぎりなく
言語とも言えない
かぎりもなく白に擬態した
彼等の音声
白、…あくまでも黄色
ささやき合う
不可解な程に
いきものたちは音を立てる
青みを感じさせた黄色
その口に
それら
その歯
さまざまの色彩が
そのこすれあう
床の上のみづから光った
うすい羽根にも
光も無いはずの

窓の外に
暗がりの中に
耳をすませば
わたしは怯えていた
その音響の方に
ゴックが
耳を澄ましさえすれば
眠るゴックが花の
私の耳は
咲き
聞き取った筈だった
乱れて
蟬の羽根の
落ち
その音声
すでに撒き散らされた
吠えるでもなく
足の踏み場もない床の
鳴くでもない
床の上にみづから光る花々を
聲というしかないそれら
気付かない儘に目を覚まし
聲
気付かない儘に立ち上がろうとし
私は思った
気付かない儘に床を踏めば
言葉以上のものはなかった
その足の裏は
人の口の
おびただしくもその皮膚の一面に
言葉。それ以上に
踏みつけられた花の
醜いものは
つぶれてにじませた
それ以上に
花汁を感じるに違いなかった
暴力的で
わたしはひとりで
壊すためにのみ存在し
抗いがたく、ただ

穢く
一瞬たりとも
意味をなさず
忘れる事さえできなくに
曖昧で
花のつぶれてにじませた
ひたすらな
花汁をあやぶんだ
暴力でしかない
かたわらに
穢れたものは
わたしたちのすべてに容赦なく
耳を覆うしかない
無慈悲なまでに
破壊の轟音
口を開いたその危機を
その言葉もて
わたしはひとりで
なにを語る？
あやぶみつづけた
愛をでも？

又頷して曰く

床の上に
喉を
その（…うごきも）床の上に
まさに
うすくたった煙（…うごきもない花ら）のように
此の喉を
停滞、（——まさか！）それ（——滞留？）
するどく
煙の（…うつくしく）薄くたった（あくまで、…それでも猶もうつくしく？）停
滞のように
するどく深く
無数の（——立ち止まった、…）花
深く
ちいさな、（…猶も）煙り立った（——不意に。）
深く深く
煙の（——立ち）ような（…立ち止まった？）
どこまでも、そして
小さな（…滞留。）はな

あからさまにするどく
さまさまの（…滞留）
噛み千切りもせずに
極彩色の（——あきらかな停滞）色に
噛みついたままの
色めき（——花よ。）
痛みのように
花ら（——花よ。）
哀しさ
花ら（——花よ）
哀しさ
花ら

ゴックが聲を立てて笑った。壬生はそれを聞き、振り返り見たときにはゴックはすでに笑った聲の残滓だにもなくて、窓を背にした逆光に立ち尽くして壬生を見、そしてゴックの蟹股を壬生は見た。ゴックは明らかに歎くような眼差しで壬生を見ていて、壬生はその足元に白い蜥蜴が一匹だけ、伺い窺い這うのを見た。壬生は、…いとしいひと、と。かなしいの？

愛しい人

かなしいの？

と、ゴックは、あなたは今、と

かなしいの？

なぜ？

かなしいからかなしいの？ と、ゴックは心に、そして壬生は見ていた。這い、匍いかけて立ち止まり、立ち止まって首を纒かにも動かしもしない儘にその眼球にだけ周囲の上下、周囲の左右、周囲の前後、あるいは四維を見て伺い、見て窺う、その蜥蜴の眼。蜥蜴は不意に、…まるでいま、と。

その眼差しの、はっきりとは見つめない端のほうに

見つめていたなにかを——足を？

わたしの足の

爪のピンク色を、とゴックは

はげかけた装飾

見つめながら

ラメのある装飾

あなたは爪など見向きもしないで

爪の装飾

まなざしの決して

三日前に自分で塗った

見てはいなかった

爪の色、その色の

わたしをだけを

光澤。千ゝにきらめく
見つめていた、と、這い、匍いかけて立ち止まり、立ち止まって首を纒かにも動かもし
しない儘にその眼球にだけ周囲の上下、周囲の左右、周囲の前後、あるいは四維を見て
伺い、見て窺う、その蜥蜴の眼。蜥蜴は不意に、笑って、と。

ゴックはさゝやく、その、…笑ったら？（…時には）

喉の奥に、心にだけ、…わたしの爲に

わたしの爲にだけ

笑ったら？（…時には）

わたしに見せる爲にだけにと、ゴックはさゝやき、這い、匍いかけて立ち止まり、立ち止
まって首を纒かにも動かもしない儘にその眼球にだけ周囲の上下、周囲の左右、周囲の
前後、あるいは四維を見て伺い、見て窺う、その蜥蜴の眼。蜥蜴は不意に、——太った？
思い出したようにゴックが云った。壬生はすでに彼女の眼を見詰めて、ただ、その昏い
眼差しを危ぶみながら、——ね？

——なに？

——太った？

両手を広げて見せたゴックの裸身は逆光の中に削られてむしろ、豊満な肉をさえそぎ落
とし、痩せさらばえた印象をだけなげて、だれよりも、と。

壬生は思う、あなたは今、と、壬生は

ひとりであなたは

と

もはや何の希望さえないかの眼差しに見た

と、聲を立てないで、ゴックの爲にだけかすかに笑んだ壬生をゴックは猶も見ていた。息
遣った瞬間に搔きあげられて、めくれあがっていた前髪のわずかが、おともなくたてゝ
落ちた時に、壬生はその毛先が立てたはずの見えない飛沫の玉散るのを想った。かくて
偏に頌して曰く

大津寄稚彦が死んだ後で

北浦渚が

私の所爲で？

その娘

彼自身の所爲で？

郁美と和美に虐げられ

わたしは代々木に移った

辱められて

その四丁目の

涙をこらえて

代々木八幡の近くの高臺に

処刑の日に

十四歳のわたしは久生と住んでいた

涙をさえ失って

わたしと久生を

最後の言葉をつぶやくような
恵美子の弟が引き取った
叱責の声をわたしは聞いた
北浦隆俊という名の
部屋の向こう
いまだ五十をすぎたばかりで
壁の向こうの
髪の毛の見事になくなった彼は
彼女たちの今に
まるで在家の沙門か不良の僧侶に見得た
甲高い聲にささやかれた
電源開発の会社で
叱責の声を聞いた
原発の開発に従事した
渚はいつも
放射のせいで？
自分こそが
その黒く伸びた眉と睫毛
犠牲者だったように叱責した
放射能のせいで？…まさか
渚はいつも
東京の本社で
自分こそが
あやういことには
まさに悲惨のただなかにいると
金の不始末以外の一切に手を貸さない儘に
自分の心にだけ
放射能のせいで？…むしろ焼き盡されてしまえ
その事実をかみしめうつむいたように
坊主あたまに
彼女は娘達を叱責した
落書きをする夢を見た
泣き声を聞いた
例えば口から巨大な像を吐えた
郁美と和美の
蠅の一匹の落書き
すすり泣く
一年だけ一緒に住んだ
泣き声を聞いた
彼の購入したマンションで

郁美と和美の
自分の一階上の
喚くような
最上階近くの小さな部屋が
非議を訴えたかのような
中古で売り出されたときに
泣き声を聞いた
指値して購入した彼は
郁美と和美の
その日当たりのいゝ部屋
やさしい母親
十二階の
三十をようやく超えた
下にざわめく音響など
岡山生まれの
なにも傳えずに静かな部屋
やさしい母親
夜、横たわった
いつでも洋食と
ベッドの上で
具だくさんの味噌汁を作った
車の通り過ぎる音をだけ
わたしは聞いた
耳の近くに鳴らせた
叱責する
わたしと久生はその部屋に放置された
犠牲者の壁づたいの聲のこっちで
夢のような
わたしと久生の
室内より広いルーフバルコニーに
ふたりの爲に
植栽を広げた
用意された和室の畳の上で
夏に極度に
久生の喉が立てる
暑苦しくなる部屋
音声
北浦渚がわたしたちを忌んでいたのを
敢えて隆俊はなにも云わなかった
わたしはすでに赦していた

尋ねさえしなかった
むしろ
まして
二人の幼い子供を抱えた彼女の
非難など
心の内を
大津寄稚彦の死について
わたしは憐れんだ
敢えて渚はなにも云わなかった
七歳と五歳と
尋ねさえ
夫に二十歳も離れた渚は
慰めさえしなかった
毎日六時に歸ってくる
まして
彼女の夫に
糾弾など
わたしと久生の身の上を案じた
大津寄稚彦の死について
わたしたちを忌み
郁美と和美は
わたしたちを排斥しようとは
大津寄稚彦の死など
言葉の端にもにじませないで
知りもしない筈だった
わたしたちを憎み
ないし
あるいは恐れたその心の不安は
ひそめられた夫婦の会話で
言葉の端にもにじませないで
子供たちの
当たり前だとわたしは思った
おさない無知を確信した
わたしは危険な人間だった
傲慢な無防備のせいで
彼女には
ひそめられもしなかった会話の中で
わたしはあやうい人間だった
郁美と和美は
彼女には

あるいは
そして久生は
知っていたに違いなかった
濁音で
その耳と
人の唇が
その
はじめて唇に知ったに違いない
食欲な
聞いたことも無い音響で
容赦もない頭脳で
ほゝえみながら（…あくまでも）
彼女は知りもしないことへの
久生は（…ほゝえみながら彼女は）叫んだ
妄想にさえ色取らせながら
久生は（…咬みつく）喚いた
大津寄稚彦の死を

かくに聞きゝ 8月16日夜壬生ゴックが爲にその肌に口づけゴックかスかに歯ぎシリの音ノみ耳に聞かせき照明等ツけられざる部屋が窓に差シ込む月ノ光又街燈ノ光又隣家ノ照明等の光等にさまざまに照らし出されたルものものらノかたちらそのかたちを浮かび上がりて又ものものらの色らその色をほのかにもあらはしき壬生あお向けたるゴックが上に顔をあげその肌にあたるもろもろノ光らゴックが肌のかたちら又はゴックが肌の色らさまざまに浮かび上がりたるを見かくて壬生ふたたびゴックが腹部に唇をつけかくてゴック不意に唇に言葉ツきてさゝやきゝ…雨

雨？

雨…

かくにゴック茫然たる儘さゝやきたる聲聞きて壬生耳にすでに降り落ち始めたりシ雨の音聞こゑつツけてありたるヲいまさらに知りキかくて頌シて

その光り
暗闇の
光りにそれ自体の色があったとして
何の暗さも感じられない
私の目はそれに感づかなかつた
淡い澄んだ明るさの中
いつでも
暗闇に
見出された
それでも死者らは
みずからの色をは曝さない光にさらけだされた
貪り続けた

さまざまなもの
みずからの
さまざま
乃至
おそらくは
他者の
それら自体の色ではあり得ないはずの
肉、あるいは
さまざまなもの
骨と臓器
さまざまな色らの色立ち
血管と神経、もはや
青く昏く
彼等のまなざしのなかに
深く沈むその肌の色は
自己と他者の境など
ゴックの肌そのものもの色ではあり得なかった
咀嚼する音
知っていた
貪り喰う
黄味さえ帯びた
それら赤裸々な音の
例えば鳩尾の
音響を
ななめに当たった光にふれた
死者たちは見ていた
肌の光澤
もはやそれが
わたしはいちども
わたしだという認識すらないままに
彼女の素肌の色を見なかった
その
彼女はいちども
みずからの…誰かの？
そして
流した血にまみれながら
そして耳は雨の音
それらは見ていた
それは決して
極彩色の

天粒自体の聲ではなかった
血が玉散った
いつも何かが
極彩色の
例えば葉ゝが
肉が脈打ち
こすれあって鳴った偶然の音に他ならず
わたしはまばたく
知っている
暗闇は
雨の水滴に聲はなかった
さまざまな光りに
雨の水滴はいちども聲など立てなかった
むごたらしいほど
わたしは聞いた
あふれかえった
ゴックとともに
侵入する
それら
さまざまな光りを
鳴りやまない雨の音を
せき止めるすべなどないかにも
あまりにも
わたしの錯覚。ほんのすこし
瑞ゝしく
手のひらをさしだせばすぐさまに

ゴックが両腕を広げた儘、不意に壬生を抱きしめようとしたのを壬生は見た。壬生の目
は見ていた。ゴックの唇がすでに口付けを準備して擴げられかゝっていたのを、そして、
壬生は事態を認識する前にはすでに笑っていた。聲を立てゝ壬生は躰をかわした。あや
うくすれちがったゴックは、飛び上がりさえしない出来損ないの鳥か蝶かの羽根か翅か
をも想わせてその手を、——何してるの？

壬生は云った。笑いながら、
——なに？

振り返ったゴックの目に表情はなかった。唇はなにかの言葉をさゝやきかけてすでに忘れ
て仕舞っていたに違ひなく壬生には想われた。たゞ薄く、唇はひらかれていた。須臾に
眉間を擧めさせ、ゴックは壬生の目に泣きそうな壬生の顔を見せた。

——なに？

壬生が、もはや嘲るように大聲に云い、

——何してるの？

逃げまどい、立ち盡くして茫然としたゴックを取り圍むようにその周囲を廻った。ゴッ

クは壬生にもはや知性のかけらだにも感じさせなかった眼差しを剥いて、自分を廻る壬生を見、見、頸を巡らして見、見、反対を振り向いて見、見、のけぞるようにして見、見、あわてて軀をひっくり返そうとしてよろめいたさなかに振り返って見、見、つまづきかけて見、見、壬生にすがろうとして見、見、壬生は身をのけぞらして數歩だけ逃げ、聲に笑い、あくまでからかうように笑い、何度目かに逃げ、又遁れ、ゴックの眉がわなゝいたのを見た。それ、左右別々にわなゝくのを壬生は久生さえ、と。

久生さえ今のあなたのように

あなたのように——久生さえ、と

知性の欠片だにないものたち。その瞬間、その瞬間ら

壬生は、おいつめられたように、久生さえ、と

今のあなたのように、追い詰められた、と

知性の欠片だにないものたち。その瞬間、そのもろもろの瞬間ら

久生さえ、——まなざしを、と

おいつめられた眼差しを、と、久生さえ、と

さらさなかった、久生さえ、と、あなたのように

知性の欠片だにないものたち。その瞬間、そのさまざまの瞬間ら

いまの、久生さえ、と、おいつめられた、あなたのように、と叫ぶように大声で一度笑った壬生は部屋から逃げ出し、…知らない。

想う。

あなたは。と

誰も知らない、と

知性とは？

笑ってるんだよ

泣いてないよ、と

知性とは？

笑ってるんだよ

ゴックは、哀しんでないよ、と

笑ってるんだよ

知性とは？

苦しんでないよ、と、ゴックは、…笑ってるんだよ

いま、わたしは。

と

…知らないの？

心にさゝやく。かくて偲に頷して曰く

知りたいの？

土砂降りの中に

雪菜は云った

激怒しながら

わたしがどんなふうに

…激怒？

わたしがどこで
眼差しにだけ
どんなふう
わたしはひとりで
どんなふうで
忿怒しながら
どんなふうだったか
雨の中で
知りたいの？
その雨、なつかしい
わたしのそれを
土の匂いを、土など何も
店の客にするように
どこにも土などありもしないアスファルトに
自分からして
なつかしい土の
途中で飽きて
雨に濡れた匂いがしたのを
離れた唇が唾液を引く
私の鼻は
教えない
感じ取っていたのだった
雪菜は云って
殴った
ひとりで笑った
どしゃぶりの雨の中で
問いかけも、なにも
久生を
何も聞きたゞしもしなかったその時に
わたしの激怒
ひとりで雪菜は私を拒絶した
激怒？
教えてあげる
ひとりでむしろ
海の近くで生まれた
あめつぶのあたたかい温度を
教えてあげる
恠しみながら？
父親と母親が居た
代々木の町で

教えてあげる
逃げ出した久生
十三歳から家出した
その雨の日に
教えてあげる
逃げ出すなど？
何度も捉まって、家に戻された
渚がその
教えてあげる
春休みの日に
仕方ないから、もっと遠くに
私に云った
教えてあげる
十二歳の私に
ハイビスカスの花…十五歳の時に
代々木へきて、まだ
教えてあげる
一か月もたたないときに
家出した。…んだ。…よ、…ね？
名目だけの卒業
教えてあげる
転校し
両親のお金、…咲き乱れた植栽の、ハイビスカスの。——お金、結構盗んじやっ
て
場所を変え
教えてあげる
名前は替えはしなかった
財布から
恵美子はおはや
教えてあげる
鳴きもせずに
お母さんの、あんま金ない財布の中からだけだよ（…あいつらがめついから。）
大丈夫だ、と
教えてあげる
その唇に
新幹線に乗ったんだよ
ひとりで何度も繰り返したのだった
教えてあげる
おののくように
富士山は見なかった…かな？

おびえるように
教えてあげる
渚は云った
何処にあるか（…あれ、静岡？）知らなかったから（…あれ、右？ 左？）
わたしの耳元に
教えてあげる
その無辜に
東京に（…パラダイス・シティ的な）来た
自分の高揚した眼差しの熱を
教えてあげる
擦り付けて仕舞うかのように
知ってた…もう
泣き声で？
教えてあげる
いないんだよ
わたし、すでに、もう、（きれいじゃない？…わたし）…裸になれば…さ
おかあさん、…ね
教えてあげる
いないの…どこ？
知ってた
知ってる？
教えてあげる
どこ？
飢えて死にはしない。（…わたし）…じゃない？——それ
知ってる？
聞きたくない、と
どこにいるの？
言った不意の私に、雪菜は
久生がわたしたちに
自分が今こそ罵られ
与えられた部屋を出て行ったことは知っていた
自分が今こそ虐げられ
今日は病院へ行く日ではない
自分が今こそ折檻された
東京の病院はいいと
その事実をまさに知った
隆俊はいった
そんなおいつめられた眼差しでわたしを
久生がひとりで
見た

部屋を出たのは知っていた
教えてあげるよ
どこへ？
わたしは見た
この雨に？
出口も、入り口も
どこ？
わかんなくて…どこに
此の雨の日
どこにあるんか…
降りしきる雨の、春の
じゃない？
雨の日に
どこにあるのか判らない駅の中を、さ
郁美も和美も
わたしは聞いた
まるで自分が
忍び込むように
なにも知らないような顔で見ていた
忍び込んで
わたしと渚を
忍び込むように
事実なにも見なかった
入った駅のトイレで
事実なにも知らなかった
わたしは聞いた
郁美も和美も
女ふたり
なにも、すこしも、なにも知らない顔をした
聲…ね？
渚の聲に
女ふたり
追い立てられるように
聲…ね？
久生を案じた
連れ立って入ったらしいんだけど。(たぶんね) ——年上。(あきらかにね)
一途な聲に
すごい、年上
追い立てられるように
若いけど(…わたしの的に年増じゃん?)

苛まれるように
聲…ね？
突き刺され
おんなふたりの聲
差しぬかれ
聞いた。わたし、…
生きた儘に付けられた
その聲が、なにを
炎に焼かれるかのように
なに？
わたしはとびだし雨に打たれた
もうなにを
一瞬だけ
なに？
久生をさがし
はなしてたのか、それってさ
失踪の
その聲がなにを
母を探し、さがしもとめて
それってさ
わたしはひとり土砂降りの雨に
なに？
雨に打たれた
忘れるじゃん
一瞬だけ
忘れちゃったけど
久生はマンションの
聲…ね？
オートロックの向こうに胡坐をかいて座っていた
わたしは聞いた
雨の中で
その聲だけ、はっきり擴えてるよ
ふりしきる
聲、…ね？（ひゞく）
透明な、白い
わたしね、（いまでもみゝに…）わたしね、わたしたたらね？
白濁の雨の
覚えてるよ
雨の中に
忘れられない——忘れようとしても、（いまもなおも…）忘れたいのにな…忘れらな

い、ん、じゃ、なくてさ
どこへも行けるはずはなかった
…ね？
轟音の中で
なんか忘れてない忘れられない何かって
どこへも行けるはずはなかった
聲…ね？
轟音の中で
綺麗な聲だったな
雨の、叩きつける
年増だけど
春の轟音の中で
すっごく澄んでゝ
花散らし？
年増だけど
櫻は蕾み
なんか、きれえ…
声をたてて
性格悪そう
わたしはわらった
きれーで、きれえー…
ただ
年増だけどさ
私の心の
綺麗な…穢れの無い…若干莫迦そうな？
心の中でだけ
二十歳越えたくらい？
声を立てた
聲…ね？
喉が
大學生じゃない？
嘆息？
東京の人って、こんなふうに聲だすんだあって、思ったわたしは
安堵？
見た
憎悪？
ようやくに出たその地上に
怒り？
ようやくに降りたその地上に
歓喜？

新宿の、南口の風景を（おおきい、おおきい、おおきな町）…さがした
失望？
寝るとこないから
絶望？
さがした（みあげる、みあげる、おおきなビルたち）
なんだったのだろう？
どうやって？
濁音付きの
…って
ながい、いの音
べつになんの知識もないし
わたしは聞いた
べつになんの情報もないし
私の喉が
お金だって何もないしさ（マッチはいかゞ？）
たてたその音を
新幹線代、高いから
わたしの耳は
お金だって（きれいな、きれいな、じゃっかん臭い町）何もないしさ
聞いていた。その
綺麗じゃない？
濁音のい音と
わたし（なんか、場違いなところにいる感じ、125 %…）
雨の轟音、いま
びっくりするくらい
わたしは濁音で
夢で見たホントの現実の夢
言葉なき聲で
綺麗じゃない？
ながく
わたしさ、
長く
だから買って。お願い、（マッチはいかが？）だれか…
ささやいた。…と
びっくりするくらい、綺麗じゃない？
そう思った時にはすでに
わたしってさ、
わたしは久生を殴打した
お願い、だれか、（東京って意外に緑り、多いよね？）誰かわたしを
雨の中で

びっくりするくらい、(…普通に草生えてない？ 笑う…) 綺麗じゃない？
誰も人は通らなかつた
救って！…わたしを
雨だから？
金ないんだよね (マッチは、…マッチは)
とおりすぎる車
救って！ (ぜんぶ、すでに、もえつきた。) …わたしを
引き飛ばした水たまりの
寝るところ、(じゃっかんだけ臭い町) ないんだよね
濁った水の
救って！…わたしを
飛び散って
なんかもう、(あれ、なんの匂いなの？) やばい
もはや濁った色さえもない
救って！…わたしを
その飛沫の群れ
すでに暇すぎて、もう (…わきがっぽ。) …わたし
わたしは殴った
綺麗じゃない？
久生を
びっくりするくらい、だから救いなさい、わたしを
雨の中で
とりあえず未来がないんです。だから救いなさい、わたしを
蹴った
過去も捨てたんです。さよなら
髪の毛をひつつかみ
さよならクッソつままない灰色の
わたしは久生を
灰色でさえない苦痛の日常だから救いなさい、(…ひかり) わたしを
足元に
今さえ生きられないわたしをだから (…逆光の中に) 救いなさい、わたしを
立つ声がある
金落としてって。せめて (ビルの窓ガラスがいっぱい、いっぱい、反射した)
すべての音に
ちょっとでいいよ、もう、せめて
濁音をつけた
金くらい、せめて
その唇以外
疲れたよ、もう
人の唇が

ずっと歩いて、(もうぜんぶ、マッチさえ) 疲れたよ
いちども触れはしなかった
もう
そんな濁音
どこなんだよ
わたしは殴り
なに?
わたしはあららぐ
ここはどこ?
わたしは蹴って
かゆくなる
わたしはあららぐ
ここはどこ?
あららぐ肉体と
肌の下さえかゆくなる
肉体の発熱に
何処へ行くの?
わたしはわたしの
あたまのなかさえ
すさまじい弱小を知った
何處へ行けるの?
雨の飛沫が
かゆくなる。目の内側さえ
顔をふたたび濡らした時に、——なにしてるの?
明日はどこ?
背後に女の声がした
かゆくなる。お腹の中
とおりすがりの、六十代の?
どこにわたしはいるのだろうか?
女はわたしを正面に見ていた
内臓の中さえ
母親なんです。わたしはささやき
今日はどこ?…どこで?
鳴いてるじゃない
かゆくなる。汗ばんだ肌が、そして
女は云った。——やめたげなさいよ…
どこで今日は、ねればいゝの?
顧みた
吐く息さえかゆくなった。——その二月
アスファルトの上に

卒業式前の、二月…ね

大股を広げた久生が

運生まれだからさ…十五になったばかりじゃない？

大口をあけて

でもさ

目を剥いて

雪菜は云った——綺麗じゃない？

降る雨を飲んでいた。…どこに？

わたしってさ、だから、アルタも何も通り過ぎて、なんか変なビルの谷間に入っ
たなって

鳴いていた？

想ったらお水のひとが

どこに涙が？

スカウトしてくれたわたしのラッキー

かくに聞き、8月19日壬生市場より歸りたるゴックが鳴らしたるクラクションに庭に
出き此れ内より鐵門に錠下ろしたるが故なり此れゴックがみずからノ外出時に求めたる
ゴックが流儀なりき壬生かゝるを煩雜にも思ひながらに従ひ敢えて抗はざるに庭に出て
眞昼の日差しにまばたき、鉄門が向かふにバイクに乗りたるまま横づけしたるゴック日
焼け除けの頭巾又手袋又サングラス又マスク等にその表情窺わせずて時に鐵門が上に鶏
ノ一羽ありきそれ鐵の葉と葉、花と花、蔦と蔦、ノ飾りの上に器用に身ヲ収めてありき
隣家に放し飼はれたる數羽がうちなる一羽ならん肥へたる身を丸メ微動だにせず身を膨
らませて首をすくませ眼球見開きて一切の動揺も無かりきあからさまに目何ヲも觀テを
らざる顯らかにして生きてある氣配なく又死にたる兆シも一切なかりき此れ剝製に似た
り壬生此ノ鶏にだけ時間の止まりたるを錯覺シ須臾目を奪わしたるにゴック言さく
ねています

壬生かくてゴックが聲を聞きませに今ゴックが爲に錠を外さんトせるを想ひ出したるに
ゴック言さく

にわとりは、ねています

壬生かくてゴックが聲を聞きませに今ゴックが目ノ前にあるを思ひ出したるに壬生錠ヲ
外シ鐵門を開きたるにも鶏押シ開かるゝ鐵門の震盪が上にも變ラズ微動だにせざりきか
くて頷して

白いスクーターにいっぱい

慥かに

ゴックは仕入れた食材をぶらさげ

鶏に時など流れてなかったに違いない

鐵門をくぐり、わたしは匂う。さまざま匂い

あきらかに

さまざま、あるいはゴックの、その肌の

鶏はわたしと同じ時間を

あるいは肌を包んだ衣服の、その生地

共有しないで
あるいは買い物袋の中からの肉の
むしろ
あるいは買い物袋の中からのレモングラス
鶏はどこかへ飛び立ったのだった
あるいは名前を知らない香草の
亡き骸とさえ云えない
あるいはヘルメットの
抜け殻とさえ云えない
あるいはスクーターのエンジンの
実体をまさに
あるいは少しの、ガソリンの
そこに残して
鶏にわたしの顔の右の
日差しが降った
日差しの中で
鶏の上に
不思議に匂い立てさえしない
日差しが降った
その羽根の
わたしの上に
おそらくは穢い
慥かに
さまざまに汚れた
鶏はすでに飛び立ったのだった
その臭気さえも

逃げ出した壬生をゴックは追った。部屋を出て外氣にふれた。肌が一瞬にして日の熱気を感じた。部屋の中は、と。思う。涼しい、その、と。

その翳りのせいで？

ゴックは外廊下に壬生のいないのを見、見取る前にはすでに翳った日の翳りの暗い内に、その振り返った左の階段、涼しく冷やむ。そこに足音の立つのを、それは壬生の、と、あわただしく駆け下りる壬生の。ゴックは一度自分のつま先がコンクリートの床を蹴って刎ねたのを感じ、濡れた髪は飛び跳ねない、と。ゴックは頭の右上のほうに想った。もはや、濡れた乾かない髪は、と。降りた居間の真ん中に壬生は立っていた。待っていた？と、ゴックは、わたしを？ 壬生はうつむいた眼差しを、ゴックの素足のかろうじてタイルに立てた足音に、顧みして我に返ったほほえみをゴックは、赦す、と。見た。あなたは今わたしを赦した。

なにを？

聲を立て、壬生は笑った。ゴックは耳に聞いた。その聲はすでに棄て置かれた。笑い声の響きを潜り、通り抜けるように、わざと身をひく、として逃げる壬生は、——こゝに居

る、と。

壬生は思った。

逃げはしない。

どこにも

あなたを、待ちもしないけれど、俺は、と、そして日差し。不意に、逃げ惑う何かの瞬間に眼差しにじかに降り注ぎ、素手で触れたそれら光り。飛び散るような、炸裂するような。光り、そのうちに壬生は知っていた、ゴックの裸身があばれるように、派手に四肢をばたつかせて追うたびに、飛び散り、飛沫は、水滴は、飛び散り誰も見ない日差しと影の中にきらめき又は翳る。かくて儂に頷して曰く

あなたに話そう

色づいて色めき散らす

まさにあなたに

いろいろの、それ

あなたの爲に話そう

色めいて色取り散らす

あなたは見ていた

いろいろの、肉

わたしは？

いろいろの、その

あなたは慥かに見ていた

骨の色、変形し

わたしは？

原型の

その肉眼で

ほのめかしだにも

まさに肉の温度に啜えこまれた

のこさない齒

その眼窩に開いた

または眼球

眼差しの中で

翳りの骨と

その十四歳の三月に…まだ

肉と、血と

あなたはまだ十四歳にはなって居なかった

その眼球は

九月だから

私を見ていた

あなたが生まれた九月はまだ

肛門に

半年先に過ぎない以上

頭に開口した
あなたはその時十四歳だった
不意の肛門に
あなたに話そう
加えこまれた
まさにあなたの爲に話そう？
その眼球は、それ
あなたの心に如何？
わたしの眼球
その朝に、不意に部屋、…ダイニングキッチン以外には
何度も見た
久生の爲の
わたしはわたしの
久生をあなたから隔離した部屋しかなかったその部屋（…わたしは久生を隔離
した。）

生きたままの
他人が（…わたしの目に）
いわば
あなたゝちへの（彼女がふれないすむように）排斥の爲に用意した部屋
生き霊のかげり
その部屋に
死んだ後の？
人の笑い聲が立ったのを
此の先の
あなたは聞いた
死んだ後の
その時に
死霊の翳り
あなたの心に如何？
床の上に
あなたは何をおもったのか？
ふみつけそうになりながら
拍子抜け、呆気にとられたあなたは
ゴックは私から逃げ惑うように
あなたの心に如何？
わたしを追いかけ
あなたは何をおもったのか？
飛びった
その心に
その笑い声

十三歳の
ゴックの、そしれ
その心に、…わたしの
わたしの？
あなたの心に？
見ていた
あなたに語る
肛門の眼球
まさにあなたの爲にかたる
黒目に夥しい
狂氣、その片鱗さえなかったその聲に
絨毛をなびかせて
あなたの母親だよ？
飛び、飛び散り
知ってた？
飛ぶ血の玉
その聲に
死靈たち
まさに知れ！ 知れ！ まさに今
ないし
いまゝさにこのときに、笑う
ないし生靈？
久生は笑った
死靈たち
あなたは振り返り見て、壁を見た
ないしは過去の
あなたは久生から自分を隠して
とおい未生の
自分はひとりダイニングで寝ていた
未生の比の
すでにあなたは起きていた
未生の靈
その二月
わたしは見ていた
春の日に
そのわたしが
あなたは聞いた
翳る極彩色の
あなたの心に如何？
肉の色に

その人間の聲
歯が咬んだ
めずらしく久生の喉が笑った
その小指を
喉の笑い声
咬みちぎり
あなたの心に如何？
咀嚼して
あなたの心は感じていた
飲み込みもしない
あなたが見
喉さえも
あなたが聞き
その脇腹の不意の開口
あなたがあじわい
でたらめな口は
あなたが触れ
喉さえも無く
あなたが知った悉くが
のたうちまわる
まるでその人の笑い聲に
腸を咬む
錯誤だったと知らされた
異形のものら
そんな思いに
畸形にして
あなたは感じた
異なるものたち
屈辱を？
肉がのたうち
あなたは感じた
噛みつかれて
だれかの嘲弄
聲もなく
あざけりを？
翳りたち
久生の爲に
ふれた
そしてわたしの？
ゴックの伸ばした

あなたの爲の朝食を
ゆびさきが
所詮いつもの目玉焼き
わたしの鳩尾を
朝食を用意しながらあなたは
あやうく爪のさきでだけ
振り向く
ひっかうように？
その時
ひっかうように？
笑い聲はすでに無かった
翳りの靈ら
時すでに
あるいは未生の
十分ばかりの過ぎ去ったあと
わたしの子供？
振り向く
ゴックの腹の
久生の
舌をのぼし
気配を感じた譯でも無くて
やわらかい
久生が居た
ふとい繩のような
明らかに
舌をのぼし
目を剥いて
したたりおちた
久生が居た
その唾液
あきらかに
滅びもしない
口を開けて
永遠の？
その唇のたてた
滅びもしない
人の笑い声そのものをすでに
その翳りたち
忘却し否定し葬り屠ったそのあとのように
指がひん曲がって

唇が濁音の
弾け飛んだ
その唇以外には
爪の間から触手のように
誰も知らなかったにちがいない彼女の
血管がのび
固有の音聲を
滅びもしない
たてようとしたその一瞬に
永遠の？
あなたに話そう
滅びもしない
まさに
その翳りたち
あなたの爲にはなそう
引き裂かれたように
あなたはさゝやいた
内側から
人間の聲で
引き裂かれたような
人の言葉で
その開口
どうしたの？
わたしの翳る
はじめて久生に
喉の開口に
話しかけた気がした
生えた歯の
虫の知らせ？
密集の向こうに
そうだった、事実
眼球が
初めてだった
ふたつのそれが互いにつながり
虫の知らせ？
溶け糺りながら
蟲が知らせた、だから彼女をせめても
散らした体液
葬る最後の施しのよう？
それは匂う

もう、起きた？
匂いち
唇がさゝやく
腐った肉の
まだ…
匂いち
まだ九時だよ
滅びもしない
久生の爲に
永遠の？
早くない？
滅びもしない
あなたはさゝやく
その翳りたち
その聲を聞いた
喰う
久生の耳と
互いに肉と
同じ空間
肉とを
日差しの中に
喰い、喰い千切り
よこなぐりの…
玉散る血の
翳りを投げる
腐った飛沫を
壁に翳り
さらされた
まばたく前に
逆向きに剥かれた
あなたは見た
胃の内側の
久生の口が
粘膜に弾かせ
開かれた儘に
脈打ち
大口を
わななく
顎の関節をひきさくほどの
滅びもしない

大口を
永遠の？
卵は焦げた
滅びもしない？
たぶん、もう…と
その翳りたち
あなたは聞いた
わたしは見ていた
背後にフライパンの
逃げまどい
開かれた口
ゴックの
唾液は糸を引かなかった
あららいだ息と
壬生は見た
笑い声に
その口の
逃げまどって
唇の近くに
逃げまどって見せ
歯の歪んだ一列
ゴックの爲に
まばたきかけた
笑い声をさえ
その一瞬に
殊更に
まるで出来過ぎた奇蹟のように
わざと殊更に立てて見せながら
羽音が立った
滅びもしない
開かれた
永遠の？
窓に
滅びもしない
カーテンのはためきを
その翳りたち
かいくぐった進入
逆向かれた、それ
レースのカーテン
血まみれの胎児が

軽く、さわぎ
ゴックの子
遮光カーテンが垂れる
未生の子
聞いた
内臓をすべて
その羽音
全部さらしながら
灰色の鳥の…鳩？
這って食う
その
わたしを見つめた
聞いた
その眼球を
羽音のひゞく
わたしのかげりの
狭い空間
その眼球を
室内に——よこなぐりの
立どった
よこなぐりのひかりのなげた
不意にゴックは立ち止まって
なぐりつけたようなその翳りの青さよ
私の前で
見た。むしろ
鼻をすゝった
あなたに話そう
その事実には
まさにあなたの爲に話そう
気づきもしないで
叫びかけた聲さえわすれて
忘れた
久生は目を剥き
まばたきさえ
久生は見た
忘れた
その鳥を
まばたきさえ
聞いた
見つめた眼

その羽音を…鳥、と
上気した？
壬生が心にさゝやきかけた時に、その一瞬に
私を見た
鳥は翻って窓から飛び出す
テーブルの向こうの
壬生は見た
中腰でゴックはあららぎ
鳥は翻って窓から飛び出す
いろいろに
空は青い
色どり色づく
鳥の不在
色めいたいろいろの
羽音は耳の中にだけ
肉の色、その
いまだにきこえている気がしていた
極彩色の
息遣う
翳りたち
自分の鼻の呼吸音だけ
滅びもしない
壬生はたしかに聞き取りながら
永遠の？
走った
滅びもしない
その瞬間に
翳りたち
久生は走った
まさに胎児に
その狭い
未生の胎児の
ダイニングの中を
血みどろの歯に
開かれた
咬みつぶされる寸前まで
窓のサッシュに二の腕を
私の目は見ていた
こすらせながら
私の目は見ていた

わたしは見た
わたしを？
その久生
だれを？
ベランダの日の直射にきらめき
眼球が飛び散る
白濁に
体液が飛び散る
かたちのすべてを奪われた一瞬があった
体液が
鳥の羽音？
逆る
のけぞるように
大口を広げた
背をひん曲げて久生が跨ぐ
背中の唐突な開口に
鳥の羽音？
上向きの嘔吐？
その手摺を
ひだひだの皮膚が
青
ひだひだの皮膚が
その光り
束なって
色の無い
溶けだしながら
あからさまな光
したたって
奔流
溶けだしながら
光の？
凄惨な？
鳥の羽音？
まさか
あなたを迎えに来たのではない
凄惨な？
わたしは思った
わたしは思った
久生の爲に
飛び散った飛沫

すでもう
あるいは愛おいしい
鳥はすでに
厳かな風景？
飛びさって行った
イノチの荘厳？
あなたを取り残しさえしないで、と
凄惨な？
見ていた
まさか
わたしはそれ
凄惨な？
手摺の向こうに
色づいた
墜ちる久生の両腕の
肉がちぎれて引きちぎれ
屈曲したままの
のけぞるように
かたちを照らした
空間に脈打ち
白濁のきらめき
かくに聞き、8月26日早朝壬生は夢を見キかくて煩して
空を見ていた
心さえ奪われていた
その芳香に
おそらくはあお向けているわたしの
空を見ていた
周辺にそれら芳香は甘やいで、そして
いやがうえにも甘く、ひたすらに
蜜の馨？…あまく
空を見ていた
なにが匂うのか、むしろわたしは疑いさえ無く
なにを心に探そうとするわけでもなく
空は青
空を見ていた
見るしかなかった。もはや眼玉を
右へ、ひだりへ、動かす纒かの力さえ
わたしにはすでに与えられてはいなかった。だから
空を見ていた
瞬きもせずに、その青い、ひたすらに眩む

逆光を、薰り立つ
甘やく芳香、耳に鳴る。鳥たちの
空を見ていた
無数の鳥たちのそれら、羽根の羽搏く無数の音ら、あまりにも
まぶしすぎて私は
感じた、網膜が
空を見ていた
痛みとともに焼けて行くのを。網膜が
痛みとともに干からびて行くのを。網膜が
痛みとともに変色するのを
空を見ていた
鳴り騒ぐ羽音ら、わたしは見ていた。青の輝きに
踊る至近の黒い影ら、それら、恐らくは鳥たちの嘴が
わたしの眼球を抉ろうとした。だから
空を見ていた
むしろ、その向こうの青を、わたしは鳥の嘴の突き刺さる翳りの
黒い色の
一瞬を
空を見ていた
わたしは見ていた。その向こうに空を
嘴がささり、それ、黒い翳りの
向こうに空を。なんども
空を見ていた
なんどでも、深く突き刺さる嘴の、痛みと鳴り騒ぐ羽音のざわめき
匂い立つ
正体の無い甘い匂いの只中に
目を開いたまま

夢から醒めたように？ ゴックは立ち止まった。まるで、——ゆめから。いまゝさに…そしてゴックは、…夢から、あなたは。我に返って、——ひとりで夢から、ひとりでに覺めたかのように、と。壬生は心にさゝやく。立ち止まったゴックはひとり、自分の息を整えようした。胸が揺れ、息はあららぐ儘だった。壬生は何度か鼻で笑い声を立て、短くだけ立った自分の笑い声を何度か耳に聞き、頭のどこかで反芻した。その響きを、ゴックは…やばい、と。

——疲れた…

吐きそう…と

——ね？

吐く？…と、…また？

——疲れない？

吐きそう、と。ゴックは想い、さゝやく

——大丈夫？

壬生は應えた

——俺？

——大丈夫そうだね

——疲れたの？

——疲れたよ

——辛そうだもん、と、ゴックは思わずに、…だって、妊婦だよ？ そう言いかけて、我に返ったように、そして息を飲んだ。熱がある、と。ゴック思った。おもわずに掌を自分の額にあてそうになり、思い直し、すぐさまに額に手を当てた。息をあらゝげながらむしろ、皮膚は冷えて、おどろくほどに掌は、他人事じみた冷たさを感じた。——どうしたの？

壬生がさゝやき、今のソファの向こうから身を近づきかけた時に、

——疲れた…

思い出したようにつぶやいたゴックは壬生の眼の前を、すれ違いながら通り過ぎた。ゴックは外に出た。玄関の戸は、開け放した儘だったから、それをそのまま通り抜けて朝の、その日差しの直射に肌をさらし、誰かが鐵門の飾りの鐵の葉と花、花と蔦、蔦と葉のしろいそれらのかさなりの向こうから、肌を曝した自分を見出すかもしれない事は知っていた。知りながら、かならずしもその事實にはっきりと気づいた気がしなかった自分の心を恠しみながら、心に恠しみがあつたことにゴックは気付かない。壬生はゴックの、壬生にだけさらした背中のなめらかな筋肉と、贅肉と、骨格にながれる鬚りの色の、揺らぐともなくかたちを崩してゆくのを、時におもわず自分の爪に指先でさわりながら、壬生は見ていた。不意に自分が失神したような實感があつた。ゴックに、そして、…熱？

と、ゴックは、…熱が？

ふたたび今正に、自分が狭い庭の中で、狭い庭におびたゞしい鬚りをなげおとしていく重にもかさねた樹木、その二本の並んだ向こうに、と。気付く。ゴックは見ていた。ゴックはまさにそれに気付き、まきに見た。白い門の、白い壁の飾りの切れ目の鐵のは葉と花、花と蔦、蔦と葉のしろい色彩、花ら蔦ら葉らの散亂その向こうを、ゴックは見ていた。ゴックはまさにそれに気付き、まきに見た。道。道には向こうに、隣の壁が、そして植栽が、路上の照りあがった白濁。鬚りの下に、色彩が不意の奔流を曝して荒れ狂い、樹木の？ 赤い椅子…プラスチックの？ そしてバイク。二台の黒と白、と…熱？

と、ゴックは、…熱が？

ゴックが力尽きたように、尻から地面に座り込むのを、壬生は見ていた。すぐさまに土の上に、仰向けて横たわつたゴックは両腕に顔を隠した。目を保護しようとしたかのように、…日影。ゴックが横たわつたそこに、たとえ目をあけて正面を見ても、そこには樹木の茂つた葉のさまざまの、木漏れ日さえないことを、壬生はその目に知っていた。かくて偲に頷して曰く

わたしは覺えている

覗き込んだ

ベランダから下を

知っている

部屋の中からは、たとえ十二階でも

必ずしもそこが
地上をはるかに離れた上空だとは
眼差しは気付かない
まるで地上にいるかのように
一變する風景
ベランダから下を見たときに
顯らかに
すでに知っていた事實を
眼差しは告げられて
眩む？
高さに？
もう十分近く立っていた
そう思った
久生がそこから
消えてから
消失
まさに
消滅…消滅？
滅びはしない
ベランダの下に、そこにまだ
大半の細胞は
その機能を失いながら
いまだに息づいていた筈だった
すでに死に
死に絶えるには早すぎる
すでに死に
もう久生は
その十分くらい？
茫然としては居なかった
まるで卑屈な裏切り者？
わたしはむしろ
卑怯な偽善者？
奇妙に廣がる安堵
わたしは彼女を裏切った
安堵？
まるでなにもかも
私の人生すらもが？
息絶え、行きつき、行き止まって安息
私の人生さえもが終わり、すべて
片付いた後の、終わり果ての風景を見るように

そんな終わりの向こうに、向こうに、向こうに
いわば彼岸？
わたしは安堵していた、その
安堵にした自分にむしろ
もはや
もう？
そんな終わりの向こうに、向こうに、向こうに
いわば彼岸？
感じられた倦怠
皮膚の内側をすりむかれたような？
糞まみれの豚ども
吐く…息を、わたしは…
我に返った氣もしないまま
そんな終わりの向こうに、向こうに、向こうに
いわば彼岸？
何を確認するために？
ベランダに
母の、母の、母のあとを追う？
出た瞬間の——光り！
明るさに目が
光り！
眩む一瞬の、そんな終わりの向こうに、向こうに、向こうに
いわば彼岸？
私は未だに茫然としたままで
なんら、なんらの混濁
私は、にも拘らずに、冴えた…
なんら、なんらの混乱
ただ
悲しみよ！
醒めて冴えた…覚醒感？
飛びたった！ 悲しみよ！
わたしは外気に、そして外の音響に一気に身をそんな終わりの向こうに、向こう
に、向こうに
いわば彼岸？
身をさらしながら
飛び立った！
奇妙な迄の静けさ、なぜ？
人が一人飛び降りたのに？
光り！
眩む一瞬の、そんな終わりの向こうに、向こうに、向こうに

いわば彼岸？
私は未だに茫然としたままで
わたしは覗き込んだ
覗き込み、吸い込まれるような
まさに吸い込まれるような
上空の風
わたしは
吹け
気が遠くなる感覚の一瞬
吹け上空に、その上空の
終わったの？
やさしい風たち
あなたはもう、終わったの？…と
死者たち
壁にへばりついた
はるかな下に、その路上
肉、極彩色の
アスファルトの上に
死者たち。それら
見出された
不滅の
人だかりは
玉散る
なぜなぜこんなに、なぜなぜこんなに
久生の死んだ——砕けた、不意の、誰も予想だにできなかった不意の
吹っ飛んだ？
死躰が落ちてきた、死体の
吹っ飛んだ？
叩きつけられて死んだ死體の…生きていた
彼女は部屋では、ここではまさに
死んだ肉体を取り圍んだ人々
人、ひと、そして
聲もなく？
なぜ
頭。かれらの…
なぜなぜこんなに、なぜなぜこんなに
まさか心に混乱は
静かなのか？ 遠い底に
冴えて
底に

醒めて
突き当りに
醒めて
叩きつける重力…重力の
さめさめ冴えて、そして
血まみれなのか？
私の混亂、思い乱れたわけでもない
血まみれなのか？ それさえ…それさえ…
ひとりだけの、わたしの
聲
とおくにだれかの、だれもが、だれかが、そこ
底で立てていた聲が
聞こえるように
聞こえて仕舞ったかのように
十人ばかり
サイレンの音
救急車の…誰が？
誰がまだ、その死人がいきているなどと？
のぞきこみ、わたしは見ていた
まさか、だれが
哀しみ？ やがて…と、思う。わたしは
だれがまだ生きているなどと？
哀しみを感じるに違いない
どこのだれが？
心が落ち着いたら
彼女…母の
彼女の爲にだけ
と

わざとあなたに見蕩れる、と。壬生は、仰向けたゴックの傍らに座って、そのショートパンツの下に、ざらついてさゝらと、粒だつてつぶつぶと、生地越しの土の触感、あなたは感じる、と。

その肌に

肌にじかに

小さな堅いわずかな痛さの膨大な無数

さゝやき、心に、壬生はゴックの、腕の覆い隠した下の、閉じられた眼差しの前で、殊更にゴックに見蕩れたような表表情を顔に作ろうとして、豊満なおうとつ。肥満すれすれの。あるいはすでに肥満しかけた。頸に横に肉附いた皺が二本だけよる。かならずしも、自分がそのいかにも女じみた肉體に、…雪菜は、と。

むしろ痩せた、羸せた小さすぎる少年のようだった雪菜の肉軀は…と。

さゝやき、心に、壬生はあえて見なかった。そのさらされたゴックのからだは、寧ろ目

を奪われたように唇の、かすかに拓かれた唇の感じる、と。
吐きそう
また？
はきそう
また？
ささやき、ゴックは心にささやき、かくて偏に頌して曰く
彼女を壊そうと思ったのではなかった
あなたに
完全に。…無惨な、…むしろ
あなたの爲に
もう取り返しもできないほどに
まさに
彼女を壊そうと思ったのではなかった
あなたの爲に話そう
完全に。…無惨な、…むしろ
雪菜はささやく
もう取り返しもできないほどに
覚えてる？
汗まみれの
雪菜はその
自分の肌をなすりつけた
六月の雨
雪菜に
店をさぼった日の朝
わざと
その六時あけかけた
エアコンを消した室内に
空の雨
なぜ？ あるいは嗜虐
初めて見たとき
まさか…
わすれた？
彼女を汗まみれにしてやるために
おぼえてないよね？
いやがる雪菜に
あんた、さ
その耳元に
しってた？…あんた、さ
いうこと聞けよ
こ猫ちゃんみたい

さゝやく聲を
ぜんっぜん、ぜんっぜん可愛くない
棄てられたいの？
可哀想なくらい可愛くないの
嘲弄し
可愛くない、…ね？
いいよ。別に
こ猫ちゃんみたい
愚弄し、ことさらに
綺麗なんだけどさ
所詮、たいした女じゃないじゃん？
身寄りないの
その神経を
…うちもか
風俗嬢？
すぐみて判るけど
心の底まで
匂う、みたいな？
しかも家出人？
でもさ
逆剥くような
わたしどうだった？
且つ未成年？
なんか、すごい傲慢
あざけりの
かわいすぎて見蕩れた？
されど病氣持ち？
すげえ、むかつく傲慢
聲、わたしの口に
見蕩れた？
莫迦にしてんの？
傲慢すぎて…
唇に
わたしのこと、いつすきになったのかな？
棄てられたいの？
腹もたたない…
聲
と、いう、なんかナイーブそうな質問ぶつきたい感じなの
お前、価値あるの？
知ってた？

わたしは聞いた。雪菜を傷つけ
ね、あんた、じつはさ
棄てられたいの？
女なんて
毀していく聲を、わたしはひとりで
わたし誰からもね
彼女を
可愛いねって、…もう、さ
聞いていた
知ってた？
彼女を壊そうと思ったのではなかった
やばい
汗まみれの肌に
女なんて自分の家畜だくらい
完全に。…無惨な、…むしろ
やばいなんで？
ことさらに
下僕だ状態？
もう取り返しもできないほどに
勘違いだからねそれ
汗まみれの
やばいなんか、かなしい
愛の確認？
敢えて敢えて言うそれ
欲望の奔流？
勘違いだからね。いないよ
雪菜の体に発情を？…わたしが？
もう、いや
まさか…
いないよほんと、私以外に
齒をかみしめた
なんかね、もう…
雪菜は私の
あんたの家畜
私の下で
わたし以外に
齒をかみしめた
もうぜんぶ嫌
四肢を固く
ぜんぶ、かなしすぎてね…ぜんぶ

堅く力んで
なんで？
振るえる身軀
料理なんかさせないでよ
あえぐ息
熱、ある？
もがく肉體
やばい、もう、時間ない…
まるで今
熱、出た？
どうしようもない快感の中にのたうつように
結婚とか？ そういうの…
彼女はひたすら不快な痒み
別に、それはそれで、結婚してもいい…なんかさ
その皮膚の内の
自分が見たことのない風景って
痛みにも似た痒みに暴れ
そういうのあるの、なんか、嫌
必死に耐えて（もはや堪えようともせずに？）
さびしくない？
わたしにすぎた腕に垂れた
死にたい
わたしの汗に
死にたい
彼女を吹き出す
死にたくないけど…
自分の汗を
怖いじゃん、…ね
自分にふれて
何が怖いのか？
他人のような
知ってる？
自分の分泌物にふれ
死ぬの、怖いじゃん
雪菜は目を剥き
やっぱ、怖いじゃん
雪菜は齒を喰いしぼり
何が怖いのか？
彼女を壊そうと思ったのではなかった
心にね…

完全に。…無惨な、…むしろ

春が来たよ

嗜虐？

心にね…

もう取り返しもできないほどに

聞いてみた

自虐的な嗜虐？

心にね…

まさか…

吐きそ。くさっ

さゝやく

痛いとか、苦しいとか

おれたちは愛し合うべきだから

死ぬまでの

と

所詮、それ、怖がってるだけじゃね？

おれたちは、おれたちで、おれたちだけでも愛し合わなかったら

ちがうの？

…ね？ と

だったらさ…

だれもの予測通りになる

こわくないよ、こわくないよ、もうぜんぜん、ぜんぜん、ぜんぜんなにも

じゃない？

なきそう

あんなやつら

こわくないじゃん。だって

あんなやつらって…

わたし、いきてて

どうせ

いきてていきてて

あんなやつら、どうせって

ひっしひっしにいきてきていきて

俺たちの復讐

いたいにくるしいのもう…さ

じゃない？

まいにちだよ

おれたちがいっぱい、幸せになることが

しってるよね？

じゃない？

くるしいんだよ。わたし

だれもおどろいちゃうくらいに
もうすでに
じゃない？
いたいんだよ、かゆくて、いたくて、もう
しあわせいっぱいになっちゃうことが
やばい、はく
おれたちの、おれたちだけの
かんけいがない？
世界への、——世界という
しぬいたみ、くるしみ…
俺たちのついにふれなかった
かんけえねえっておもったら
いたましい大きな他人への
あれ？
せめての復讐
わたしさ、ぜんぜん
おれたち、おれたちの爲にだけ
あれ？…ゆき？
おれたちでだけ幸せになる
ぜんぜんぜんぜん
じゃない？
いきるのらくになって
汗と涙に
はきそ…
雪菜はもはや
だからさ、…
聲さえたてない

かくに聞き、時にかくてゴック顔覆ひたる腕を土が上に投げ出し壬生ゴックが腕を土汚
シタルを見き時にかくてゴック目を開き迦久氏壬生ゴックが目を開きたるを見き壬生見
るにゴックが顔茫然とし茫然としたる儘にゴックが目上を見上を見ル儘にゴックが唇迦
ス迦に開かれ開かれたる儘に嘘をつかないで

ゴック心に想ひて心がうちにのみさゝやきて思へらく嘘を
嘘を？

さっきからそこでなにを？

あなたはなにを

嘘をつかないで

まるでそこにだれも

誰も？

だれも

あなたさえも

いなかったかのように…ひそめられた息が

見ていた

息遣うのだった

あなたはそこで

息遣うのだった

なにを

息遣うのだった

なにを

かくて壬生ゴックが額にへばりつきたる髪ノ濡れた髪ノ濡れたルを指に撫でゝかくて額
にへばりつきたる水滴を指先に撥ねて水滴は散りきかくて頌して

なにしてるの？

わたしたちはみんな狂ってる

私は云った

わたしたちはすべからく平等に

ゴックはなにも答えなかった

さまざまな狂気の中にあつた

なにを？

あの子のそばに

日差しの中に

あの子のそばにいるときだけ

さらされた裸身に

あの子

見上げれば

あの子のそばにいるときだけ

上に茂っていた筈の樹木

あの子、もう

その名前さえ

見たことも無い

そのいつか咲かす

見たことも無い

花の色

素直で無垢で

花のかたちさえ

自然で自由な

わたしには知られていなかった樹木の

笑顔、するんです

葉、葉ゝと枝

大津寄仁枝はそうささやいた

枝、枝ゝと葉

恵美子に

それら
いつ？
茂り合うそれらの膨大なかげりは
宮島で、島の
蔽った
方言で、…どんな？
ゴックの白い肌を
忘れた
脛にいたるまでの
かろうじて
その豊満な
鮮明に
肥満すれすれの
残された意味の
肉の息づき？
記憶された意味を
脛から下だけ
わたしは無残に翫ぶ
日は直射した
あの子って
脛から下だけ
その逆光
陽の光に白濁し
まさか…
脛から下だけ
あの子って
それは臆て黒く
逆光の眩み
褐色に
まさか…
灼けた色をさらすにちがいない
あの子って、あの子の
と
記憶など、所詮歪んだもはや誰のものともつかない記憶の
何をしてるの
誰の記憶？
ふたたびさゝやく私の聲に
誰の話？
ゴックはなにも答えなかった
まさか…

なにを？
素直に笑うの、…ほんとに…
顔を覆ったゴックは今
あの子って
なにをも見てはいなかった——雪を？
まさか…
その閉じた眼の内に
あんこすなをにわらうとられるけえな
降りしきる雪の夢をでも？
あんこんまえンだけで
意識は常に何をかを見た
あんこんまえんをるときだけあんこ
瞼を閉じた目の上を
ものすごをなすなをにわらうてみせるけえな
ゴックは腕に覆い隠し
わたしは思っていた
ゴックの腕は二本交差し
その逆光
顔を覆ったゴックは今
仁枝が恵美子に、稚彦の
なにをも見てはいなかった——雪菜を？
稚彦の話をしてるのだと
雪の中に顔中から
稚彦は私の前でだけ
血を流して死んでいく
私の前でだけ素直に笑う
自殺の雪菜の
わたしは狂気の中にいた
最後の自殺を？ わたしの見た
いつでも
夢の中に？…わたしの孤絶
見出したそれ
ゴックは雪菜の聲など知らない
空の青さえ
わたしの孤絶
正気ではなかった
ゴックは雪菜の顔など
振り返った仁枝の目が
わたしの孤絶
私を見た

ゴックは雪菜の肌の褐色
此の子ってね
わたしの孤絶
私を見ながら
ゴックは雪菜の褐色のあざやかな——まるで
此の子って、…と
南国の…東南アジアの…フィリピン
額に字
ベトナム？…異国の血の入った
稚彦に似て
ハーフの少女だったかのような
整い切った仁枝の顔の
わたしの孤絶
額に痣
ゴックは雪菜の肌の匂い
赤黒い
バターを塗りたくった食パンのような？
南米大陸じみた痣
焼いた食パンに
稚彦の前だと、素直に笑う
溶けるバターの
逆光の中で？
焦げた、甘い？
その痣の周囲の
わたしの孤絶？
産毛のきらめき
記憶になど
此の子って
なんの固有性があったらろう？
私を見ながら
わたしの孤絶？
此の子って
わたしの知る
恵美子の爲に
ゴックの知らないさまさまに
私を無視して？
なんの固有性があったらろう？
此の子って
記憶し、知っていたことに
むしろ

何の孤絶が？
此の子って
臭った
むしろわたしをだけ亡き者にして
なにも…
此の子って、稚彦の前でだけ
肌が、ゴックの
思い出す
なにもわたしは記憶しなかった
仁枝の顔の
濡れた髪さえ、匂い
なつかしいまでの
匂いたち、わたしはなにも記憶して居なかった
ひそかな、不意の
なにも知らずに
唐突な歓喜
その匂い
思い出す
その肌の
その髪の毛の
髪、ぬれた髪の匂いさえも
匂いさえ
わたしはなにも知らなかった。まざまざと
逆光の中で？
知り盡くし、何も知らないにひとしい
わたしは素直に笑った
狂態のなかで
稚彦のまえで？
私の無知
わたしはすなおに笑っていた
圧倒的で冷酷な迄の
稚彦の前で？
私の無知に、わたしは知る、その
寶珠は稚彦を、あくまで
肌の匂い、バターを
人の
まさにたっぷりと塗りたくったグラマーな
畸形の出来損ないとして
食パンのようなグラマーな
その

痩せた雪菜の肌は匂い、まるで
幼い眼差しの中に
少年じみた？
侮蔑する
だから？
寶珠は容赦なく
焼いた食パンに溶けるバターの
稚彦ひとりを嫌悪した
グラマーなバターの
寶珠は容赦なく
少年のような？
稚彦ひとりを排斥した
焦げた、甘い？
その眼差しの
だから？
憎しみの熱を
わたしの孤絶？…雪菜の
おびた風景の中で
少年のみ抱いたに違いなかった
だれよりも
わたしは、ひとりで
だれよりも
雪菜にはその
まわりのだれもが
女にのめり込んだふうを装い
あやぶむほどに
ひとりで、わたしは
まわりのおとなが
と
あまわりのこどもが
何をしてるの
あやぶむほどに
みたびさゝやく私の聲に
寶珠は哭いた
かわかしてるの？
もはや涙も
わたしは聞いた
流れない目の茫然に
なにを？
もはや泣き声も

かわかしてるの？

吐き出ない口の愕然に

ゴックはさゝやき

寶珠は泣いた

かわかしてるの？

そこにたち、そこにはだれもいなかのような

夢の中に

抜け殻で

夢を見るように

稚彦の葬儀に

夢の中に

気付いた

茫然として？

寶珠

ささやくゴックの聲を聞いた

仁枝は稚彦を忌んでいたに違いなかった

壬生は翳りの中にゴックが不意に我に返ったのを見た。その眼差し、ふいに息を吹き返し、いまさらに今に黄泉返ったかのような、…いま、と。

あなたはひとりで生き歸る

壬生は

ひとりで、そこで

と

だれの承諾もなくに

と、壬生は、見ていた、ゴックの唇。それはいまゝさにかすかに開きかけてもうすでに、と。それは知る。いまさらに、唇はすでに開きかかっていた。と、壬生は、見ていた、ゴックの脛。それはいまゝさにかすかに開きかけてもうすでに、と。それは知る。いまさらに、脛はすでに完全に開き切っていた。なにを今更開きかゝり、そして開きかかった眼差しの中に、いまさらに何を、殊更になにを。瞬いた、ゴックの眼差しの瞬きの一瞬を見て壬生は、…いま、と。

あなたはひとりで息き歸る

壬生は

ひとりで、そこで

と

だれの承諾もなくに

と、熱があるよ、と。

ゴックはささやいた。

まるで自分の爲にだけ、…壬生の見つめた眼差しに見つめられた儘に、その見つめられた事實に気付きしなかった一瞬を擬態して、その一瞬を停滞させた擬態のなかに、——ね？と。

——わたし、熱があるよ？

顯らかな疑問形に、壬生は、…外国語だから？

發音上の、さゝいなミス？

——熱があるよ？

ゴックがさゝやく聲を聞く。

——熱？

壬生のさゝやく聲を聞く。

——熱が？

夷族第三

2020.09.10. Se-Le Ma

修羅ら沙羅さら4

著 Seno Le Ma

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
